金百五兩也　第十五等　史生
壹人
内
金六拾兩也　〃　支度料
二倍增分
金四拾五兩也　〃　日當
一倍增分
金八百四拾兩也　第十六等ノ二等　准省掌
拾人
内
金三百九拾兩也　〃　支度料
二倍增分
金四百五十兩也　〃　日當
一倍增分
〃

（附記二）

清國交際拙議　名倉大錄

清國交際は
皇國にて卓然として特使を被差遣候方可然又英法等の紹介にて清國と交誼を取結ふへきの說あり管見にては斷然として然るへからさるなり其不可大約五ツあり左に并列す
一竊に政府成算の向ふ處を考ふるに始めに清國と隣交を結ひ次に西洋各國へ大使を被差遣哉の由なり然るに英法等に紹介を申入るゝ時は其勢西洋への大使を先にせさるを得す且
皇國にて支那と交を締ふ事は西洋諸國の好まさる處なり其不可一なり
一西洋諸國にて我隣交を不好とき大に通信の妨碍を爲すへきなり然らは遂に我をして清國と交誼を締ふ事を得さらしむへし既に舊幕の時其事あり實に殷鑑不遠なり是其不可二なり
一抑
皇國は堂々たる獨立國なり然るに英法等の紹介を取るは是れ所謂依人爲事者なり恐くは笑を取り侮を受るの媒介となるへし其不可三なり
一皇國と清朝とは從來魯衞の政にして唇齒兄弟の國柄なり

然るに特使を遣す事能はすして遠く數萬里外の西洋に紹介をなさしむるは愚にして且迂ならすや是其不可四なり
一西洋の紹介を得て交を結ふ時は自ら決を西洋に仰かさるを不得且清國にても不願處なり其不可五なり
右の如く英法等の紹介は不可なれとも若し清國にて皇朝を輕蔑の意にても是れ有る時は其節に至り英法等をして說破せしむるは勿論の事なるへし伏て省中貴員の是正を仰ぐのみ

（附記三）

御尋の件々及管見の次第左に奉申上候
支那航海手順の事
一通信小使被
命候者西洋驛船上位の客たるへき事
一上海着船の節即刻上陸清國官員の家を東道の主と致すへき事
一支那官員への贈物として日本刀十口持參の事
一携帶の筥箱驛船の室に差置候外無用たるへき事
一公道の外私の音信贈答無用の事
先通信次通商の事

一皇國と清國とは從來唇齒兄弟の國柄に候間西洋各國の如く六ヶ數條約を省き彼此同國の交を締候方清國の志に候且西洋の如く通信通商を混淆致し候得は自然御入費も多く御國力無覺束被存候事
一清國にて我通信を望候儀は顯然たる事故今般被命入唐致し候小使は
欽差小使の號を賜るへき事
但小使にても清國の大員と交接致候事故奏任官に準し申度事
一通信を締候上は彼此の通商隨意たるへき事
但通商條約の件々も自ら西洋は殊にすへき事
北京應接の見込
一欽差小使上洋におゐて道臺に謁し通信の事件を熟談せは道臺必馳使彼皇帝の旨を覲ふへし此時欽差小使彼使と共に燕京に赴き彼の大臣に面謁し通信の事理を明白に說明すへし然後彼我交接の事に及ひ比肩同等の交たるへき趣を熟述すへき事
一欽差小使愈入唐の事に御確定の節は支那上洋の官員へ預一書差遣し東道主人差支無之樣可致候事

一小使官員定額

欽差小使　壹人

但從六位相當官たるへきなり若し否則支那大員の府署へ罷越し候砌大門より通行相成兼可申候

欽差副小使　壹人

少巡察　壹人

但會計監督を兼任すへし

一未た衣冠の御改正御確定無之に付三使共（欽差小使副小使少巡察を云）直垂狩衣素襖の類着用にて支那官員へ面會致すへき事

欽差大使入唐定規

一欽差大使　壹名

三位以上の大員たるへし

從僕五人

此譯　帶刀貳人　槍持壹人

長柄傘　壹人　履持壹人

一欽差副使　壹名

勅任以上の官たるへし

從僕四人

此譯　帶刀貳人　長柄傘壹人

履持壹人

一欽差兩使僚屬　貳名

奏任官一名判任官壹名

從僕貳人

此譯　帶刀壹人　履持壹人

一譯官　壹人

從僕壹人

名倉大錄

（附記四）

清國へ使節發遣議案

准大丞前光印

一往古遣唐使の例一ならすと雖官職の設是に據るを可とす但古今時勢殊異加之儀衛の義歐洲へ近々發使の砌も不同有之候ては如何故に折衷其宜きを得べし

大使一名　三位已上

副使一名　四位已上

判官貳人

錄事（或は主典）四人（掌金銀出納文書往復等庶務）

通辯貳人（唐通事一名洋通事一名）等也

一儀衛從僕の義は前件名倉大錄見識可然但槍長柄等の類は畢竟太平粉飾の具宜しく廢して可なり只々彼か好む處に趣は不見識と可謂者歟

一〇九　五月二十四日（六月二十二日）外務省ヨリ太政官辨官宛

三帝御諡號、浦上村耶蘇教徒處置、外交問題ノ御下問ニ對スル答申ノ件

附屬書一、三帝御諡號ニ關スル答申

二、浦上村耶蘇教徒處置ニ關スル答申

三、外交問題ニ關スル答申

（朱書）「午五月廿四日達ス」

辨官御中　外務省

去る廿日御下問の三條今廿四日迄可申立旨致承知候即左に條述仕候間御熟覽奉入高裁候也

（附屬書一）

（編者朱書）「

（註　外務卿達宮殿ノ花押ナリ）

（花押）

庚午五月廿日依召參　朝候處今度　大友皇子　淡路廢帝　九條廢帝等ヱ御諡號ヲ被爲奉候旨御下問ニ付猶此一紙可差出草案也」

三皇御諡號の儀に付過日御下問の趣拜承最以異存可申上義無之只管奉仰

勅裁候就ては存付候件左に奉申上候抑

三皇是迄某廢帝と奉稱候儀は恐入候御儀に有之候間今般御諡號御定に相成候儀有之候はゝ何卒院號を以て近代に至迄御諡號に被爲換候

天皇等何とそ今般一樣に御諡號御定に相成度奉存候尤右撰定は神祇官大學校にて佳字勘進被　仰付候ても可然候得共強ち史記の諡法なとに據候と申舊き御定も無之樣奉存候間其

御代々々の

御代始の年號の字を其儘其

天皇尊の御諡號と被極候はゝ元より年號は佳字面の上重複無之者故體裁に於て尤以可然彼支那の如き臣子を以て君父を議するの論起り暴君と雖美號を用ひ候樣の虛飾の弊も無之彼是以可然候義と存候間此段及建言候且任便今一事申上候先年

白峰神社御建立にて保元の雲霧は一掃仕候へ共承久の風波南山の深雪未全く開霽に不到實に列聖の宸衷を忖度仕候得は慷慨流涕千年の遺恨に有之候間是以御改葬迄には及不申候得とも何卒
御靈を白峰神社へ御同祭被爲在候はゝ千載の下神人共に感悅可仕義と奉存候是迄武臣權を專に致居候時代は乍恐
朝廷思召通には百事難被遊御事に有之候處即今
皇政御復古百事
朝廷の御處分に被任候節柄右等の
天皇尊等を唯今の儘に被爲捨置候ては遂に
御盛擧の時節無之
列聖の御思食實以深恐入候間何卒前條の儀篤と
御評議の上早々御施行有之候樣千萬奉懇祈候

註　本文書ハ端書ニ「草案」ノ旨記載シアルモ決定案カ猶後考ニ俟ツ

（附屬書二）

此程御下問の第二
浦上異宗の徒御處置振に付ては過日卿より申立置候趣も有之候通右宗徒共各藩え分割御預相成候は自然黨結の勢を殺き悔改の道を廣め候御趣意藩におゐて盡力說喩行屆百事親切の處置にさへ相成漸々陶冶候より外は無之唯速效を期候樣にては詰り激變の種と相成從て外國人よりの訴も餘計に相成交際上迄に波及いたし候患無之とも難申被存候に付既に其教に入候ものは漸磨歸正の道相立未た其教に不入もの嚴重禁厲相立候はゝ自然消沮可仕勢に御坐候間右の外猥に下手御坐候方却て不可然ものと奉存候右は先般及建言置候事には候得共猶御下問に付再應申上候
尙以本願寺え御預相成候節は佛敎迚も　皇敎に無之段は天主と差無之事に付外國人に對し議論致候方も無之間此一儀に至り候ては最不可の大者と被存候也

（附屬書三）

（永書）「午五月廿四日達ス」

外務の任におゐて即今急務と被存候件々左の通
一朝鮮の事
右は列聖御垂念の地其後多少の星霜を經舊幕以來聘問を通し來居候國柄に有之殊に四五年前法米兩國にも衅端を開き候事も有之旁外國より先鞭候樣にては唇亡齒寒の患不少何れにも此方より御手を被着候方に可有之旁御一新

已來燮奥の御趣意柄幷此方御政體變革の御模樣等先從前の振合を以宗氏より彼方え喩達爲及候處文字の末を以て勅喩を拒み且內情探索候處兎角泥古の陋習事情經通不申交誼相好み不申樣子に候就ては專使御差渡し猶此上公然の御應接有之以前通聘に付ての舊弊を一洗し大に御交際可被及候哉否の事
一柯太の事
右は數十年以來俄羅斯人逐々移住殊に滿洲黑龍江邊淸國より割取候以來彌益相殖彼方には全嶋所領の心得にて要地を開拓兵衞等をも差渡し候位に相成居候右は舊幕の折最初彼使節布恬廷と不分境界の條約取結ひ爾後伯特堡おゐて此方使節より懸合實地に就て談判決定の積の處彼方より右委任のもの差出候へ共此方には因循中機會を失ひ彼方委任のものも立歸り候に付別段專使差遣し伯特堡にて再應談判に及候末替地等の談判より引移り竟に兩國民雜居の地に條約取極候處爾後御國變邊涯の末迄御手も被爲屆兼候內彼方には益南出いたし駸々不可禦の勢有之に付昨歲已來官員御差遣し一先雜居條約の旨に依り開拓移民の擧に被及候へ共實地上支吾多く相成候に付ては今一應伯特堡おゐて確乎たる議論を以從來の葛藤を掃除し是を萬國に示し向來議論を絕候樣に致し度右等措置方略談判事業と竝行れて不偏廢樣の見込等如何の事
一支那の事
右は往昔遣唐使節の舊規も有之多少の星霜を經其後舊幕來長崎表にて商賣許來彼方よりも辨銅官商共來住商賣いたし尤右は長崎奉行所の管轄にて來住中は御國民同樣に支配の事に有之候處西洋各國と條約取結開港およひ自在に交易被行候以來淸商共は利益も少く殊に舊年の仕來通信物貿易方等も專商の姿に相成外各國の故障も有之旁停廢同樣相成來候より長崎表にも昔時のごとく官商等來住の樣子も無之且神奈川其他各港え英米商共に隨從いたし僕隷の名義に始り竟に一ケの商店を開候ものも不少追々取締の方法も立居候へ共素より條約も無之國柄公然と百事處分難及不都合は勿論近々宇內形勢一變今不如古以上は隔海咫尺の地にて輕使の往來無之も經略の遠圖に有之間敷且上海天津等え御國商共差渡商業をも爲營候はゞ國益も不少有無交通旁
皇使淸國え被差遣萬國一般條約御取結にて通信通商の道

速に相開候方に可有之哉否の事

一異宗の事

異宗門の義は條約面明文有之彼我共各其所奉の宗教を信し竝行不悖の積成來候處四五年前兼て古來より天主教の遺種全刪除不致候て別て異宗を奉し來候長崎浦上土民共追々法僧の誘導に依り日月滋蔓およひ候に付舊幕の節一時召捕處分可及積の所法國公使より申立有之改心のもの歸邦申渡大坂及巴里おゐて幕吏より談判およひ爾來法僧より宣教候事無之樣聢と書面の往復も有之候處御國變百事倥偬の際に乘し又候再燃の姿有之竟に二三千人の多に至り候に付此程右人種悉く諸藩え分割御預け相成悔過改心の期を待候御處置に被成居候乍然宗徒共にも死後生天の妄想の爲鼎鑊刀鋸をも不恐輩不少改心の程も無覺束將各國公使等よりも別て差迫り申立且右一條に付ては法國内抔は民情も不穩よし夫是即今の御措置方略如何可有之歟

右四件即今當務の急にて本省おゐて一同苦心評論罷在候事には御坐候へ共猶廣く衆論をも承り度此迄行懸りの事情等上に略述仕候通御さ候間右にて集議院え御下け有之候樣仕度奉存候一體宇内の形勢日々新に相成候上は蘚士地峽堀通し而已ならす止伯里地方の電機も取設可成勢竟には東西一家の勢に及可申さ候へは印度と清國とは漢土昔時六國の勢に比較仕候へは即楚魏の郊とも可申場合にて西邊にて都兒格東邊にて　皇國即三川兩周の地位にも可有之宇内の爭地と相成候形勢御さ候間　御國内御政務筋より外交の道も專ら御注意有之富强の御基礎は勿論宇内經略の遠圖無之候ては相成間敷乍然徒らに迂濶に流れ候ては因より後害を招き可申候其邊内外時勢人情且は國力度支の足否等迄にも考窮およひ前段四件の御處置の内にも猶亦緩急先後の差も可有之候其邊も并て御下問有之度候尤猶不詳の廉も有之候はゞ當省官員の内出院辯明爲致候樣可致間其段も并て御達有之度候也

一一〇　六月十五日（七月十三日）　民部省ヨリ外務省宛

本邦商人ノ清國上海ニ於ケル出店並ニ通商權大佑島川惠道清國派遣ニ關シ通知ノ件

外務省御中　　民部省

今般御國地商人共へ別紙書面の意味を以及說得差向き上海え出店爲取掛候積に付爲御心得別紙相添及御達置候也

庚午六月十五日

追て本文爲取締且外御用をも兼品川通商權大佑支那國へ差遣候條是亦御承知有之度候

（附屬書一）

開店社心得書

一上海は貿易未濟國の儀に付當分の處英佛亞蘭岡士等の内へ手數いたし其岡士館人名錄に加り候て商法取扱又御國船を以荷物を積付候節は其保護すへき岡士館より兼て國旗を借受置入港の節は其旗章を立候はゝ彼地港内規則に基き取扱候樣可致事

但港内規則稅則等は翻譯文有之に付摺物にいたし置會社において賣渡遣し候事

一出店所は借家を借受當分の處御國人渡海の者辨利の爲客間數ケ所設置候事

一賄方は素より士商に拘はらす總て可爲同樣只士は士商は商の部屋を分候而已他に毛も相違有間敷事

一旅客よりは只適宜の旅籠料を請取聊過當に不申請候事

但旅籠料は二等に分け一等は洋銀七分五厘下等は三分五厘と相定候事

（附屬書二）

上海開店治定の上左件の摺ものを以御國内へ開店社より配當可致事

一御開港以來數ケ年を相過候得共未御國御國（脩カ）商海外出商法取開候もの壹人も無御坐は畢竟拙者共の職掌にも相悖候事柄等御教諭被下置候に付今般拙者共儀海外貿易見究の爲西洋各國は暫差置上海港大橋南川岸に出店仕商業所開客間等を取設け置候間思召の御方樣は御渡海御立寄被下候はゝ一同御談合仕御國損不相成樣可仕候出店所規則書稅則港内規則等は各所の會社へ差出置候間御取入被下度候尤荷物而已御差立の節は最寄の會社え御渡被下候はゝ規則書の通執計可申候此段御披露仕候以上

月　日　　開店社
　　姓　名

（附屬書三）

上海開店規則

一荷物を諸方より積付候節は最寄の會社に其品物を引請會社より出店所に送來り候を賣捌候節は四分の手數金を請取可申内壹分五厘は積付の會社に取殘二分五厘は出店所に請取候事

一右賣立代金を以注文品申來候節は精々下直に買取候上貳分の手數金を出店引去候事

一荷主の注文無之候共出店所にて其賣拂合（會カ）を以見込を立土地の品物を買取會社に相送候節は壹分五厘を利足として賣立代金に添へ荷主へ速に相渡可申其品物は會社にて賣立手數金前同斷貳分を引去損益共に出店所に相拘候事

一兩店の一方より新に注文いたし來候品は金子立替候事故金利貳分と手數料前同斷三分とを相納可申事

一御國商自身に荷物を持越候は貳分五厘の手數料を可申請事

一荷主より出店所へ直き送りの節は三分の手數金請取候事

一出店支配人品物を買入御國内へ積付屆先にて賣拂候上は其損益に拘はらす賣立高より貳分の手數金を賣捌先にて引去其拂代を以會社見込を立品物を買取相送候節は前同斷損益共會社に相拘利足壹分五厘と賣立手數金三分を請取候事

一御國商彼地に渡海いたし金子立替相賴候節は手數金貳分五厘差金三割五分に不下高を請取其荷物を店中に引請の會社に送付賣捌の節は成丈商人え辨利を與へ候事

一運賃其外諸雜費は逸々巨細に認め荷主より請取可申事

一旅客へは成丈辨利を與へ積付荷物或は旅客持越の荷物に充分注意いたし賣付遣し聊信義を失ひ候事有之間敷書簿は嚴重に相控へ約定書等は寫字板に掛取置もし御國人探索の爲罷越候者へは先日取引の外商をも引合せ探索を請可申事

一一一

六月二十五日（七月三十三日）　外務省ヨリ太政官辨官宛

清國國情竝ニ通信通商ノ見込探究ノ爲同國上海へ官員派遣方伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決裁

（朱書）「至急　六月廿五日達ス」

辨官御中　　外務省

支那通信通商の義兼て申上置候趣も有之殊更方今天津の一擧其末如何相成候哉も難計就ては種々御手數も有之急速其御運ひにも難到乍去彼是遷延致居候ては御隣比の國柄百事大關係の義先差向上海表え當省より官員差遣し道臺迄引合國情形勢幷に后後通信通商の見込をも探討爲致度此段木戸參議え寺嶋大輔柳原權大丞等より申談し候處同人にも至極同意の義に付右手續爲致度可然候はゝ官員三四名人選の上猶可相伺候此段至急相伺候也

庚午六月

（原註）附札　「（朱書）伺之通被　仰付候間官員人撰可申出事」

一一二

六月二十九日（七月三十七日）

外務權大丞柳原前光ニ對スル清國派遣ノ辭令

附記一、七月二日外務權少丞花房虎太郎、文書權正鄭永寧ニ對スル外務權大丞柳原前光ヘ差添ノ辭令

二、七月三日外務文書大佑名倉信敦、外務權少錄尾里政道ニ對スル外務權大丞柳原前光ヘ隨從ノ辭令

三、七月清國行教令

柳原外務權大丞

御用有之支那上海え被差遣候事

庚午六月　　太政官

註一、本文書日附ハ「太政官日誌」ニ據ル
二、外務權大丞柳原前光ノ隨員ニ對スル辭令竝ニ清國行教令一括左ニ附記ス

（附記一）

花房外務權少丞
鄭文書權正　各通

柳原外務權大丞支那上海え被遣候に付差添被　仰付候事

註三、右辭令日附ハ「太政官日誌」ニ據ル

（附記二）

名倉文書大佑

今般柳原外務權大丞清國え被差遣候に付隨從發向申付候事

庚午七月　　外務省

尾里外務權少錄

今般柳原外務權大丞清國え被差遣候に付隨從發向申付候事

庚午七月　　外務省

右名倉尾里貳人は七月三日於外務省拜命の事

（附記三）

清國行教令

一上下及主從の禮節決て不可亂事

一上下一和し御國體を辱めさる樣心掛肝要の事

一殊域の人に對し禮義を失はさるへき事

右の件々堅く相守るへきもの也

午七月　　柳原從四位

一一三　七月三日（七月三十日）外務文書大佑名倉信教ヨリ清國人王仁伯宛

清國へ使節派遣ニ付斡旋方依賴ノ件

（抄書）

「明治庚午年六月廿九日柳原權大丞清國へ被差遣旨被　仰付に付名倉大佑より七月三日上海城小南門外理倉橋王仁伯へ贈書如左」

呈

仁伯王大人閣下書

大日本　明治三年歲次庚午七月初三日辱交生倉教謹呈書

大清國世襲五品節孝適裔慈爺仁伯王大人閣下別來忽諸已三霜矣伏想文堂群位休泰萬福不堪欣抃之至前年姪屢臻　閣下門謬辱知遇殊歲在丁卯春夏之際寓　尊居耽擱數月恩誼宛如骨肉想像至今須臾不能忘于懷也頃弊國紀綱革張政治復古姪竊惟我執政大臣敏意隣交有通信　貴國之意蓋欲擇其佳者赴燕京見　貴大臣大議尋盟也因是派二三官員至貴處見　道憲預熟計通信通商之方法姪本拙劣不才　閣下所會熟知也頃承乏小員得謬從差遣人員之下風第姪於　閣下業已有義親子之約恩誼不可相忘也是以此番姪等至　貴處之日請復將以閣下

爲東道之主但姪同行者大小約十名預訂本月二十五六日駕驛船均發我橫濱海路約五六日程想姪等見　閣下當明月上浣閣下若思舊誼使姪等無窮禽投林之歎則幸甚

閣下若以此意預轉達道憲及伯雅嚴公爲最妙

（略註）

上八書

大清國上海城小南門外理倉橋　大日本國東京城築地

仁伯王大人閣下　　倉敦拜具

一一四　七月八日（八月四日）外務省ヨリ太政官辨官宛

外務權大丞柳原前光等清國派遣手續ニ關スル伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決裁

附屬書一、外務權大丞柳原前光等ヨリノ伺書

清國へ派遣ヲ命セラレタルニ付伺ノ件

二、七月二十七日附外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ外務權大丞柳原前光等へノ委任狀案

貼紙

（朱書）「明治三年七月八日」

辨官御中　　外務省

此度柳原權大丞以下支那國上海え被差遣候手續別紙の通取調申出候遺算無之樣被存候間右申出の通爲取扱可申と存候右にて可然候得は至急御檢印の上御下け相成候樣いたし度此段相伺候也

庚午七月八日

（貼紙）

伺之通

註　本文書ハ左記附屬書一、二、及七月附長崎縣知事野村宗七ヨリ清國上海道臺宛書翰案、七月附外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ清國總理衙門大臣宛書翰案ト共ニ太政官ヨリ「伺之通」ナル決裁ヲ經タルモノナル處右兩書翰案ハ後修正ヲ加ヘ實際ニハ達セサリシモノナルニ付省ク（一二〇參照）

（附屬書一）

柳原外務權大丞

花房外務權小丞

鄭文書權正

今般清國行被　仰付候に付意見條々左に相伺候

一從太政官御沙汰書には支那上海え被　差遣候旨御註し有之候得共今般の儀は結局通信通商の內談候を本趣意と致し候に付都合次第北京或は彼國內地何れえ參り候事も可有之候事

一御用濟の遲速は難計候得共概算六箇月を期とし候事

一彼地各港貿易の形勢今時の國情幷に今般天津の一擧等も彼地にて探偵いたすへく候事

一今般航海被　仰付候は公然たる通信通商の使節と申儀には更に無之乍併唯に書生名義なとに託し候ては彼官員必らす公務を談し申間敷故に外務省官僚を稱し引合いたし候心得に有之候事

一長崎縣には從前來江南道臺え書翰往復致し候手續も有之故に舊格の順序をふみ今般本省官員發向の儀野村知縣事より一簡相送らせ度候事

紙後に書簡案取調申上候

一今般渡航は至重の儀殊更彼國は尊大の風儀甚敷輕忽に談判いたし候ては事を誤り候に付彼官員の權力を計り應接可致其工合により御委任狀無之ては不都合に可有之故に

談判の大意卿大輔殿より簡易の體裁にて御書下相願度但し尤應接貫徹假條約の談に立到り候節は早々飛書を以て章程等相伺可申事

紙後に御委任狀案取調申上候

一卿大輔より彼國總理外國事務衙門大臣え當ての御書簡用意のため持參致し度候事

紙後に御書翰案取調申上候

渡航彼國にて應接見込の撮略

一上海道臺え談判都合よろしく候節は其手續を經て嚮導を得北京に入り彼の情狀を探討し官員に接し交際の意を陳し其諾否を質し可申但し今般天津の一擧結局いまた計るへからす就ては道路壅塞或は他の故障有之候節は各處道臺限りにて其港の通商を議し可申是又差支候得は上海道臺え熟談し上海而已通商章程を計議し可申事

一此他事件は彼國え入り實地に就て畫策いたし不申てはあらかしめ未定將來の儀は計りかたく偶鎖の事件は必しも相伺不申候事

（附鳥書二）

柳原外務權大丞

花房外務權少丞

鄭文書權正

今般清國エ差遣シ委ネテ辨理セシム各務左ノ如シ

一我

皇國ハ清國ト一葦航ス可キノ地ニ居ルユヘ其交際ノ義ヲ論スレハ固ヨリ別外諸國ノ比ヒニ非ス往テ彼國ニ至ラハ忠信篤敬ヲ以テ自重スルヲ要ト爲ヘシ

一彼國ヨリモ使節ヲ派シ我國ト約ヲ修スルヲ望ムノ意ヲ陳述スヘシ

一彼地ニ居住スル我國人民及ヒ我國ニ居住スル彼國ノ人民ヲ管束スル爲メニ如何妥協ノ法ヲ商議スヘシ

一方今卽チ　欽差大使ヲ發シ例ヲ照シテ定約スルニ遑アラサルユヘ士民往來通商スルノ約束ヲ權リニ議シ旨ヲ請フテ定奪スヘシ

以上各件ヲ除クノ外權ヲ越テ事ヲ行フ事ヲ得サル也

（朱印）

外務省（朱書）「印」

明治三年庚午七月廿七日　發行

花房外務權少丞

鄭文書權正

（右附鳥書二漢譯文）

外務卿　宣嘉

外務大輔　宗則

柳原外務權大丞

花房外務權少丞

鄭文書權正

今番差往清國委令辨理各務如左

一我

皇國與清國處一葦可航之地論其交際之義固非別外諸國之比往之彼國切宜自重言必忠信行必篤敬爲要

一應陳述望彼國亦派公使與我國修約之意

一應商議爲管束居住彼地之我國人民及居住我國之彼國人民作何妥協之法

一方今未遑卽發　欽差大使照例定約應將士民往來通商事宜權議約束請旨定奪

除以上各件外不得越權行事也

明治三年庚午　七月日　發行

外務卿印
外務大輔印

一一五　七月八日（八月四日）外務省ヨリ長崎縣宛

外務權大丞柳原前光等清國派遣ノ旨ヲ上海道臺ヘ通告方ニ關シ指令ノ件

長崎縣御中　　外務省

今度柳原權大丞外四人支那國上海え被差遣候右渡航の上は同斷道臺え引合其都合により北京迄も可罷越積に候於其縣は前道臺と書翰往復の手續も有之事故此度も別紙案の通其縣より添書可有之筈に太政官え相伺置候改て御沙汰可相成候得共前文人員來る二十一日米國飛脚船より横濱出立の積に付差掛り候ては不都合の義も可有之と存候間前以申進置候間其旨御心得早々右書翰御用意可被成置候以上

七月八日

註　本文書ニ謂フ「別紙案」ハ一一四ヲ以テ太政官ノ決裁ヲ經タル七月附長崎縣知事野村宗七ヨリ清國上海道臺宛書翰案ト同文ナリ（一一四註參照）

一一六　七月十六日（八月十二日）外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ英、佛、米、蘭、獨各公使宛

外務權大丞柳原前光等清國上海派遣ニ付同國在留各國官員ヘノ紹介狀依頼ノ件

（案書）
「明治三年七月十六日早朝達ス」

以書簡啓上致候然れは來十九日飛脚船より柳原權大丞等外四名上海え差遣し同所貿易の模樣幷に運上所取締方等見繕爲致候就ては自然彼國在留貴國御員の御配意を煩す義も可有之右の邊閣下より宜御轉書被成下度候右甲入度如此御坐候謹言

七月　日

大輔
卿

英米佛孛蘭公使閣下

追啓發船日限切迫の儀に付明後十七日中右轉書乍御面倒本省へ御差越相願度候也

註　本文書ニヨル我方依頼ニ對シテハ一一二及「使清日記」ニ據レハ各公使トモ應諾シ紹介狀ヲ送越シタルモノナル處佛、米、獨各公使ヨリノ右關係書翰（但シ何レモ和文ノミ存ス）ノ他ハ見當ラス（一一七、一一八、一一九參照）

一一七　七月十六日（八月十二日）亞米利加辨理公使ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

外務權大丞柳原前光等清國上海派遣ニ關シ清國上海駐在亞米利加總領事代理宛紹介狀送付ノ件

附屬書　七月十六日右紹介狀

今日附の貴簡致落手候然は柳原公及ひ同行の四名御官員紹介の爲上海にある合衆國アクチング、コンシュルゼネラル、え宛たる添書共閣下等迄拜呈仕候先は貴答如此御座候恐惶謹言

千八百七十年八月十二日

合衆國公使
シ、イ、デ、ロング

外務卿
外務大輔　閣下

（附屬書）

一書拜呈仕候陳は今般日本外務執政の望に任せ柳原權大丞幷に同行の士官四名を足下に紹介致候此人々は其地貿易の模樣及ひ運上所の取扱方見聞のため其港え被赴候義に有之候且足下右貴官より望まるゝ事あらは其使命を達せしめ萬事精々盡力有之度存候以上

千八百七十年第八月十二日

日本横濱合衆國公使館にて
日本在留ミニストルレシデント
シ、イ、デ、ロング

上海在留合衆國アクチングコンシュルゼネラル
ビー、ジェンキンス君

一一八　七月十七日（八月十三日）佛蘭西公使館通譯官ヨリ外務權大丞柳原前光宛

外務權大丞柳原前光等清國上海派遣ニ關シ佛國西公使ヨリ清國上海駐在佛國西總領事宛紹介狀送付ノ件

附屬書　七月十七日右紹介狀

取急申上候然は貴下上海行御任職の儀昨日外務卿同大輔閣下より我公使へ御賴みに從ひ同所在留佛國コンシュルゼネラルメジアンと申人へ別紙轉書我公使命に依り貴下迄御進申上候間御落手可被下候不備

七月十七日　　治部助

柳原外務准（マヽ）大丞　貴下

（附屬書）

於日本横濱佛國公使館

千八百七十年第八月十三日

以書狀致啓上候然は其御地貿易の模樣其外運上所規則等委細取調として今般

天皇陛下政府より柳原外務權大丞外四人の役員支那へ差立相成就ては當地外務卿大輔よりの需に應し貴所樣へ此轉書差出候間同氏等より御倚賴申候儀は宜同氏使命相遂候樣御周旋被下度且柳原氏は東京外務省中高位の方にも有之拙者自己懇意の方に付可然接遇被下度此段別て相願候以上

ウートレー

上海佛國コンシュルセネラル

コーントメジアン　貴下

一一九　七月二十二日（八月十八日）　獨逸北部聯邦公使館通譯官ヨリ外務大丞等宛

外務權大丞柳原前光等清國上海派遣ニ關シ獨逸北部聯邦代理公使ヨリノ紹介狀送付ノ件

以手紙致啓上候然は柳原權大丞貴下其外上海え御出向被成候に付同所在留我國士官え爲御周旋我公使書翰別書差進候間右士官え御屆被下度存候以上

千八百七十年第八月十八日

獨乙北部聯邦公使館附

ケンプルマン

外務大少丞貴下

註　本號文書ニ謂フ「別書」見當ラス

一二〇　七月二十三日（八月十九日）　外務省ヨリ太政官辨官宛

外務權大丞柳原前光等清國派遣ニ關スル同國行書翰改書ノ件

附屬書一、長崎縣知事野村宗七ヨリ清國上海道臺宛書翰

外務權大丞柳原前光等清國派遣通告ノ件

二、七月二十七日外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ清國總理衙門王大臣宛書翰

外務權大丞柳原前光等ヲ派遣シ通信事宜ノ商議條約締結ノ豫備交渉ヲ行ハシムル旨通告ノ件

辨官御中　　外務省

過日御下に相成候清國行書翰御下案の內左の通改書致候間此段申進候也

庚午七月廿三日

（附屬書一）

大日本國長崎縣知事謹テ書ヲ

大清國江南道大司憲臺下ニ呈ス曩ニ鎭撫總督澤某ノ本縣ニ在ルヤ嘗テ書ヲ修シ信ヲ貴邦ニ通ス貴邦前道臺應公モ亦懇ロニ答書ヲ贈ラル爾後澤某外務卿ニ轉任シ外國事務ヲ總判ス頃ロ奏准ヲ經テ外務權大丞柳原某等ヲ貴邦ニ遣ハシ通信ノ事宜ヲ商議セシム近日マサニ本國ヲ發セントス本縣ハモト貴道臺衙門ト音信ノ素アルヲ以テ外務卿ヨリ盛秀ニ屬シテ之ヲ臺下ニ轉報シ官員等至ルノ日臺下ノ善ク款接ヲ加ヘ提撕周旋セン事ヲ懇ニ祈ムルノ意ヲ通セシム伏テ冀クハ諒察セヨ不宜

（附屬書二）

封包之式

但本紙同樣ノ唐紙一枚ヲ以テ本紙幷ニ譯文ヲ包卷キ其紙角折歸スル所ノ上ニ如圖長簽ヲ貼シ面ニ如式塡寫シ背ニ年月日ヲ書ス面背共ニ護封ノ印ヲ用フ

明治三年庚午七月　日封　發

（朱枠）（註　朱枠内ニ「外務省印」下朱書シアリ）

大日本國從三位外務卿清原宣嘉從四位外務大輔藤原宗則等
謹テ書ヲ
大清國總理外國事務大憲臺下ニ呈ス方今文明ノ化大ニ開ケ
交際ノ道日ニ盛ナリ宇宙ノ間遠邇アルコトナシ我邦近歲泰
西諸國ト互ニ條約ヲ訂シ共ニ有無ヲ通ス況ンヤ隣近貴國ノ
如キ宜シク最モ先ニ情好ヲ通シ和親ヲ結フヘキニ唯商船ノ
往來アルノミニテ未タ嘗テ交際ノ禮ヲ修セサルハ亦一大闕
典ナラスヤ曩ニ我邦政治一新ノ始メ即チ欽差公使ヲ遣ハシ
以テ盟約ヲ修セント欲セシニ內地ノ多事ナルニ因テ遷延今
ニ至レリ深ク以テ憾トス玆ニ奏准ヲ經テ從四位外務權大丞
藤原前光正七位外務權少丞藤原義質從七位文書權正鄭永寧
等ヲ
貴國ニ遣シテ預シメ通信ノ事宜ヲ商議シ以テ他日我公使
貴國ト和親ノ條約ヲ定ムルノ地ヲ爲サシメントス伏テ冀ク
ハ貴憲臺下右官員等ヲ款接シテ其陳述スル所ヲ取裁センコ
トヲ謹テ白ス

明治三年庚午七月廿七日

（朱枠）（註　朱枠内ニ「外務省印」下朱書シアリ）

（朱書）宣嘉　（朱書）宗則

（右附屬書一漢譯文）

大日本國長崎縣知事野村盛秀謹呈書　大清國江南道大司憲
臺下冀者鎭撫總督澤某在本縣也嘗修書通信于　貴邦貴邦前
道臺應公亦見懇答爾後澤某轉任外務卿總判外國事務頃者奏
准遣外務權大丞柳原某等于　貴邦預商議通信事宜近日將發
外務卿屬盛秀轉報之　臺下以通懇祈官員等至之日　臺下善
加款接提撕周旋之意蓋以本縣與　貴道臺衙門嘗有音信之素
也伏冀諒察不宣

（右附屬書二漢譯文）

大日本國從三位外務卿清原宣嘉從四位外務大輔藤原宗則等
謹呈書
大清國總理外國事務大憲臺下方今文明之化大開交際之道日
盛宇宙之間無有遠邇矣我邦近歲與泰西諸國互訂盟約共通有
無況隣近如　貴國宜最先通情好結和親而唯有商船往來未嘗
修交際之禮也不亦一大闕典也乎曩者我邦政治一新之始即欲
遣欽差公使修盟約因內地多事遷延至今深以爲憾焉玆經奏准
特遣從四位外務權大丞藤原前光正七位外務權少丞藤原義質
從七位文書權正鄭永寧等于貴國預前商議通信事宜以爲他日
我公使與　貴國定和親條約之地伏冀貴憲臺下款接右官員等
取裁其所陳述謹白
明治三年庚午七月　日

一二一　七月二十三日（八月十九日）延遼館ニ於テ外務卿澤宜嘉等ト英吉利公使トノ對話抜書

清國ヘ外務權大丞柳原前光等派遣ニ關スル件

明治三年庚午七月廿三日於延遼館澤外務卿町田外務大
丞大隈大藏大輔大木民部大輔吉井民部少輔英國公使シ
ルハルリーハークス應接大意
此頃御書簡にて支那へ官員御遣の樣被仰聞候柳原殿の外
に幾人御遣に候哉幾日頃出帆に相成候哉
月末に出帆隨從は五人に候則花房權少丞鄭文書權正及某々

永く滯留爲致候積りに候哉
凡五十日
何れへ
先上海へ
一體何事にて御遣被成候哉
開港場の樣子取調候積に候
支那の如き運上所出來候へは至極宜し夫々似よりたるも
のにても出來候得は宜しく然しなから一體日本人は蝶々
の如く四方へ飛廻まてにて能く取調ては來るまし
人撰にて右の人員遣候事故必す功を奏すへし
能傳習いたし候へは宜敷候へ共唯見物而已にては無益の
入費相掛候までにて不如止に
誰か上海にて御周旋申上候事に哉
各方より添書を申受候積且支那人にも盡力いたし呉候者有
之候
貴國人は一日か二日にて外國人の十年も掛りし事をなさ
んとす仲々運上所の事務等は其地に身を置每日其務を扱
すは分らざる事に候
實に蝶々の彼地此地と飛廻り候樣のものにて無益の事に

候故添書は差上申間敷候龍動書生にても同様の事に候何の益に相成らす

尋常の人は此度遣不申候

格別の違有之間敷候蜂の如く花の粉を尋て蜜を造り事面倒に及時は隱居々々と申が御國の風に候此風ある内は大日本に成難し遂に小日本となるべし

眞に勉强被爲成候義候はゝ添書差上申へく候毎度談と働とは相違いたし候間毎日蝶々の如くならんば御世話申上間敷と添書可認候右の官員歸られ候上にて成業の有無試可申

暫時の間故とても眞の傳習は出來申さす候へ共一通の様子見せ候ても多少益と相成候

一二三　（八月三日　外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ　八月三十日）　英、佛、米、蘭、獨各公使宛

外務權大丞柳原前光等清國上海渡達ニ關シ同國在留官員ヘ紹介狀送付アリタルニ對シ謝意表明ノ件

八月三日達ス

以手紙啓上いたし候然は柳原外務權大丞花房外務權少丞等清國上海邊え相越候に付一日横濱港出帆いたし候右に付關下より同國在留貴國官員え御書翰被差遣御厚意所謝に御坐候前顯御報告旁謝詞申進度如此御坐候以上

庚午七月廿九日草　　御　兩　名

英米孛荷佛公使閣下

（貼紙）

英は添書の有無聢と不相分其次第に寄御末文取極可致候

註　英吉利公使ヨリモ添書アリ佛、米、蘭、獨各公使宛ト同文ニテ達シタルモノト認メラル（一一六註、一二一參照）

一二三　（八月七日　長崎縣ヨリ　九月二日）　外務省宛

外務權大丞柳原前光等ノ長崎出帆並ニ長崎縣知事ヨリ清國上海道臺宛書翰托送セル旨報告ノ件

一昨五日夕七字時半入港いたし候米郵船ゴルデンエーヂ號を以柳原權大丞始貴省官員到着相成候處太政官において御點正相成候上海道臺えの書翰案相添御差越の公狀右郵船便同時に落手仕候に付御申越の運ひには不相成候得共不取敢請書仕立貴省官員え相託し右官員は無滯昨夜十二字時上海え向け出帆相成候此段申進候以上

庚午八月七日　　長　崎　縣（印）

外務省御中

註　「御差越の公狀」詳ナラサルモ之ニ添附ノ「御點正相成候云々書翰案」ハ一二〇附屬書一ヲ指スモノト認メラル

一二四　（八月十七日　外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ　九月十二日）　外務大丞等宛

清國上海到着並ニ同所道臺トノ應接等ニ關シ報告ノ件

午八月廿九日夜着

尾里外務權少錄
名倉文書大佑

外務省大少丞御中

本月六日夜十二字寄港發輪八日夜吳淞口に停泊翌九日九字上海着岸致候處に品川通商權大佑より寓所の亭主を遣し小船を以て迎附け候付新大橋の南英居留地第三號品川權大佑本寓に止宿萬事手筈相揃殊に長崎縣より爲探索事先達てより當地え差出し置候蔡善多義居留地掛り同知官陳福勳道臺涂宗瀛え面會を遂居候趣に付幸に同人を遣ひ長崎知縣事より道臺宛の書翰を通達せしめ大に迅速手續相運ひ即今十七日二字下官等五人道臺衙門え罷越總理事務衙門えの御書簡寫し并銘々口宜委任狀なと夫々點檢せしめ陳福勳も道臺え陪坐致居り候故我等此書簡を總理外國事務處え持參呈達いたし度候付道臺大人より添書或は嚮導を差添天津北京迄被送呉候樣談判に及ひ至て都合も宜敷候得共今日中には未た少し決定せさる處有之候間此次應接の上委曲御報知可及候依之先當地着岸以後手續の分輪便に因て荒增申進度如此御坐候謹言

鄭　文書權正
花房外務權少丞
柳原外務權大丞

庚午八月十七日燈下從上海村發

副啓各國公使よりの轉書は着岸の翌日早速に當地岡士向々え持參相屆孰れも領承都合宜候孛岡士え面會の序佛と戰爭の模樣如何の新聞に候哉と相尋候處頃日の新聞にては先月以來は雙方互に勝敗有之候得共頃日三大戰に孛度々全勝を得候趣承知致候と愉快の顏色にて噂申聞候

一當地え向本省より御書狀も候はゝ上海新大橋南英地第三號の租房と御認被成度候

一支那全國輿地切繪圖八幅入手候間不取敢致送進候

一支那と各國との條約書は只今穿鑿中に付入手次第次便より進呈可致候

一天津擾殺の一件寄々探索致候得共巷說區々孰れと難突留頃日の風聞にては最早支那政府より償金貳百五拾萬弗差出燒燬ちたる天主堂等照舊修補を加え七月廿三日既に與佛講和相濟候由傳承致候得共是以道路の風聞に出候而已なれは猶博く御諮訪御參考可被成候

一品川權大佑寓所に止宿候付ては起居飲食其他嗽浴等に至る迄我國風を用ひ何廉便利宜敷候若支那人旅店に在らは諸事不清淨の風俗半日も難過哉に存候

一今般蔡善多於上海萬端都合相働候廉も有之候付鄭文書權正一人の外通辯の者無之候ては御用手足り兼候間右善多を文書司中に御採用相願北京え一同連越候積にて此度長崎知縣事え以書狀懸合置候次第迫て同縣より本省え進達致候義も可有之候付其節は宜敷御裁斷に相成候樣致度前以御含迄申進候

右の諸件荒增如此以上

一二五　八月二十四日（九月十九日）外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務大丞町田民部等宛

清國上海道臺等ト應接始末及同地在留邦人取締官吏派遣等ニ關スル件

別紙書　八月二十四日外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務大丞等宛書翰

清國天津ニ赴クニ付各國公使ノ紹介狀依賴ノ件

（朱書）「午九月五日着」

辰下各位益御勵職欣賀の至當地にて前光義質事依舊瓦全乍憚御拋念被下候陳は去十七日出張官員一同當地道臺府署に於て當職涂宗瀛え應接相濟其日は初會故略通信通商の爲差來し旨趣を陳し候耳にて預饗應迎送丁寧の次第にて告辭退散其翌十八日上海租界會審事務江蘇輔用同知官陳福勳なる者役邸へ參り談論候處其後道臺同知等深重周旋卽速飛書を以て支那各港は勿論且當今天津へは佛公使應對のため有名諸大臣會合外務關係官員惣て出張の趣にて同所へも前光等通信內談の廉等亘細報知致呉仍ては前光等輪便勝手に天津へ參り官員へ引合の手續成就先以此段御安念願入候尤來月上旬發航の心得に御坐候尙其期可申上候

一上海えは　皇國士民彼是三十餘名も參り居候に付ては取締官員無之ては甚不都合の次第尤先般來品川通商權大佑神代長崎縣權少屬等兩人贋札取調のため出張は致し居候得共是以て內密に等しき者故今般同知官陳福勳へ申入候には和漢兩國一帶海呼膺の地別して上海は東洋第一繁昌なる港にして我皇國へ親近致し居其貿易筋關係最も少なからす我國士民追々渡航在住の者有之右は同治七年戊辰十一月中上海前任道臺應實時より長崎官員へ返書に　皇國賈船上海港に到着候共海關の改めを受け納稅等成軌に隨ひ候得は敢て不拒旨也故に一言貴國へ應對なし渡航する譯にも無之尤今般北京へ前光等入り總理外國事務衙門にて談判都合克調ひ候節は通信通商の大法相立つへしと雖夫迄の處我人民取締りの主宰無之ては國民を子愛する情耳ならす自然法度を犯し候得は貴國へ對し候ても慚愧不都合に付當分假りに品川通商權大佑神代長崎縣權少屬をして取締らせなを同人退去候節は交代の爲外務省官員差來此任に可當此段承引有之度條々申陳し候處右陳福勳より道臺涂宗瀛え轉致候處道臺返答に右人民取締のため官員御差置の儀は御尤の次第同人承知致候條此後は用向の節は品川神代等より同知官へ懸合其都合に寄道臺え引合候も勝手たるへし申答へ候右は兼て東京發足の節畫策申上候第三策にて先つ上海へ官員を置通商する丈は相濟ひ申候此段御照察御承知可被下候

一前件の次第既已に道臺承引致し候乍併品川神代共に大藏省の用向を受來候事故當分は此地へ罷り居候共何時引拂候も難計彼是前光等より使令致し候譯には參り兼候次第早々本省にて兩人程御精選上海出張被命度到着の後は品

川等より事務引續御國民を取締同知官と引合等致し候得は百事御都合に可有之早々御評決渡海相成度此段申上候

一孛佛爭戰は孛連捷既已に孛君主佛國領地へ進攻候趣定て御承知と存し候當國天津事件は風評紛々に候得共詰り結局團圓不致候由也

一長崎縣より探索の爲出張致居候橋口元平と申者は去十八日船便にて歸縣蔡善多は今般前光等道臺同知え應接の手續段々周旋且同行中譯語通曉候者は鄭權正一人に付蔡事外務省官員に被仰付天津へ隨從の事相願度先便書翰中端書にて鳥渡申上候得共同人所勞の趣にて固辭致し候に付明日輪便より歸縣申付候事

一先は要々耳輪便言上候尚天津行已前亘細可申上萬御照察是祈頓首

八月廿四日　清國江蘇省上海縣新大橋官舍

鄭文書權正
花房外務權少丞
柳原外務權大丞

本省

町田大丞殿

丸山大丞殿
谷元權大丞殿
馬渡權大丞殿
三輪田權大丞殿
水野少丞殿
宮本少丞殿
田邊少丞殿
吉岡權少丞殿

一副啓前文の次第可然卿大輔殿え御申上願入候名倉文書大佑尾里外務權少錄よりも各位え可然申上候尚時下御自愛爲國家翹望仕候誠恐頓首

一宮本殿へ申入候最初東京にて品川等上海へ通商するは英佛等の名を假り商買致候儀と存し居候處一向差構無之故敢て英佛等の名を假らす罷在候其後取調候處既已に戊辰十一月中應實時より長崎官員へ返書に貴國の賈船來滬云云納稅等の事成軌に從へは敢て不拒と文面に明瞭たり左すれは御國旗を飄揚し來候共上海丈は差支無之と存し候此段も申上候也

一今般天津へ參り候に付御國在住各國公使より北京公使へ

轉書の事別紙にて申入候也

（附屬書）

本省大少丞御中　　在上海大少丞

近便より天津え發向いたすへきに付ては出立前申上置候通り各國公使え改て御吹聽相成重て轉書を乞ひ候樣無之ては不都合と存し別紙草稿取しらへ候御一覽御添削の上早々御達相成候樣いたし度候且先般當地岡士えの轉書の謝詞も相當に御申述被下度尤英孛は殊に懇篤にいたしくれ候間此段御含可然御謝詞相願候孛岡士は此頃閑話の序天津北京等え御出かけ候はゝそれ〳〵轉書可差出旨申聞候愈日取等取極候上は外各岡士えも轉書の義相頼候心得に存申候以上

庚午八月廿四日

註　本文書ニ添附セラレタル「別紙草稿」ハ修正ノ上九月十二日附外務卿澤宜嘉、同大輔寺島宗則ヨリ英、佛、米、蘭、獨各公使ヘ達セラレタルモノナルニ付省ク（一二八參照）

一二六　八月二十八日（九月二十三日）　外務省ヨリ外務權大丞（清國出張）柳原前光宛

金札贋造ノ清國人ノ處刑ニ關シ商議方指令ノ件

附屬書　七月十八日白耳義副領事代理（横濱在勤）ヨリ神奈川縣權知事井關齊右衛門宛書翰寫
金札贋造ノ清國人等處刑ニ關シ申出ノ件

柳原權大丞殿　　外務省

神奈川居留の支那人竹溪横濱新濱町峯吉東京芝中門前善吉申合格幣贋造いたし右摺立の爲座敷貸遣し候支那人亞福共再應吟味の上同縣より刑部省へ相伺竹溪峯吉善吉三人は斬罪亞福は徒三年と御差圖有之尤其前各國岡士並御雇ベンソンより刑典の儀に付彼是申立候趣も有之居留支那人よりも寛典の仕置受度旨歎訴およひ候へ共右を以宥刑の難及處置斷然御差圖の通御仕置取計候積を以各國岡士え相達候處いつれも少々宛異存有之候中殊に白耳義岡士より別紙の通書簡差出今般の斷刑は强て異存無之哉に相聞候へ共支那の外以來他の未盟國の人民に至りては云々と有之然れとも條約未濟國の人民に候はゝ支那と西洋各國との別有之間敷矢張我國律を以處し候積神奈川縣知事より同岡士え及挨拶置右は外國人附屬と不然との無差別犯法の支那人は總て我國律

庚午八月　日

註一、日附ハ本文書ノ返翰タル**一三六**ニ本文書ヲ指シテ「八月二十八日御差立の御書面」トアルニ據ル

二、本文書ニ謂フ「横濱居留地約書」ハ慶應三年十一月二十二日老中兼外國總裁小笠原長行ヨリ英、佛、米、蘭、獨各公使ニ同意ヲ通告シタル「横濱外國人居留地取締規則」ヲ指ス（**三六三**註參照）

（**附屬書**）

Copy.

No. 60.　　Yokohama, August 14th 1870.

Sir,

In the absence of a collection reply of the board of consuls, to the determination taken by the high board of justice at Tokei, to inflict punishment according to the laws of Japan on the Chinese prisoners Cho-kai and A-ho, convicted of making false kinsatz, in spite of the considerations submitted to you in this matter by the consular body, I take the liberty to state that I consider Article IV of the convention granting to consuls the right of assisting the Japanese judge, in any trial against Chinese or other persons of nations, having no treaty rights

に處し他の條約未濟國のものにても同樣所置いたし候積右施行の儀に付ては西洋千八百六十七年第十一月中英佛米蘭の四ヶ國公使と取結候横濱居留地約書第四條に掲載有之然る處支那の義は從前長崎表に通商し隣交舊因又他に可比義に無之通商の義に付ては幕府長崎奉行より支那道臺へ往復および候儀も有之御一新以來彼より差越候返翰中彼我人民處置の儀聊認載有之候とも犯法のものゝ處置に至ては我法律を以斷然死刑に被行差支無之筋には候得共今般條約取結談判の爲態々被差出候上は此等の趣不及報告も我心に不安の情も有之殊に上海にては贋札を多く製し且兒女拘引致し上海邊にて賣却致し居候趣方今頻に及探偵内國の取締より上海邊の取締不行屆候ては無詮事に付當方支那人斷刑前に右の趣道臺に御引合今般貴國人を斷刑に處し候義は不忍儀に候へ共不得止事にて畢竟支那と條約無之より他の締盟國人と同樣に處する能はすして不都合の廉に有之且又上海等にて贋札取拵候もの有之候はゝ道臺戮力取締相立呉候樣今般斷刑に可及子細御申入旁右答振御聞取被成早々御報有之度其上にて右支那人斷刑いたし候積に候此段至急及御掛合候也

with Japan, as not intelligible enough, and leading to different interpretations.

I do not think that it belongs to me, or to any consul to discuss with the Government, the veritable sense of this article. The convention was entered into by the Minister of the treaty powers, and the Government of the Mikado, and these parties only, I consider are enabled of coming to an equitable understanding.

I allow myself to point out to you, that I consider in this article, as quite incompatible with European nations the assimilation of Chinese and persons of nations, having no treaty rights.

In the case before us, the punishment of death may be inflicted upon a Chinese, with an apparent reason, as the same fate would be reserved to him in his own country, for similar offense, while taking a Greek or a Peruvian, ruled in their own countries by more lenient laws, I feel most sternously convinced, that the Ministers of the treaty powers, and public opinion amongst foreigners, should earnestly interfere with execution of a like determination, taken on their behalf by the High Board of Justice of Japan.

I consequently, in fear of seeing by a precedent, assimilated Europeans with Chinese should oppose the execution of Cho-kai, till the Government of the Mikado, had settled with the Ministers, whether or not, this precedent should have any effect upon other foreigners, besides Chinese, deprived of treaty rights.

I am, sir, your most obedient servant

(Signed) F. GEISENHEIMER,
H. B. M. a. v. Consul.

To the Chiji of the Kanagawa ken.

（**右附屬書和譯文**）

以手紙致啓上候然は贋札相拵候支那人竹溪亞福非科各國岡士も同議に候得は東京の上裁斷に隨ひ日本國法を以て刑罰に所すべき旨御治定に付留守中各國岡士評決の返答有之候間拙者篤と熟考致候處約定書第四條に支那人其外日本と條約未濟の國民等吟味の節は各國岡士日本の裁判を助け候權を御免許相成候段は文意十分に解し難く異說も可生候樣存候右第四條の意味を日本政府と共に吟味いたし候義は拙者其外岡士に與り候事に有之間敷存候右約定書は

天皇政府と各國公使とにて御決議相成候義に付右兩方の內に無之候ては一定の確說難相立候樣存候但拙者一存を以て御忠告可申處は歐羅巴人に候得は支那其外條約未濟國人とは一樣相成間敷存候此度の事件は支那人に付其本國に於て同樣の罪狀有之候節は日本と同樣の刑法にも可有之候間只今死罪相成候ても可然候樣に存候得共若希臘(ギリシヤ)人又は孛露(ペーリウ)人に有之候節は其本國に於ては右樣嚴刑に有之間敷候間日本上裁斷にて右樣御決定相成候ても必各國公使竝外國人中の公論を以て異存可申立存候若支那人も歐羅巴人同樣に考候例に有之候得は竹溪の罰方は異存有之候尤支那人の外條約無之國民には格別の例の有無に係らす

天皇政府と各國公使と御議定相成候得は異議無之候右得御意度如此御坐候以上

千八百七十年第八月十四日

白岡士

ゲイセンヘーメル

神奈川縣知事御中

一二七　九月五日（九月三十九日）外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務大丞等宛

清國天津ニ於ケル清國官吏及英、米、蘭、獨各領事トノ應接竝ニ清佛關係ニ關シ報告ノ件

時下各位御勵精御安泰奢賀の至存候陳は先便寸楮を以申入候通り去月廿七日米國天津行驛船(船名滿洲)へ同行總客乘込翌廿八日拂曉發碇海上無異當月一日午後山東省登州府福山縣烟臺と申處の芝罘港にて休息二日發帆三日夜天津口へ碇泊昨四日第三字北京直隸天津府天津縣へ上陸同地三岔河邊劉森と申者宅へ一同投宿此段御安念願入候

一清佛一件の義いまた當地到着間も無之委敷は承知不致候へ共今日米國領事談話に據り候へは直隸總督曾國藩江南總督に轉任李鴻章と申者替りに直隸總督に任し即ち明六日事務引續き候由に有之右李鴻章は清朝宿望の大臣にて事務練達の人材に候へは此差縺れ一件も妥當の處置可致申居候

一六月中燒拂候天主堂一見いたし候處破壞いたし候儘の景況に御坐候死骸を投し候は即當今投宿いたし候前岸三岔河流と被存候當港景況は一向田舍のことく外人居留地も極些少に見受申候

一今五日當地駐劄いたし居候三口通商事務大臣成琳と申者の僚員六七品位の役人連興なる者下宿處へ來り兼て上海道臺より縣合有之候末待居候處昨四日到着の趣承及ひ候に付尋來候趣に付即書翰を以到着人名相屆け幷大臣成琳へ引合申度日限相定示候樣申遣し候將又各國領事中英米蘭孛等へ今日前光義質同道行向上海岡士よりの轉書相渡候處何れも承引彼是心切いたし呉申候

先は右天津到着御屆迄如是御坐候尙後便縷々可申入候此段卿大輔殿へ可然御申上願上候早々頓首

九月五日　天津客舍にて

尾里政道
名倉信敦
鄭永寧
花房義質
柳原前光

外務大少丞御中

一二八　九月十二日（十月六日）外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ英、佛、米、蘭、獨各公使宛

外務權大丞柳原前光等清國北京ヘ赴クニ付同地在留公使ヘ便宜供與方通達アリ度旨依賴ノ件

以手紙致啓上候然は先般柳原權大丞外四人支那上海へ差遣し候處北京へも差越候都合相成候に付同所の事情熟察のため近日猶又上海より北京へ出立いたし候趣右のもの共より申越候就ては同所の義は一同諸事不案內にも有之自然彼地在留の貴國公使等へ御依賴申入候義も有之候節は可然御添心被下候樣閣下より彼地御同職へ近便御書送被下度所希望に御坐候此段御賴申度如此御坐候以上

午九月十二日　御兩名

英佛獨米蘭公使閣下

一二九　九月十三日（十月七日）英吉利公使ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

外務權大丞柳原前光等北京ヘ赴クニ付同地駐劄

代理公使ヘ便宜供與通達方了承ノ件

Yedo, October 7, 1870.

The Undersigned has the honor to acknowledge the receipt this morning of Their Excellencies' despatch of yesterday's date stating the objects of the mission to China of Yanagiwara Gontaijô and desiring the Undersigned to request Her Majesty's Representative at Pekin to afford his good offices to the above-mentioned officer in case he should stand in need of assistance.

The Undersigned begs to inform Their Excellencies that he will have much pleasure in meeting the request of Their Excellencies, and he will accordingly communicate the above despatch to T. F. Wade Esquire C. B. Her Majesty's Chargé d'Affaires at Pekin by the American steamer which leaves for China to-morrow afternoon.

The Undersigned avails himself of the present opportunity to renew to Their Excellencies the assurance of his most distinguished consideration.

HARRY S. PARKES,

Her Britannic Majesty's Envoy
Extraordinary and Minister Plenipotentiary.

Their Excellencies
Sawa Ju San i Fujiwara Noriyoshi,
Terashima Ju Shi i Fujiwara Munenori,
etc., etc., etc.

（右和譯文）

昨十一日附の貴翰落手柳原權大丞支那國ゑ被遣候に付云々被仰越仍て我國北京出張公使右御同人御周旋御依頼の節は御周旋可致候樣拙者より可申通旨致承知候仍て欣然御望に隨ひ申候則右御來簡は明日午後支那ゑ出帆の飛脚船を以北京出張の我公使シャルゼダヘイルテーイフヲイテシベルゑ通達致候右爲回答如此御坐候以上

庚午九月十三日

大貌利太尼亞全權公使
ハルリーパークス
閣下

澤從三位清原宣嘉
寺嶋從四位藤原宗則

（九月十三日）
（十月七日）

外亞米利加澤辨理公使ヨリ同大輔寺島宗則宛

外務權大丞柳原前光等北京ヘ赴クニ付同地駐箚公使ヘ便宜供與通達方了承ノ件

附屬書　九月十三日亞米利加辨理公使ヨリ清國駐箚亞米利加公使宛書翰寫

右便宜供與方依頼ノ件

No. 106.　U. S. Legation, Yokohama,
Japan, October 7th 1870.

Your despatch of date the 12th of September last informing me of your intention to form a treaty with the Empire of China and asking me to furnish your Commissioners Mr. Yanagiwara Gon Daigio and four others a letter of introduction to Mr. Low, American Minister at Pekin, has been received by me to-day.

I have hastened to comply with your request and as desired by you I herewith send you a duplicate of the letter which I have transmitted by this mail to his Excellency F. F. Low.

With respect and consideration,
C. E. DE LONG,
U. S. Minister Resident.

To their Excellencies
The Ministers for Foreign Affairs,
etc., etc., etc.

（附屬書）

Enclosure No. 1.

No. 107.　U. S. Legation, Yokohama,
Japan, October 7, 1870.

Sir,

At the request of their Excellencies the Ministers for Foreign Affairs for the Empire of Japan I by these presents beg leave to introduce to you Mr. Yanagiwara Gon Daigio and four companions Commissioners deputed by the authorities of this Empire to conclude a Treaty between Japan and China.

As these Japanese Gentlemen are strangers in China and unused to the transaction of business of the nation now undertaken by them I most respectfully request of you that you will extend to them not only personally but officially all assistance in

your power to the end that they may not only succeed in making a Treaty but that they may obtain in that Treaty all reasonable conditions such as you would desire for our own country.

I have the honor to remain, Sir,
Your most obedient Servant,
C. E. DE LONG,
U. S. Minister Resident.

To
Hon. F. F. Low,
Envoy Extraordinary and Minister
Plenipotentiary Pekin, China.

（右本文和譯文）

九月十二日附貴簡今日落手披見致候然は支那皇帝と條約御取結相成候御趣意御報知柳原權大丞殿并外四君の爲北京在留米國公使ラウ氏へ添書可差遣旨御賴越の趣承知致候附ては御懇望の通右添書當郵船を以てヱフ、ヱフ、ラウ氏へ相遣申候則右書狀の寫差出候間御一覽可被下候右貴答如此御坐候以上

千八百七十年十月七日　　デ、ロング

卿
大輔　閣下

（右附屬書和譯文）

以手紙致啓上候然は日本并支那の際に條約取結の爲當皇國政府より差遣相成候柳原權大丞外四人を日本外務卿大輔の依賴に任せ閣下に御引合せ及候附ては右諸君支那の習風拜任の職務引會方等慣習不被致候間右諸君公私の事務施行の爲萬端閣下御配慮被下條約取結相成候樣且閣下我國の爲に御盡力有之候通右條約の條々都て至當に結定相成候樣御周旋被下度賴存候以上

千八百七十年第十月七日　　デ、ロング

在北京米國特派公使兼全權ミニストル
ヱフ、ヱフ、ラウ閣下

一三一　九月十七日（十月十一日）　外務省ヨリ太政官辨官宛

清國上海在留邦人取締ノ爲官吏派遣方伺ノ件竝
ニ之ニ對スル太政官決裁

（朱書）「九月十七日宮本少丞宮中ヘ持參山口中辨差出ス」

辨官御中　　外務省

支那上海港の義は皇國對岸の地にて我人民次第に出張し或は開店居留の者も有之其人員追々相增候趣にて時勢不得止義の處右樣各自隨意の所業而已いたし檢束の者無之候ては往々不規に陷り可申も難計則皇國御聲聞に關涉仕候義御座候依て先頃民部省より贋札取調等のため品川通商權大佑并長崎縣神代權少屬同所出張の上右人員取締の義も粗取掛居其後當省より柳原權大丞等出使の上彌其處置に及候得共品川外壹人は其の務の御用有之進退居出一定いたさず出使の面々は既に北京へ出向候義にて同所取締の官員不差置候ては不都合の趣云々申越候間差向當省より一人長崎縣支配通辯のもの壹人上海居留人民取締として出張爲仕度存候尤支那の義未た條約不相整候得共右官員差置候義は差支無之旨柳原權大丞等より彼地道臺へ掛合濟の事に御坐候此儀至急御沙汰有之樣致候也

庚午九月

（四日朱筆）
附札
（朱書）「可爲伺之通事」

一三二　九月十七日（十月十一日）　外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務大丞等宛

清國天津ニ於ケル三口通商大臣ト條約締結豫備交渉ノ顚末報告ノ件

附屬書一、九月十一日清國三口通商大臣ヨリ外務權大丞（清國出張）柳原前光等宛書翰寫
外務權大丞柳原前光等トノ應接交渉ニ關スル清國總理衙門王大臣等ヨリノ書翰送付ノ件
二、九月七日清國總理衙門王大臣等ヨリ同國三口通商大臣宛書翰寫
外務權大丞柳原前光等ト通信事宜ノ商議條約締結豫備交渉ハ清國天津ニテ三口通商大臣之ニ應スヘキ旨指令ノ件
三、九月九日清國總理衙門王大臣等ヨリ同國三口

通商大臣宛書翰寫

外務權大丞柳原前光等總理衙門ノ本旨ヲ傳達スヘキ旨指令ノ件

秋冷の際卿輔御始益御健剛各位御勵職天の一方を拜し奢賀奉翹望候陳は同行前光以下安穩罷在御笑放奉願候陳は先便以一管情狀申上候後去七日二品總理各國事務兼署三口通商大臣成林役邸え參り談判仕候處同人申聞候には今般天津え御到着の儀先日上海道臺涂宗瀛より申來候に付早速北京總理各國衙門大臣え取計方相伺候處是迄泰西各國と條約致候には先つ天津にて約定致候事成例に有之就ては本人には現在總理各國事務大臣にて恭親王名代として出張致居候條諸事件承り申へく相答候に付是迄の成例に有之候得は强て不申張候得共何分本省卿大輔の書簡は總理各國事務大臣の第一長官なる恭親王に見へ直に差出し度申込候處成林申候には左候得は猶北京表王大臣恭親王也え相伺返答可致旨にて其日は相濟其後十一日に到り成林より恭親王始大臣連名返翰到着致候處元より大日本國の義は相距る一海にして禮義の邦柄通信の義深く冀望致し候條萬事成林に於て條約の內議は商定可致殊更時既已に九秋に相成り彼是致候うち天津河冰凍致候ては不都合に付夫迄に條約談判相遂け大日本の官員の來意を遂しめ速に成功歸朝の手筈に爲相運以て和誼を敦くするを大旨趣と可致併しなから北京に入り候義は敢て恭親王自重且薄待致し候譯には無之候得共是迄泰西各國條約の例皆天津にて相濟候後入京候事成軌に有之元より大日本國は隣交舊誼と申し外國の比には無之候得共是迄の舊例を破り日本計りに親昵致し候樣相成候ては他外國の議論を可受申候條此段保重淳々申陳し相理り候樣返答參り候趣にて即ち別紙兩度北京總理衙門より來函を錄し相見せ候即別紙寫し差上申候右の儀は是迄の舊軌尤の次第何分條約內談を大本と致し候事故領承仕り置候其後當今一同客寓致居候族昌洋行亭主三品銜劉森號樹滋え今般條約內議掛り通商大臣成林より相命し別して日々接近都合宜敷十二日に到り右劉森へ卿大輔より總理衙門えの御書簡相託し成林へ差出し同人より北京各國事務大臣へ差立相賴み候處慥に落收仕り尙又昨十六日皇國清國條約艸稿出來の上劉森え託し成林へ差出し置申候尙成林熟覽の後較論仕り其後恭親王始しめへ伺定候後前光等と右通商大臣成林と調印此後欽差大使差來の日

本條約に取掛り候地位と致しなを御國在留支那人處置且御國人支那に居候者處置等も談し百事遺算なく相整候上後十月初旬より天津河冰凍致し候事故必定右期迄に成功引揚歸朝の心得に御坐候意外に都合克相運ひ眞に　皇國も大幸兼て御心痛の件々も御冰解有之度存候

一清國有名の宰相武英殿大學士兩江總督曾國藩太子太保協辦大學士直隸提督李鴻章其他道臺知府縣等え面會談詰致し候處何れも　皇國を禮義の邦とし宇內今日の勢に際し和漢通交するは最も欲する處と保し一同喜悅仕居候

一頃日承り及候には佛孛交戰佛大敗且內亂を生し共和政治の體を定立し何某大統領と相成り百事瓦解に付佛帝八萬の兵を率ひ孛に降參に及候即ち佛主を日耳曼中に幽囚佛后及太子は英國へ遁逃方今孛兵佛都を圍攻致し居り佛大統領某書をビスマルクえ送り其來りて和を議するを請ふと云

一羅馬を鎭戍致居候意太利亞兵數千人佛帝の敗を聞き突擧地を侵略し法王を擁し候趣也

一六月中焚拂候當地天主堂一件頃日大學士李鴻章外國と談判右暴擧に及候亘魁十五人斬首餘關係廿二人は僻地に流謫の上天主堂且其他外國人亭宅殘破の分は惣て修造し且償金若干差出候に略定の趣承及候右斬首は今三四日中は當地にて處刑取行候旨也

先は要用耳輪船便申入候早々頓首尙時下御自愛是祈不悉

九月十七日書置

天津三岔河上旗昌洋行にて

鄭永寧

花房義質

柳原前光

外務大少丞御中

副啓名倉尾里等よりも可然申出候省中何れへも宜敷御致聲可被下候也

猶以乍御面倒前光より岩倉大納言伊達大藏卿等へ書翰早々御送り奉煩願候也

（附屬書一）

大清欽命二品頂戴大理寺卿稽查左翼覺羅學事務大臣總理各國事務大臣署三口通商大臣兼管天津等關成林　爲照會事九月初七日接見

貴出使等來署晤面時據云意欲赴京業經本大臣面告各國官員初次到津欲請議約通商事宜應在津與通商大臣先行酌議因

貴出使必欲前往北京親遞信函是以本大臣不能不代貴出使等（註「研清日記」三（「貴出使等下アリ」）（註「研清日記」三（「必為」刪ナシ））
欲往京都之意函達

總理衙門請示遵辦嗣於本月十一日接准
總理衙門來函竝初九日先接到
總理衙門來函相應一併抄錄爲此照會
貴出使等希即查閱可也須至照會者

計粘抄　總理衙門來函二紙

右　照　會

大日本外務省出使柳原等

同治九年九月十一日

右九月十一日晚七點鐘到來

（附屬書二）

照錄總理各國事務衙門來函
（同註）竹坪（或林鶴也）
竹坪閣下本月初五日接准

來函內稱據江蘇涂道宗瀛稟稱日本藩譯官持長崎來書係報
權大丞柳原前光等奉委前來預商通信事宜業於八月十七日
到滬尚有應議之事必須親自赴京方能回國銷委竝抄錄日本
國函稿該道稟稿咨送前來衙門查閱日本函稿內敍明此次委
員前來商議通信事宜以爲他日定條約之地似乎此來意在專

議通商而於立約一層僅於此次陳述其意然換約事宜必須派
有欽差方能與中國大臣面議若僅止委官前來尚不能遽行議
約此係歷屆辦法如果專議通商亦應先由（註「研清日記」三（「尊」下ニ「轉」アリ）尊處晤面商議毋
遽給護照進京方與成案相符緣總署王大臣斷難與該委員接
見也倘有應議之件亦應由
閣下代爲轉達在津聽候回信切勿遽令來京致與從前歷次辦理（註「研清日記」三（「次」ナシ）
泰西各國在津議約成案不符是爲至要專此而復順候（註「研清日記」三（「西」ハ「諸」下アリ）

勛祺

五　毛昶熙
三　董恂
一　恭親王
二　寶鋆　同啓
四　沈桂芬
六　崇綸

此信九月初七日由總署發初九日到津

（附屬書三）

照錄總理各國事務衙門來函
竹坪閣下前布一函諒已遞到本月初九日復接
來函知日本委員柳原前光等已於初七日午刻到貴署會晤

閣下竝面陳奉總理外務省大臣之諭由滬上而至津郡擬赴都門
欲見本王大臣親遞信件以通和誼始能回國銷差等語查日本
與中國相距一海人皆樸實俗尚儒雅素稱禮義之邦此次柳原
等五員隨帶僕從數人航海來津歷經風濤（濤カ）之險跋涉重洋之路
原係預前商議通信事宜以爲他日酌定條約地步本衙門前次
覆函內（註「研清日記」三（「函」ハ「案」下アリ）業將與歷次在津辦過成（案カ）業不符礙難情形據實詳敍茲
不復述諒

閣下在本衙門辦理各國交涉事件歷有年所亦深悉柳原等未便
遽行進京且與向章不符而今
閣下不能不渝函代請者自必以柳原等此次初到中國似
閣下故爲阻止有意薄待渠等耳殊不知決非
閣下有意薄待尤非本王大臣不肯輕見實與歷屆成案不符諸多
礙難若柳原等不以
閣下相告之言爲憑倘遽然來京本王大臣決不能相見有違體制
彼時勿謂本王大臣有意輕視也仍祈
閣下再爲詳細切實相告萬勿往返徒勞有需時日現屆九秋既抄
風霜嚴肅轉瞬冰凝河凍舟行不易所有預前應議各事宜即與
閣下速爲商定妥慎以便柳原等及早揚帆南下旋國銷差庶免久
留異地以敎和誼也專此飛佈即頌

勛祉

毛昶熙
董恂
恭親王
寶鋆　同啓
沈桂芬
崇綸

此信九月初九日由總署發十一日到津

一三三　九月二十五日（十月十九日）外務省ヨリ太政官辨官宛

清國上海在留邦人取締官吏任命ニ關シ伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決議

辨官御中　外務省

支那上海港の義は
御國民次第に出張し或は開店居留の者も有之右人民取締と
して官員不差出候ては往々不都合の趣柳原權大丞其外より
申越候間差向當省より壹人長崎縣支配通辯の者壹人彼地出

貼紙

張爲仕度存候に付至急御沙汰有之候樣相伺置候處品川通商權大佑大藏省用務も格別の義無之由に付同人一等御登任當省兼務被仰付外に附添の者壹人當省にて精選候樣御評議に付見込の次第等承知被成度旨委細致承知候右通商權大佑義は其通被仰付聊存寄無之候且又附添の者に就ては精々省評を盡し候處當省齋藤權少錄義大に御用辨相成候者に付彼地出張被仰付至當の人柄と存候間御異存無之候はゝ右兩人共え夫々至急御沙汰相成候樣致し度存候此旨御問合に付申進候也

庚午九月廿五日

（欠題）

可爲伺之通事

一三四　九月二十五日（十月十九日）　佛蘭西公使ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

外務權大丞柳原前光等北京へ赴クニ付同地駐劄代理公使ヘ便宜供與通達方了承ノ件

Légation DE FRANCE AU Japon.

Yokohama, le 19 Octobre, 1870.

Messieurs les Ministres,

J'ai reçu la lettre que Vos Excellences m'ont fait l'honneur de m'adresser pour me demander de recommander M. Yanaguiwara gon-daï djio des affaires Etrangères à la Légation de France à Pekin. Je me suis empressé d'écrire à ce sujet à M. le Comte de Rochechouart et Vos Excellences peuvent être assurées que l'envoyé du Gouvernement Japonais trouvera le meilleur accueil auprès de notre chargé d'affaires qui sera très heureux de lui venir en aide si l'occasion s'en présente.

Veuillez agréer, Messieurs les Ministres l'assurance de ma haute considération.

MAX. OUTREY.

Leurs Excellences Messieurs Sawa et Térasima.

（右和譯文）

御書翰致落手候然は柳原外務權大丞清國北京の佛國公使館へ以添書紹介爲成度儀右添書速に同所在留コントデロッセスワルと申シヤルジエダフエルへ差送り置候に付同人において急度貴政府の御使懇に可取扱又御入用次第恐悦を以周旋可申上と御信用可被下候此段可得御意如斯御座候以上

九月廿五日

マキス　ウトレイ

澤　外務卿
寺島外務大輔　閣下

一三五　九月日缺（月日）

外務省員ヲ清國上海ニ駐在セシムル件ノ省伺

附屬書一、清國上海出張官員ニ對シ職務指示ノ達案

二、右職務細目案

省　伺

今度品川通商權大佑へ外務大錄被命齋藤外務權少錄とも兩人え支那上海縣出張被命候に付ては後來彌兩國通商條約相整候上は則領事（コンシュルに當る）の職を置商人取締等可爲致場合をいたし相勤候義に付其勤筋別紙の通先つ相達可申被存候

我商人我國產を荷物となし外國え帶往し貿易を遂げ候節其港輸入稅は其地の稅關に相納は當然の儀にて其他我政府へ可差出輸出稅の法則相立不申候ては外國商人共我內地商民の名に假托し我國產を輸出の患無之とも難申依て稅法は內外商民の差別なく一致に不取極候はては法則難相立儀にて差向當今の取締筋致勘辨候處我商民たりとも荷物を海外へ帶往し貿易をなさんと欲し候者は矢張各開港場の運上所へ爲願出外國人同樣從價定額の五分稅爲差出の上にて免狀相渡し其免狀は上海縣にて相改稅濟有無判然爲相改候はゝ大凡御取締も可相立被存候右にて可然候はゝ內地商民へ支那貿易の義免許の御布令幷右稅差上方其他の心得方迄新に御布告相成候樣仕度先別紙丈けを以此段相伺申候

午　九　月

註　本文書附屬書ハ「法規分類大全」等ニ依レハ十月三日名宛人ニ夫々達セラレタルモノト認メラル

品川外務大錄
齋藤外務權少錄

（附屬書一）

支那上海港出張同所我國人民取締申付候事
支那日本貿易筋に付監督申付候事
支那官員交際幷上海在留歐羅巴同盟各國官吏親和の事
右の通相心得尤細目は別紙を以相達候事

明治三庚午年十月

外務省

（附屬書二）

取締

支那は條約未濟に候得共追々我國人民出張の趣に付右の者共は其支配下の心得を以萬事處置可致候事
商民出店又は出稼の者其他一時渡來の者に至迄其方共出張所へ爲相屆其渡來の趣意相尋御印章有無幷身分姓名等巨細に取調簿帳へ記載し月々報上可致候事
御印章所持無之ものは其國え出立の手續篤と吟味いたし全く御規則不相心得漫然渡海の者に候はゝ其貫籍等取調の上其方共より假に姓名記可相渡置或は脫走等の趣意にて逃避の惡徒にも可有之被相見候はゝ支那官員えも打合助力を乞取押便船を以長崎又は各開港場の內便誼の處へ送り歸し可申候事

本文姓名記相渡候に付ては士商の差別なく壹人に付金五百疋つゝ手數料取立出張所入用の內へ遣廻し可申事
逃避の者に無之御印章所持無之者を吟味に取懸り彼是不服の體にて官へ對し抵抗いたし候者は士商の差別なく嚴重に申談し直樣歸國可爲致萬一猶其命を奉せす彼是强論申張候はゝ取押可申候事
地所借受又は店借等いたし候者は其立會いたし可遣支那官府へ掛合事は惣て相對に不爲取計其方共取次いたし相當の筋に候はゝ周旋いたし可遣候事
出張の人民不良の所業見聞候はゝ其方限りにて檢束出來候丈けの事は可成穩便に取纏め可申罪狀輕からす難打捨置ものは各開港場の內へ送り歸し知縣事へ可引渡候事
我人民貿易上の損失に付訴訟筋は勿論災難危害の事柄は盡力救助いたし可遣彼國官府へ可掛合事は一々正理を以應接可致事
前條の趣に付重大の事に相成手限を以取調處置難及程に候はゝ早々本省へ報上し差圖受可取計尤至急差掛り候儀は長崎知縣事へ可及相談且其趣支那官員へ掛合可置候事
我不良の徒支那人と申合兩國の間に取惡事を企候樣子相聞候はゝ速に支那官府へ打合我國人は召捕可申尤贋札製造の如き奸惡の支那人無之とも難申候間支那人の動靜とも篤と注意可致候事
支那官府の法度律令は篤と取調相心得可居彼國禁令は能々注意いたし其方共は勿論我人民に至迄可成は律令に依遵可致則兩國懇親の基也尤我御法令に取齟齬の趣意有之依遵難致廉も有之候はゝ兼て其旨支那官府へ相斷置可申事
歐羅巴各國と支那條約は則我人民も從守可致ものと相心得其規則を違犯不致樣兼々心得置しめ世話可致候事
支那內地へ旅行いたし度と申立候者は彼官員掛合の上差許可遣尤出立歸着とも爲相屆可申事
外國人等に被雇無心に渡海いたし外國人に被委棄候者等は其手續取調其國コンシュルえ嚴敷可及掛合且歸朝の旅費等も彼より可爲相償或は其掛合へき證據手順を得す徒らに漂泊いたし居候者は官費を以也便誼にまかせ長崎港迄送り歸し可申遊手徒食外國に我人民滯留するは其末不良の事を仕出し不都合の筋に付長く差置候儀は不相成候事
公務辨理の場所は出張所と可相唱追て御國旗取建等の下知に可及候得共差向標札差出可置事

當地へ渡來の大日本人民は士商の差別なく
直樣相屆萬事差圖可受候事

年號　大日本外務
月日　出張所

取締筋の地に付御入費は追て定額取調可相伺差向月々の仕譯書取調外務省へ可差出候事

貿易

貿易は我國船を以仕出し候事に至候はゝ條々可申達候得共當今右樣の者無之候付先外國商船へ托し積廻し候荷物幷出店の者の商賣に付取締いたし候儀と可相心得候事
我國より我商人荷主と相成輸出の物品は我各開港場にて輸出稅相濟候有無嚴重檢査可致候若輸出稅不相納品は拔荷物に付其品取揚當人は差押長崎縣又は各開港場へ便誼次第可引渡候事
我商民の荷物として彼地にて買入候品我內地へ送り候ため彼港を輸出せんといたし候者は其品物の銘書品數等可爲相屆其陸揚け可致開港場への差出書へ奧印いたし可遣其稅は開港場にて取立候に付上海おゐては取立に不及事

我國より持出候品彼地より送越候品とも我商民の品を外國人の名目に托し候樣なる始末相見候はゝ急度詮議を遂奸濫の所業に無之候はゝ差許可申或は外國人に假托し稅銀を掠め候意相見候はゝいさゐに其輸入すへき港へ報上可致候事

支那人所好の物にて我國より產出し貿易の良品と可相成筋は篤と取調通商の繁盛に及候樣見込可申立候事

奸濫の品物又は僞造等衒鬻し我國產の名譽を可失體相見候はゝ其事實取糺し精々其商民へ勸喩を加へ改心可爲致猶不取用におゐては其者は各開港場へ送越其次第可申立候事

我國商民輸出入品の數并品柄共取調一ヶ月每に報上可致事

我商民支那人と貿易取引の儀可成信義を失はす訴訟不差起樣相心懸け周旋可致遣尤貿易の中間に携り候儀には無之候間妨害と不相成樣取計べき事

我商民貿易運上筋に付支那運上所え可相納ものを怠り或は掠めんと計り候者は能々取調右樣不良の念を起し我商風を壞り御國譽を失候樣の義不爲致樣精々注意可致候事

支那運上所規則并收稅取締筋居留地規則港の法則等兼て取調置追て我商民進港の者の手引いたし案內に可相成ものを一書に相認候積り兼て相心懸可申候事

西洋商人と我商人と商法取引に付訴訟筋差起我より可訴ものは彼國コンシュルへ可掛合彼より訴越候者は我商人を出張所へ呼出し吟味可致尤條約未濟の論に涉り兩國相對にて裁判いたし難き節は支那官府へ依賴し曲直とも條理を立取捌可申尤追々重大の事件に涉り判理いたし難き筋は本省へ可申立候事

交　際

支那官員とは常に懇親に交際し信義を失はす禮讓を守るへき事

節朔年序の祝禮其他の慶弔とも其儀禮を失はさる樣可致尤追々其土地相應の儀式取調可相伺候事

歐羅巴各國の岡士は我同僚にして道臺并海關司長は是を主人と見なし協議の筋は各國と比肩同意可致理勢には候へ共未た條約取結候儀には無之且岡士と同格同樣の勳向可致場合には不至候間粗其心得を以交際斟酌可有之乍然各國岡士とも疎遠不相成樣可致事

支那と各國と主客の間不和の事は可成協合周旋いたし候樣に相心得可申候尤兩國交際の形情其他非常の事務とも兼て監察注目いたし時々報上可致候事

支那と條約不相濟內は我各港內居留の支那人は我未濟國民なれは其條理を以裁判せさるを得す依て追々其事柄を申達候事も可有之其節は厚く引合を遂適當の條理貫徹候樣應接に可及候事

書翰の往復は惣て和文を本文となし漢文を譯となし可相達候彼國文を以便誼に往復するとも瑣末の小事件は是を許すへし大事或は後來の證と可相成ものは惣て和文に基くべし

文書往復の寫取纏月々報上すへき事

右條々奉守可致尤相達候外猶可伺出廉は取調早々可申出候事

明治三庚午年十月　　外務省

一三六　十月一日（十月三十五日）外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務大丞等宛

清國人金札贋造事件、阿片禁止等ニ關スル交渉經過並ニ清國事情等報告ノ件

別紙書　九月三十日清國三口通商大臣ヨリ外務權大丞（清國出張）柳原前光等宛書翰寫

金札贋造ノ清國人處置ニ關シテハ總理衙門王大臣ニ照咨スル旨回答ノ件

八月二十八日御差立の御書面九月二十三日天津到着忙手披閱仕候先以

卿殿御初御一同御勵精御奉職の旨奉遙賀候

一神奈川在留支那人竹溪橫濱新濱町峯吉東京芝中門前善吉申合楮幣贋造いたし候始末摺立のため座敷貸遣し候支那人亞福とも再應吟味の上同縣より刑部省え相伺竹溪峯吉善吉三人は斬罪亞福は徒三年と御差圖有之尤其前各國岡士并ベンソンより申出候義も有之居留支那人よりも願出候義も有之候得とも右を以て宥典の處置およひかたく云々今般條約取結談判のため態々被差出候上は是等の趣不及報告も我心に不安の情も有之殊に上海にては贋札を多く製し且兒女勾引等の義も有之右邊取締の義道臺え引合可申との趣委曲承知仕候然るに追々申上候通り前光初八月二十七日上海を辭し天津に罷越し品川等も暫時寧波え相越し候等にて右御書翰落手遲延相成候得とも丁度此節條約取結ひの義於當地通商大臣と返復討論いたし總理衙

門とも頻に往復を重ね候折柄にて至極都合も宜敷早速照會を修して各國事務大臣え差出候處別紙の通り一應の返翰差越候付まつ御廻し申候いつれ北京の伺を經候後別に返書差越可申候間其上にて御處置有之樣いたし度候申迄には無之候得とも時下寒氣にも向ひ候得は獄中病氣等不發樣爲御心附所希候

一禁鴉片烟の御布告幷小罪を犯して追放したる兩人の事何れも前一同各國事務大臣え差出置候

一前段の義に付差向上海邊取締筋談判の義は御來書の寫し相廻し品川等え委細申通し置申候尚同人ともより申上候義も可有之と存候

一條約爲取換の事追々相運ひ候得とも於北京兎角事情不通の事有之今少し結局團圓の場に至り兼候得とも返復辯論致し居候故不遠その場に至り候半と存候

一天主堂一條は結局拾六人を斬り知府知縣を放ち貳拾人を流し天主堂岡士館等を修繕し別に償金として法え十五萬兩(テール)と俄え三萬兩を可遣に相決し去二十五日天津城西門外に前文の拾六人を斬首いたし候

此黨亘魁は疾く逃逃不知行方本文拾六人は聊關係あるものにて自ら安して不逃し程のものと相聞候今之を呼て首領とし罪に處し事漸々覆るを得候得とも民心は愈不服と相聞候

一俄公使到着候故不取敢一面會いたし候處その節の話に唯今迄北京に在留候チヤルセダフヘール」(註甘)Butzow ブツソウ一應歸國の上明年春夏の際にはコンシュルゼネラールにしてチヤルセダヘールを兼ね横濱え可參よし申居候

一三港通商大臣崇厚近日法朗西え使節として出立いたし候趣

一法孛の和議再ひ破れ孛軍大擧して法京に迫ると相聞候

一皇國にて萬國公法を採用ひ局外中立を布告し各港に軍艦を配當して守衛したるは隨分各國人中に評判よろしく候

○過日横濱歟長崎歟にて法孛の水夫とも爭鬪を起したる由承候何事にて候ひし哉

右御答旁近日の事情申進度如此御坐候以上

庚午十月朔日天津認

柳原前光
花房義質
鄭永寧

外務省大少丞御中

（附屬書）

欽名二品頂戴大理寺卿稽查左大翼覺羅學事務大臣總理各國事務大臣署三口通商大臣兼管天津等關成　爲

照覆事本月二十九日准

貴出使文稱接到本外務省來函內稱據神奈川縣詳稟爲清民竹溪等仿造官鈔一案審擬斬徒應否由該地方申刑部省請旨裁決等語附具該犯供狀結案件前來但念方本使等出在清國預議條款之際如若立斬似傷比隣之誼必得本出使等經申貴國政府查覆火速寄回信函方可裁決等因准此本出使等除當將

本外務省來函及各等案件一併抄錄照送外應佇望貴大臣即爲查照函稿事理隨宜裁覆以便本出使等修函火速寄回爲此照會等因到本大臣准此具徵貴國外務省愼重人命敦篤隣誼本大臣甚爲欣悅查該犯竹溪等私造官鈔各情經擬斬徒非名律以中國之條(註「日記」三八「屬ナシ」)亦屬罪有應得惟關人命既經(註「日記」三八「惟」ノ下ニ「事」アリ)

貴國外務省函詢前來本大臣亦未便擅定現已照咨總理衙門王大臣酌核飭遵除俟奉到回文再行照會外先此備文照覆

貴出使希即查照可也須至照會者

右照會

大日本外務省出使　花柳
鄭

同治九年十月　初壹日

註　本號文書ニ對シテハ外務大丞等ヨリ十月附書翰ヲ以テ本號文書ヲ十月二十四日受領シ諸報告ヲ了承セル旨回答シ居レルモ該文書ハ省ク

一三七　十月十日（十一月三日）　長崎縣ヨリ外務省宛

外務權大丞柳原前光等清國派遣ノ通告ニ對スル上海道臺ヨリノ返翰送付ノ件

附屬書　九月清國上海道臺ヨリ長崎縣宛書翰寫

通信事宜ノ商議ハ上海道臺ノ權限外ニシテ外務權大丞柳原前光等ハ天津ニ赴ケル旨ノ件

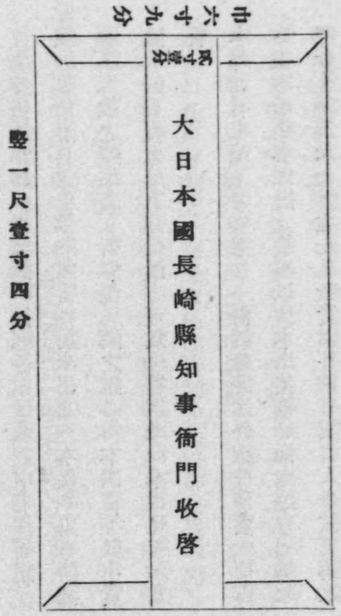
先般柳原外務權大丞其外清國え被差遣候節御下命の通上海道臺え書翰差遣候段は御屆申上置候處今便別紙返辭差送申

候に付差上申候以上

庚午十月十日

外務省御中　　長崎縣（印）

（附箋書）



遠隔重洋欣披

惠翰八月十七日

貴邦委員　權大丞諸公辱臨敝署本道以禮款接稍盡地主之誼惟諸多輸寶頗切歉懷至預商通信事宜非本道所敢擅議已轉請

通商大臣咨呈

大清欽命監督江南海關分巡蘇松太兵備道涂宗瀛拜

總理各國事務衙門酌核矣

權大丞諸公即欲遄往天津本道未克留徒挽增馳繫耳泐此

布覆希

照不宣

同治九年歲次庚午九月　日

名　正　肅

大清欽命監督江南海關分巡蘇松太兵備道涂宗瀛拜

（右附箋書和譯文）

大日本國長崎縣知事役所へ

遙々の所書翰の御惠み拜見いたし候貴國出仕の官員權大丞諸公八月十七日拙者役所へ來臨拙者これを禮接して聊地主の志を盡せしも兎角麤末勝ちにて本意に背き候その前廣に通信の事を計るは拙者手限にも出來かたければ此とと既に通商大臣の許へ請ひて總理各國事務役所へ轉達し取調あらんこと申入置たり權大丞諸公は直樣天津へ赴かんと急かれしかば拙者それを留め得せす殘念の事共多かりし此由御答及候御覽可被下候不宣

同治九年歲次庚午九月　日

名前披露

大清欽命監督江南海關分巡蘇松太兵備道涂宗瀛拜

一三八

十月十五日（発）（十一月八日）　外務大丞等ヨリ外務權大丞（清國出張）柳原前光等宛

通商權大佑品川忠道、外務權少錄齋藤龍正ノ轉任清國出張ノ通知、金札廣造ノ清國人斷罪ニ關スル日清交涉經過照會等ノ件

清國出張

柳原權大丞殿

花房權少丞殿　　外務大少丞

鄭　權　正殿

時下各位彌御清適抃賀の至存候陳は當月四日　　品川通商權大佑

外務大錄に轉任上海在留被　仰付　　齋藤外務權少錄

外務小錄に轉任同斷に付當月（マヽ）日同人義東京出立外國郵船へ乘組上海へ向け出帆いたし候其地御用筋心得方の義亘細申渡置候得とも猶其地着の上は實地心得方等無遺洩御申含有之候樣いたし度存候

吉岡權少丞森山茂廣津弘信朝鮮國爲御用被差遣候に付當月四日東京出京横濱港より郵船へ乘組同五日長崎港へ向け出帆同所より釜山浦へ渡航の筈に有之候

一竹溪斷刑の義に付先便申進置候處其後道臺へ御引合の模樣如何相成候哉差急候義に付至急御申越有之度存候

右は今般齋藤小錄其地罷越候に付此段申進候也

庚午十月

○九月二日町田大丞大學大丞に轉任九月三日谷元權大丞願の通職務被免九月廿七日馬渡權大丞大藏權大丞に轉任三輪田權大丞九月廿八日願の通免職相成申候

（朱書）「右の外爲差義も無之候間御放念可給候太政官日誌等差出候間近況御想像可及候各位御留主宅更に無事に有之是又御安念可然候以上」

註　本文書日附ヲ缺クモ外務少錄齋藤龍正カ東京出發ニ際シ携行シタルモノト認メラルル一四〇ノ端書ニ「十月十五日齋藤少錄え托す」トアリ本文書モ亦其ノ際托シタルモノト認メラルルニ付假ニ此處ニ挿入ス

一三九　十月十五日（機）（十一月八日）　外務大丞丸山作樂等ヨリ外務權大丞（清國出張）柳原前光等宛

日清交渉ニ關スル諸報告了承ノ件

清國出張
柳原權大丞殿　丸山大丞
花房權少丞殿　楠本權大丞
鄭權正殿　水野少丞
田邊少丞
宮本少丞

貼紙

聖上益御機嫌克御駐蹕被爲在恐賀至極奉存候然者八月廿四日附御書狀落手披閲時下各位彌御清適拜賀候陳は同月十七日上海道臺府署に於て當職徐宗瀛え御應接相濟翌十八日上海租界會審事務江蘇輔用同知官陳福勳役邸へ御越御談論後道臺同知等深重周旋早速飛書を以支那各港は勿論且當今天津へは佛公使應對のため有名諸大臣會合外務關係官員惣て出張の趣にて同所えも今般通信御内談の廉等亘細報知いたし呉天津へ御越官員へ御引合御手續出來に付天津へ御發帆の日合等縷々御細書の趣致承知候

一上海へ　皇國士民彼是三十餘名も參り居候趣右に付御取締筋の義に付道臺へ御引合の趣等云々御申越是又致承知候

一長崎縣より探索のため上海へ出張いたし居候橋口元平八月十八日船便にて歸縣蔡善多は道臺同知へ御應接の手續等周旋且御同行中漢語通曉の者鄭權正殿壹人に付蔡事外務省官員に被　仰付天津へ隨從の義先便御申越の處同人所勞の趣にて固辭致し候に付輪便にて歸縣御申付の由致承知候

一宮本少丞え御申越相成候品川等上海へ通商するは英佛等の名を假り商買致し候義と御心得云々御取調相成候段御書面の趣委曲致領承候

一此度天津へ御越相成候に付　皇國在住各國公使へ北京在留公使へ轉書の義別紙を以御申越是又承知則各公使へ卿大輔殿より別紙の通御書簡御達し相成申候依て控寫御廻申候

九月五日附御書狀落手披閲先便御申越の通り八月廿七日米國天津行郵船へ御一同御乗組翌九月四日北京天津縣へ上陸同所三岔河邊劉森と申者宅へ御投宿の由致承知候

一當時清佛一件の模樣米國領事談話の趣并當六月中燒拂候天主堂御一見目今の景況亘細御申越委曲致領承候

一九月五日其地通商事務大臣成林と申もの僚員連興天津御旅宿へ參り象て上海道臺より懸合有之候末御到着を相待居候處御到着の趣承りおよひ尋問候趣に付即ち書簡を以到着人名御屆け并大臣成林へ御引合日限御申遣し相成候旨將又各國領事中英米蘭孛等へ上海岡士よりの轉書御渡し相成候處何れも承引彼是心切にいたし候由承知諸般御都合よろしき儀と遐察致候

九月十七日附御書狀當月八日到來披閲陳は九月七日二品總理各國事務兼署三口通商大臣成林役邸へ御越御談判の末是迄西洋各國と條約致し候成軌に倣ひ天津にて爲取替相濟候後入京と申事に御議定相成候由云々且成林より兩度北京總理衙門よりの來函を錄入御覽候に付別紙寫被遣之致落手候其後三品銜劉森え今般條約内議掛り通商大臣より相命し別て日々御接近御都合宜敷旨同十二日右劉森へ托し卿大輔殿より總理衙門えの御書簡御差出し相成十六日　皇國御條約草稿出來の上劉森へ御托し成林へ御差出置尚成林熟覽の上恭親王始しめへ伺定候後成林と御調印此後欽差大使差來の日本條約に取掛り候地位と被成置尚我國在留支那人處置の義且御國人支那に罷在候者處置等迄御談判百事無遺算相整候上後十月初旬より天津河氷凍致し候に付右期限迄に成功御歸

朝の御心得の旨御細書の趣領承實に各位御骨折故右樣の運ひ相成候事とは乍申諸事好都合相成候は眞に　皇國の幸と生輩おゐても大慶存候

一清國有名の宰相李鴻章其他道臺知府知事等へ御面會の趣云々御申越致承知候

一佛孛交戰頃日の新聞并羅馬を鎭戍致居候意太利亞兵士數千人佛帝の敗を聞云々且六月中燒拂候天主堂一件所置振云々御申越是又委曲致領承候

右三回御書狀の件々逐一卿大輔殿へ亘細申上置候政府へも獻白いたし候儀も御坐候此度齋藤小錄御地へ罷越候に付三回御書狀取束貴酬如此候也

庚午十月

（貼紙）

太政官日誌凡七月比よりの分取揃さし立べき事

註一、本文書日附ヲ缺クモ外務少錄齋藤麗正ガ東京出發ニ

際シ携行シタルモノト認メラルル一四〇ノ端書ニ「十月十五日齋藤少錄え托す」トアリ本文書モ亦其ノ際托シタルモノト認メラルニ付假ニ此處ニ挿入ス

二、本文書ニ謂フ「控寫」ハ一二八ト同文ト認メラル

一四〇　十月十六日（十一月九日）外務省ヨリ長崎縣宛

外務大錄品川忠道、同少錄齋藤修正ノ清國上海出張ニ關シ打合ノ件

長崎縣御中　　外務省

「十月十五日齋藤少錄え托す」

支那上海港へ出張開店等いたし居候御國人民追々相增候に付爲取締當省官員品川大錄齋藤少錄右兩人出張申付萬事爲取扱候に付別紙の通心得方相達置候義に付御縣えも爲御心得寫取進申候間いさゐは右にて御承知有之度就ては向後彼地出張の者手限難取計差懸り候事件出來の節は其御縣え右兩人より御相談及ひ候義も可有之象て其旨御承知被置惣て可然御所分有之度且彼地於て相用ひ候印鑑の御見合のため別紙三枚差進此段可得御意候也

庚午十月十六日

註　本號文書ニ「別紙の通」トアルハ一三五附屬書ヲ指ス猶「別紙三枚」ハ見當ラス

一四一　十月二十七日（十一月十日）外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務大丞等宛

清國トノ條約締結幾備交渉ノ顛末並ニ阿片禁止金札贋造ノ清國人斷罪ニ關スル回答報告ノ件

別紙書一、九月十九日清國總理衙門王大臣ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛書翰

日清兩國ハ親交アリ改メテ條約締結ノ要ナキ旨回答ノ件

二、十月十一日清國三口通商大臣ヨリ外務權大丞（清國出張）柳原前光等宛書翰寫

清國總理衙門王大臣ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛書翰送付ノ件

三、十月七日清國總理衙門王大臣ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛書翰寫

條約締結ニ應スル旨ノ件

四、十月十一日清國三口通商大臣ヨリ外務權大丞（清國出張）柳原前光等宛書翰寫

金札贋造ノ清國人斷罪ハ日本國律ニ依ラレ度旨回答ノ件

庚午閏十月九日到來

一翰遙啓致候初冬辰下列位各御精勵奉職の段欣喜仕候當地に於て前光巳下依舊頑健御拋念可被下扨は前便申上候通り天津到着巳來談判向都合よく相運ひ居候處九月廿一日に到り別紙寫の通王大臣より卿大輔殿へ宛上海限り曖昧たる通商に致し度旨趣文面を飾り申來候に付右は情實不貫徹の所致より生し候には候得共甚以表裡の返答其意を不得候に付翌二十二日前光等同道武英殿大學士曾國藩協辦大學士李鴻章三口通商大臣成林公館へ行向反覆辯論說破致し候處三人共承伏仕り曾國藩は歸京の上恭親王え談論李成二人は書翰を飛し是非泰西各國同樣の條約を結ふに非されは不可の段申陳し呉候末當月三日成林前光等我館へ來り北京總理衙門に於て前光等申張候儀彌承知の模樣相告其後去十一日成林より書面を越し即ち別紙の通王大臣より卿大輔殿御名宛書翰差送り彌和漢の交際を修し皇國全權使節發遣相成候得は條約を取結ふ可き確答明白一同の加（ハヽ）加額は申迄も無之偏に天朝御威靈嚴然次に卿輔御始しめ列位御苦慮も於是や貫徹御同慶の至存候本文竝亘細情狀は歸朝の砌呈上陳述可致候得共先御安意迄略寫前後二通晋呈候先般和漢條約前光等草稿の上成林へ差送り同人より總理衙門え相送り候分は今般は留置候旨に有之當年は時既に初冬におよひ河水將凍往復の間も無之に付まつ是迄にて一同引揚委細言上尙明年全權發遣の砌御議定の手續に御坐候

一竹溪等贋札製造一件竝鴉烟禁止御命令等成林の手を經總理衙門へ差出候處鴉烟御禁令元より異存無之竹溪一件返翰は別紙寫の通り差越候條無御遠慮即御取調らへ通り御國律を以て御處置有之候て毛頭異存無之との旨に候間最早兼て御決議の通斷然御所置有之可然存候

此一件は至急の義に付早速申上候積の所輪船都合に寄り遲滯御容恕願候

先は右吉報申入候迄如是御座候也

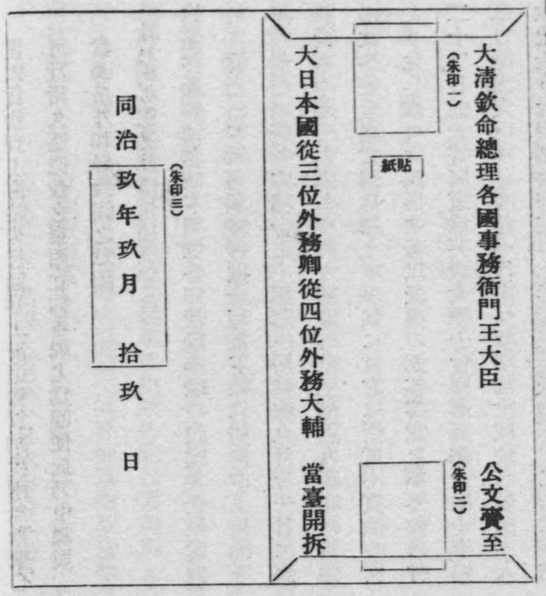
十月二十七日上海公寓

永寧
義質
前光

外務大少丞　御中

註一、本文書ニ添附セラレタル九月十九日附清國總理衙門王大臣ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛書翰ハ寫ナル處其ノ原本ヲ存スルニ依リ右原本ヲ寫ニ代ヘ附屬書一トシテ此處ニ編入スル事トセリ因ニ朱印一、二、三、四、五ハ孰レモ同一ノモノニシテ總理衙門ノ官印ナリ

（附屬書一）



（貼紙）

（朱書）「明治三年庚午九月二十一日於天津接到」

北京總理衙門照覆公文　（朱書）「第壹函」

（朱印四）（註「照會」ノ上ニ朱印アリ）

照會

大清欽命總理各國事務衙門王大臣　爲

照會事同治九年九月十四日由三口通商大臣轉遞到

貴國從四位外務權大丞柳原前光等帶來

信函備陳商議通信事宜欲與中國通商修交際之禮爲他日定條約之地查同治元年據上海道稟稱

貴國頭目助七郎等八人帶領商人十三名携有海菜等物來上海貿易迨三年四月

貴國官錫次郎等復携帶貨物數種在上海貿易而回足徵中國與

貴國久通和好交際往來已非一日緣

貴國係鄰近之邦自必愈加親厚貴國既常來上海通商嗣後仍即照前辦理彼此相信似不必更立條約古所謂大信不約也惟於

貴國貨物到上海時先行通知上海道驗貨納稅兩無欺蒙自可行諸久遠似較之泰西立約各國尤爲簡便此乃中國與

貴國格外和好親睦之意諒

貴國必洞悉此情也須至照會者

右　照　會

大日本國從三位外務卿從四位外務大輔

同治九年九月（朱印五）拾玖日

（附屬書二）

（欄外註記）欽命二品頂戴大理寺卿稽查左翼覺羅學事務大臣總理各國事務大臣署三口通商大臣兼管天津等關成　爲

照會事同治九年九月二十六日准

貴出使照會內稱接到

總理衙門回復

貴國外務卿大臣及大輔函文與來意未符照請本大臣轉達

總理衙門王大臣俯允換給准以換約信函使本出使等持回鎖差等因當經本大臣咨呈

總理衙門竝將

貴出使等面陳各情代爲詳達玆奉到

總理衙門（註「御清日記」ニ（一晃）（二別）トアリ）另覆

貴國外務卿大臣及大輔照會一件爲此備具照會送交貴出使等查收希即持回鎖差可也須至照會者

計送　總理衙門照會一件

右　照　會

大日本外務省出使　花柳

鄭

同治九年十月十二日（朱印六）（註　朱印內ニ「印」ト朱書シアリ）

（欄外註記）

再度恭親王より返翰差越候に付通商大臣副翰

（附屬書三）

大清欽命總理各國事務衙門王大臣爲再照會事前因

貴國從四位外務權大丞柳原等帶來信函意欲與中國通商修交際之禮爲他日定條約之地本王大臣以中國與

貴國本係隣邦來往通商交好已久可不必更立條約原以照格外和睦之意玆復據協辦大學士直隸總督李大理寺卿三口通商大臣成來函均稱

貴國來員柳原等堅以立約爲請本王大臣復思兩國相交固

貴誠信之相孚尤貴情意之各洽今
貴國來員既堅持來意自應如其所請以通交好之情惟議立
條約事關重大應特派使臣與中國
欽派大臣會同定議
貴國今欲與中國通商立約應俟
貴國有特派大臣到津中國自當奏請
欽派大臣會議章程明定條約以垂久遠而固邦交須至照會者

右　照　會

大日本從三位外務卿從四位外務大輔

同治九年十月初八日

（原註）「上封　表」

大清欽明總理各國事務衙門王大臣公文賚至

印　　印

大日本從三位外務卿從四位外務大輔當臺開拆

（原註）裏

同治九年十月初八日

（附屬書四）

欽命二品頂戴大理寺卿稽查左翼覺羅學事務大臣總理各國事務大臣署三口通商大臣兼管天津等關成　爲
照覆事同治九年十月初九日准
總理衙門咨開昨據貴大臣咨稱據日本國出使柳原等照會內稱清民竹溪等仿造官鈔一案審擬斬徒等因照錄出使等照會並該省來函供冊等件咨請覆覆前來查日本國外務省函據稱兩國商民營生事宜備文照會上海道應接到回函內敘兩間苟有踰越法度作奸犯科宜依犯事地方律例科罪其本國官勿庸過問等語既有成言在前今中國民竹溪等在日本國仿造官鈔其應如何懲辨之處仍由日本國自行酌覆辨理爲此咨行貴大臣查照即將此意照復日本國出使等可也等因到本大臣准此爲此照覆
貴出使等希即查照辨理可也須至照覆者

右　照　會

大日本外務省出使　花柳
　　鄭

同治九年十月十二日

（右附屬書二和譯文）

大清欽命各國事務を總へ理むる王大臣懸合する爲の事

同治九年九月十四日三口通商大臣より取次き越せし貴國從四位外務權大丞柳原前光等齎らし來りし書翰の面に通信事誼を商り議りて中國と通商し交際の禮を修め他日條約を定るの地となさんと欲するの意を備に陳へたり因て調へしに同治元年上海道よりの申建の趣に貴國頭目助七郎等八人商人拾三名を召連海菜の類を携へ上海に來りて商賣せり同三年四月に至り又貴國の官錫次郎等品物數種を携へ來り上海に於て商賣を遂け歸れりこれ中國と貴國とは久く和好を通し交際往來已に一日に非さることを徵すに足りなん貴國は隣近の邦なれはおのづから必いよ〳〵親厚を加ふべきことにこそあれ貴國常に上海に來りて通商せしことなれは此後とも是迄の通りに計ふて彼此信あらは必しも更に條約を立るに及ふまじ右謂ゆる大信不約とはこのことならん惟貴國におゐて品物を上海へ持渡る時は先つ上海道へそのこと屆けて品物を改め稅銀納めて雙方欺き蒙くことなくはおのつから之を久遠に行ふべく又之を泰西立約各國に較ふれば尤簡便にこそあらめ是すなはち中國と貴國と格別の和好親睦の意ならん料るに貴國にも必す此情洞悉あるべし仍て及懸合候也

右

大日本從三位外務卿從四位外務大輔への懸合

同治九年九月十九日

（右附屬書三和譯文）

欽命二品頂戴大理寺卿左翼覺羅學の事務を稽へ查る大臣各國事務を總へ理る大臣三口通商を署する大臣天津等の關を兼管る成懸合する爲めの事
同治九年九月廿六日貴出使の懸合を承り屆けたりその趣に總理役所より貴國外務卿大臣及大輔へ返事する書翰を受取たるに來意といまた符さるをもて當大臣より總理役所王大臣へ取次き達し引替渡しの承諾ありて條約取替すへきの信函を承り屆けてそれを當出使等持歸り使命の事濟みいたさせられたきとの云々御懸合に付其趣既に當大臣より總理役所へ申立并貴出使等御面陳の廉々をも巨細に轉達いたし置候處此度總理役所より前段貴國外務卿大臣及大輔へ回答の一書到來せり依之掛合書相添へ貴出使へ差廻し申候御落手御持歸り御事濟さるべく存候仍て及懸合候也

記　總理役所よりの掛合壹通差出

右

大日本外務省出使柳花鄭への懸合

同治九年十月十二日

（右附屬書三和譯文）

大清欽命各國事務を總へ理る衙門の王大臣再ひ懸合する爲めの事先頃

貴國從四位外務權大丞柳原等の帶ひ來りし信函に中國と通商し交際の禮を修め他日條約を定る地となさんと欲する意あるを當大臣おもへらく中國と貴國とは本隣邦にして來往通商して交好も已に久しけれは必しも更に條約を立ざるともと原と格別和睦の意をもちゐしに此度復ひ協辦大學士直隸總督（原註）李大理寺卿三口通商大臣成の來函の趣にはいつれも

貴國來員柳原等堅く立約の請ひあるとのべたり當王大臣復ひ思ふに兩國相交ること固より誠信の相孚あるを貴ひ尤情意の各洽からんことこそ肝要なれと今貴國の來員既に來意を堅持せられけれはいつれその請ふ所の如して以て交好の情を通すべけれ惟條約を議立する事重大に關れはいつれにも特派使臣と中國欽派大臣と會同して定議すへきことなり

貴國今中國と通商立約せんこと欲するもいつれ

貴國より特派大臣の天津に來ることあるを待ち中國におゐてもいつれ

欽派大臣を奏し請ひ章程を會議して明かに條約を定めもつて久遠に垂れ而して邦交を固くせん仍て懸合およひ候也

右

大日本從三位外務卿從四位外務大輔への掛合

同治九年十月八日

（右附屬書四和譯文）

欽命二品頂戴大理寺卿左翼覺羅學の事務を稽查する大臣各國事務を總理する大臣三口通商を署する大臣天津等の關を兼管する（原註）成回答のため懸合及候事

一紙貼

同治九年十月九日總理役所よりの來文承屆候その趣には先達て貴大臣より懸合の云々に日本國出使柳原等より懸合面の趣清民竹溪等政府の金札僞造一件吟味詰その罪斬徒たるべき等の云々出使懸合振り幷その本省よりの來簡口書類等の寫しを以取調ね回答あれと懸合被越候趣に付取調ね候處日本國外務省書簡の趣に兩國商民營生事宜に付書面を以上海道（原註）懸名並懸合ひて請取しその返翰内に雙方間に苟も法度を

二紙貼

蹤へ越て奸を作し科を犯すこともあらは宜く事を犯せしその地方の律例に依り罪を科すべけれその本國の官にて過問を庸る勿れ等の文言ありて既にそのこと引合ひ濟みの上は此節中國民竹溪等日本國に在て政府の金札を僞造せしその戒方處置振り如何取計ふべきの義は仍日本國にて自から斟酌吟味を遂けて取計ふことに由らん依て此段貴大臣へ御懸合申達候條其趣を以て日本國出使等への挨拶に可被及旨當大臣への懸合承屆候に付此段貴出使え回答申進候御取調御取計有之度仍て及回答候也

右

大日本外務省出使　柳花鄭えの掛合

同治九年十月十二日

（貼紙一朱書）

清朝宗派子弟ノ學ヲ覺羅學ト云

（貼紙二朱書）

貴大臣ハ總理衙門ノ咨文内ニ通商大臣成ヲ指テ呼ヒタル也

註二、本號文書附屬書二ニ謂フ「同治九年九月二十六日准貴出使照會」ニ關シ「使清日記」ニ左ノ記事アリ附記ス

廿六日己丑晴朗謄寫前稿送與成林求其副文轉達恭親王其文曰

爲照會事本年九月廿一日蒙貴大臣送到照會並附有貴國總理衙門王大臣回覆本國外務卿大臣及大輔函文一封應寄回本國報繳銷差等因當因貴總理衙門函文封固本出使等不曉底裡似乎礙難回國銷差即面晤貴大臣請示函文封内所敍何言蒙貴大臣面示以貴總理衙門來函内敍中國與日本比隣之邦人民往來久已通商彼此相信何必更立條約祇可照舊和好通商古之所謂大信不約各等語面爲反復談論本出使等因思此次前來貴國通信專爲將來換約之地今我國有泰西十四國皆已換約其各國與我相距數十萬里俱有命使港士等官跋涉重洋而來駐劄我國京師及通商口岸保護商船其愛人民也如此但我與貴國雖有商賈往來從前未曾通款換約並無官長管束保護是以西人前曾擁敕貴國商民之在我國各口營生者歸其管轄稱言附西船貿易者當以西人視之等語而間有如東邏薪之勞且于同治元年及三年間有我國小吏携帶商人往上海販賣時雖經面晤該道亦以未曾換約爲辭竟依荷蘭領事紹介方能貿易而回此亦不過以西人視之也爾後我國商民無復入上海者而貴國商人在我國貿易既久遽難變局不得不受西商拘束是可憫也經本外務卿大臣軫念貴國之民自從明未絡繹通商柔綏已久不宜置之膜外前年戊辰春間備文照會上海道應以權宜各將來商總歸該地方官約束等因及接到准明照覆當即知照在口西國各領事等將貴國人貿易還我管轄方脫樊籠因而居以別區編立戶籍優加保護就中選舉老實幹事者爲保甲月給俸銀使其勸良劝奸以安其業然終不免西人因事横議者以未曾換約故也現在我國各口營生之貴國人不下三千餘人又准我國人民聽其出外通商而不有領事專管保護正與西人實行不符似非子愛人民

之道言論及此即有比隣相信之名竝無行諸久遠之實也于是上疏請曰
方今文明大開交際日盛　皇國近與泰西換約通商者已十四國之多而
與清國獨不修交際禮深以爲憾今雖內地多事不可久曠宜亟遣使通款
早爲特派欽差換約之地或曰今時入清非由西人紹介事恐不諧卿大臣
乃與諍論以爲我國與清國唇齒隣邦至厚友誼何必自棄夙好專倚外人
爲耶須以一片至誠之心修函直達彼國當塗諒必更加親厚也疏遂上即
日降　旨着外務省速行以此特派本出使等前來今若回報不必換約實
與本外務卿大臣一片苦心相反也貴大臣至明且哲尙祈格外鼎力再請
將此苦心轉達貴總理王大臣俯允本出使等與貴大臣預議條款以爲將
來換約之地步竝祈換給准以換約信函使本出使等持回銷差則感厚誼
於無既矣如不能准使前之論者終行其志事關辱命本出使等萬難回國
銷差也合應亟切瀝情以陳爲此照會貴大臣希即查照可也須至照會者
明治三年九月二十六日

（使清日記）

一四二　十月二十七日（十一月二十日）　外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務大丞丸山作樂等宛

清國天津ヨリ上海ヘ到着ノ報告竝ニ外務大錄品川忠道等上海在勤ニ關シ同所道臺トノ應接等ニ關スル件

辰下益卿輔閣下御始列位御康寧御奉職大賀の至陳は前光已下瓦全乍憚御拋念是祈天津表にて公務談判向別啓を以て申上候通り悉皆如意成辨仕り候に付當月十九日乘船發程廿二日山東芝罘港に碇泊廿三日開船一昨廿五日第三字無滯上洋に到着依舊品川氏公寓へ投宿無異一同互に相賀し居候處猶又昨廿六日に到り入夜齋藤權少錄麗正投着面會各位御書狀拜披省中動靜分明大安心仕候就ては品川忠道事今般本省大錄に被任兼任通商大佑拜命上海在勤齋藤同樣御國民取締被仰付候件々別して都合宜敷尤品川事は何れ共前光等歸朝の上右樣相願へく存し居候事にて恰も萬里を隔て符節を合すか如く御神算敬服の至且漢語通辯も更に長崎縣より神代權少屬へ滯留相命し候上は此三人にて事務取扱候得は大に事足可申安心仕候將又品川齋藤在勤一件に付丸山大丞君より上海涂道臺并各國領事え御書面拜披仕候處右は少々不都合の廉有之候に付乍失敬實地權宜に隨ひ前光等手許にて抑留明廿八日前光等諸官員一同道臺府へ行向候節前光より道臺え品川齋藤神代三子引合せ且此上海に官員を置事は既已に天津表にて通商大臣成林へ申込同人承知の上總理各國事務衙門王大臣へ申通しなを上海道臺へ成林より申通し狀も前

光受取居候條右書面を明日涂氏に相渡し且丸山君より道臺當ての御紙面の替りに前光義質永寧三名より照會狀を作り道臺へ送り念の爲返書受取候心得に有之且當港在住領事えは前光近日品川等を俱し行向ひ相賴み置可申心得に候
一品川齋藤へ勤向心得書條目拜見致し候精細御行屆感服仕候なを前光輩一兩條見込の處は右條目に提札し亘細教示可致候事
一御來簡中町田馬渡轉任鮫島楠本鹽田新任谷元三輪田免職云云亘細承知致候
一吉岡森山廣津小林等朝鮮行發足の事承知仕候定て各位勉勵想像何卒今般清國の役の如く成功相遂候樣遙望致候
一前光等事當地要務各相片付無遺漏候得は鳥渡寧波へ一夜舟達し且形勢要港に候條渡航兩三日觀察し歸滬其後清國官吏及各國岡士等へ別を告け來閏月上旬中には遲くも發船歸途に就き可申必らす中旬には歸朝到着成功後命諸公の高議を可相伺樂居候此段申上候
一拜晤期在近先は要々耳御受旁御音信申上候早々不備謹頌時祺併々高安を祈る

十月廿七日上海公館にて

永寧
義質
前光

丸山大丞殿　鮫島大丞殿　楠本權大丞殿　水野少丞殿
宮本少丞殿　田邊少丞殿　鹽田權少丞殿

副啓省中并に文書司諸位可然御致聲仰望の至將名倉信敦品川忠道齋藤麗正尾里政道神代時次等一同可然申上候也

一四三　十月二十九日（十一月二十二日）　外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ外務省宛

外務大錄品川忠道等ヲ清國上海道臺ヘ紹介ニ關スル報告ノ件

別屬書　十月二十八日外務權大丞（清國出張）柳原前光等ヨリ清國上海道臺宛書翰寫
右紹介ニ關スル件

外務省御中　　清國出使官員

益各位御康健御奉職大賀の至陳者昨廿八日前光等道臺府へ行向ひ品川齋藤神代等召連涂宗瀛え後事相賴み引合せ相濟

即ち其刻別紙照會狀相贈り候處正に落狀亘細領承仕候猶又會審事務陳福勳も同坐仕り居候に付是又同樣相賴み候尤右照會は近日返翰差越候都合に有之候仍別紙照會を附し此段申入候也頓首

十月廿九日上海公寓

（附屬書）

大日本外務省出使外務權大丞柳外務權少丞花文書權正鄭及懸合候事

明治三年八月廿三日當出使等上海におゐて國書を齎らし北に赴き直樣總理役所へ差出し度存候付てはその行先きも御當地へは懸離れ候ことゆへいつれとも通商權大佑品川忠道長崎縣權少屬熊延長等を遣して上海へ來る本國士民取締方に付引合事務を委ね置へき儀に付其段書面を以　貴分府陳（原註）註　貴分府より傳言の趣には當道の役所にて　貴出使等の掛合面取調ね候にその上海え留員本國人民取締之云々至極御尤に存候乍去條約未濟の間は必しも書面を以御懸合には及ひ申間敷姑く此地へ留員被來候て小事は分府大事は道の役所え引合被申可然との趣當出使承屆の原文請取返し其儘北上已に天津に

［貼紙］

おゐて公事も全く計ひ濟にて歸國復命可致義に付ては上海え留員本國人民取締一件通商大臣え申述已に面諾を請けそのこと總理役所へも被申達有之殊に當出使等天津を引拂候節通商大臣夫のみに被差立候書翰言傳持越し序を以　貴道え被懸合候義に有之候處本出使等今已に上海來着に付右の次第書面を以御懸合申進候外尙　貴道え參晤の上本出使等先達て來　貴道御懇切の御配慮に預り御蔭にて公事も相纏り歸國復命を得候義をも深く可申謝に付其日取相伺置度存居候折柄當月廿六日本國外務省より別段に外務少錄齋藤麗正なるものを上海え出張爲致來りて當出使へ受取りたる外務卿大臣來柬の趣に此節我國商民遂に上海へ罷渡可申候付ては條約取替はし候までの間はいつれとも官吏差出置取締可爲致方に有之候故品川忠道を以外務大錄を加へ狂し通商大佑を兼て上海へ在留せしめ齋藤麗正を差出し之か副たらしめ熊延長を以飜譯事務を命し相共に本國人民を取締り他國の法度を犯さしめさる樣可致旨本出使承屆之候就ては其當日　貴道へ參上面謝の序右役々同伴致し御面會を得御見識り置被下自後上海にて萬端御配慮にも預りて公務爲行屆候樣いたし度將又　貴道にて右無異儀御回答被差越夫を當

出使等所持して歸國復命いたすに都合宜敷樣致し給らは千萬忝事に存候依て此段爲可得貴意及御懸合候也

三口通商大臣書翰壹封相添差出候事

右

大清欽命監督江南海關蘇松太兵備道涂ゑの懸合

明治三年十月二十八日　本國　皇曆九月大十月小

（懸紙朱書）

熊ハ神代ノ本姓

（右附屬書漢譯文）

（朱線）（註　朱線內ニ「大日本外務省出使印」ト朱書シアリ）

照　會

大日本外務省出使外務權大丞柳外務權少丞花文書權正鄭爲照會事明治三年八月二十三日本出使等在申因欲賫帶國書北上親遞　總理衙門行當遠離　貴地必須留委通商權大佑品川忠道長崎縣權少屬熊延長等約束來滬本國士民交涉事件爲此備文因

貴分府陳轉請

貴道允准據　貴分府傳言經本道署査貴出使等文所稱留員在滬約束本民云々以爲允當然未議約之間不必備文照請姑宜留員在此小事由分府大事由道署辨而可也等因本出使等准此收還原文旋卽北上業在津門辨完公事當因回國銷差隨將留員滬地約束本民事宜陳于通商大臣已承面允竝達　總理衙門在案又于本出使等辭天津日通商大臣特繕信函附寄前來卽便知照

貴道本出使等今已到滬除當備文照送外相應趨晤

貴道深謝本出使等前此多蒙

貴道切實照料藉能北上辨公完畢俾得回國銷差擬請訂期適于本月二十六日有本國　外務省另派外務少錄齋藤麗正來滬本出使等接到　外務卿大臣來函內稱今有我國商民當漸入申俟換約間必須委員鈐束故加任品川忠道以外務大錄仍兼通商大佑在留滬地派齋藤麗正爲副命熊延長充繙譯事共相約束本民毋使有犯他國典型等因到本出使等准此當藉本日晤謝

貴道之便帶同該員一齊進見面請

貴道認存以冀嗣後在滬諸邀

貴道鴻施照料庶獲辨公周妥竝祈

貴道卽發允准收照以便本出使等持回繳銷感無涯矣爲此照

條約締結ト清國皇帝謁見ノ儀禮ニ關スル件

No. 189. U. S. Legation, Yokohama,
Japan, December 24, 1870.

To their Excellencies
the Ministers for Foreign Affairs,
etc., etc., etc.

Acknowledging the receipt of Your Excellencies' Despatch informing me of the return to this Empire of Your Commissioners from China; I beg leave to advise you of the receipt by me of a Despatch from His Excellency F. F. Low U. S. Minister to China who desired me to inform you that he regretted that your Commissioners did not come to Pekin and that he was thereby prevented from extending to them such aid and assistance as he would have been most happy to have done. His Excellency also suggests the following; "That it would be bad policy and "unwise in every respect for the Japanese to make "any engagements by treaty with the Chinese by "which they would agree to perform the *Kotow* "when their Representative is presented to the Em-

會
貴道希卽査照可也須至照會者
計送 三口通商大臣信函一封
右照會
大清欽命監督江南海關蘇松太兵備道涂
（朱印ハ大日本外務省出使印ト朱書シアリ）
明治三年十月二十八日
十九本國皇帝
月崩小大

大日本外務省出使外務權少丞花
文書權權大丞柳
正郷
公文賓
玉
（朱印ハ朱書）
出使外務大臣印書本
大清欽命監督江南海關蘇松太兵備道涂
當臺開拆

內一件附通商大臣信函一封
（朱印ハ大日本外務省出使印ト朱書シアリ）
大清同治九年十月二十九日

一四四 （十一月三日 十二月三十日） 亞米利加合衆國公使ヨリ 外務卿寺島宗則宛

"peror of China." "The Emperor will become of "age in a year or two when this question of audience "must be settled *and it can be settled only in one* "*way*. Foreign Representatives will not kneel to the "Chinese Emperor and if the Japanese will only wait "a little they will be able to make a Treaty on "equal terms with other nations. If the Chinese "consent to a Treaty now they will insist of the "*Kotow* being made when the Japanese Envoy sees "the Emperor;" should the Japanese consent to this their relations will not be upon an equality with that of other nations. His Excellency submitted these suggestions to me; and I feel called upon to lay them before Your Excellencies for your consideration as you have invoked my aid in this matter. Therefore you will please give to this suggestion such weight as you may think proper.

With respect and consideration,
C. E. DE LONG,
Minister Resident.

（右和譯文）

以手紙致啓上候陳は支那より貴國使節歸朝相成候段御申越

の尊翰落手いたし候扨支那在留の亞米利加合衆國ミニストル、エフ、エフ、ローン閣下より貴國使節北京に御越有之候得は御助力も可仕の處御越無之に付終に御周旋も不出來甚殘悔の段御通達申上呉候樣申越候同氏の書翰到手致し候

且又同氏より下件をも申越候

日本にて清國との條約御取結相成候義必らず不宜候條約御取替相成候得は清國皇帝に日本目代謁見の節コートー致し候事に御同意可有之極て成行可申候支那皇帝一兩年の內には成年にも至り可申其節謁見の事も治定可致右は外國目代清國皇帝に跪叩不致事に取極可申候就ては日本にても暫時被相待候はゝ他國同樣の振合にて條約取結候義出來可申候清國にて條約取結候義同意致候はゝ日本使節清國皇帝に謁見の節コートーの義主張可致候

日本にて右に御同意有之候はゝ同國との交際外國と異り可申同氏より前文の忠告拙者迄申越候閣下此の一件に付助力の義拙者え御申越の趣も有之候間閣下の御高慮の爲前條申述候就ては前條の趣意と御注意有之度存候以上

於横濱公使館
千八百七十年第十二月二十四日

ミニストル、レシデント
シー、イー、デ、ロング

外務卿大輔閣下

（下ケ札）
コートートハ多分支那語ニテ叩頭（コートー）ノ音聲ニ似タル故其ノ字意ナルカ　譯者

一四五　十一月二十日（一八七一年一月十日）外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ亞米利加辨理公使宛

清帝謁見儀禮ニ付注意アリタルニ對シ謝ノ件

十一月廿日達

千八百七十年第十二月二十四日附の貴翰相達致披見候然は我國使節支那より歸朝いたし候に付謝詞旁御吹聽申進候處同國北京在留の貴國公使より被申越候趣にては我國使節北京に相越候へは御助力可被下の處不相越候に付折角の御注意空敷相成候趣御厚意の段は感銘いたし候將清國と條約取結且謁見禮典等の儀に付縷々御懇諭の段忝存候右は我政府おいても見込の次第も有之商議中に有之候間尚追て御添心御依賴申候儀も可有之候間回答可得御意如斯御坐候以上

年號月日　　御兩名
米國公使

一四六　十二月十八日（二月七日）外務省ヨリ太政官辨官宛

明春條約締結ノ爲清國へ使節派遣ノ際ノ進贈品調達方ニ關シ伺ノ件

辨官御中　　外務省

明春清國條約御取結大使被差遣候節は彼國皇帝竝皇太后兩宮えの御進贈の外總理外國事務衙門にて恭親王始六員餘且直隷總督天津三口通商大臣以下道臺知府縣令應接掛り小官員に至る迄爲御挨拶可被下品々其他通行筋上海山東の諸港停泊の節は各地道臺海防知縣え面會或は北京在住各國公使諸港在住の各領事等え出會の砌時宜に應し贈答すへき品類共前以用意整へ置候樣可仕存候依之去巳九月墺太利國公使參朝の節同國皇帝より差送候品竝皇帝へ御進贈且公使其外へ被下候品目錄相添此段相伺候已上

覺

太刀	壹振	代金凡五百兩位	
書籍	數大部	同	百五拾兩位
古畫但日本產山水大和風俗人物類		同	四百兩位
銅器	貳ツ	同	千兩位
漆器	貳ツ	同	千兩位
馬具	貳副	同	三百兩位
陶器	數具	同	三百兩
倭錦	四卷	同	七百兩

右は清國皇帝え

覺

蒔繪書棚	貳ツ	同	五百兩位
畫帖	貳箱	同	貳百兩位
大和錦	四卷	同	七百兩
緞子	四卷	同	百兩位
硯箱	貳ツ	同	百兩位
色紙	貳箱	同	五拾兩

右は清國皇太后兩宮え

書籍　　代金凡七百兩位
太刀　　同　千五百兩位
古漆器類　　同　千兩
馬具　　同　三百兩
偃月刀　　同　貳百兩
陶器類　　同　千兩
大和錦　　同　六百兩
緞子　　同　三百兩
縮綿類　　同　四百兩

右は恭親王以下各港道臺知府縣等應接の官員竝外國公使以下各港領事等え面會應酬の品共此中在り

右金高總計凡壹萬貳千兩を目當に致候積に御坐候に付此段申上置候尤御金出の儀大藏省え御沙汰可被下候

庚午十二月

註一、本號文書日附ハ其ノ草案ニ「庚午十二月十八日辨官ヘ差出ス」トアルニヨル
二、別紙諸目錄中墺洪國皇帝ヨリノ贈呈品目錄ハ第二卷（第二册）四六一參照他ハ省略ス

事項八 布哇國トノ修好ニ關スル件（第一卷事項三〇、第二卷事項四三參照）（事項一四參照）

一四七 （二月十五日 三月十七日 一八七〇年六月一日） 外務大臣 亞米利加 澤宣嘉 弁理公使 同 大輔 寺島宗則

布哇國外務大臣ヨリ亞米利加人「ヴァン、リード」宛書翰寫及日布修好通商條約案寫ヲ送付シ右條約締結方ニ關スル意向照會ノ件

附屬書一、明治二年十二月二十五日布哇國外務大臣ヨリ亞米利加人「ヴァン、リード」宛書翰寫

遣布使節監督正上野敬介トノ間ニ於ケル日布修好通商條約案作成ニ關スル件

二、右日布修好通商條約案寫

Legation of the United States in Japan,
Yokohama, March 16, 1870.

To
Their Excellencies
Sawa Jüsanmi Kiyowara Nobuyoshi &
Terashima Jüshii Fujiwara Munenori,
Ministers for Foreign Affairs,
etc., etc., etc.

I have the honor to transmit herewith for Your Excellencies' perusal and information copy of a letter addressed to Mr. E. M. Van Reed by the Minister for Foreign Affairs of the Sandwich Islands and also copy draft of a Treaty of Amity and Commerce agreed upon between the Minister for Foreign Affairs above mentioned and Your Commissioner Mr. Wuyeno Kantoc no Kami at Honolulu on the 19th of January last.

As soon as Your Excellencies shall have made yourselves acquainted with the contents of those two documents, it will give me pleasure at some future conference to learn Your views with regard to the proposed Treaty relations therein referred to.

With respect and consideration,

C. E. DE LONG,
Minister Resident of the United States
in Japan.

（附屬書一）

Department of Foreign Affairs,
Honolulu, Jany. 26th, 1870.

Sir,

Your despatches, as well as unofficial letters, I have duly received to-date (sic), the last one being Dec. 2nd 1869.

The visit of the Japanese Ambassadors has been very satisfactory, and, in a final letter to the undersigned, they make use of the following expression:

"We have everywhere found our countrymen well cared for, and kindly treated by their employers."

Nevertheless they have seen fit to request that 40 who desired to return, might do so, at the expense of the Japanese Government, which has been cheerfully agreed to, by the employers who have been requested to send them to Honolulu; and, having arrived, they will embark by the "R. W. Wood", a Hawaiian Bark, which has been permitted by the Ambassadors to fly the Japanese flag, on entering Yokohama; this permission being, however, sought for only as a compliment to the Japanese Government. The Ambassadors say that every vestige of doubt has been cleared away, and they will endeavor to persuade their Government to send up some young Japanese of intelligence, accompanied by laborers, for the purpose of learning sugar culture here; and likewise, some others, for the purpose of teaching our people silk culture. What will be the success of their recommendation, of course, we are unable to know.

The Ambassadors likewise stated in their Address to the King; "it is the desire and purpose of the Government of Japan to live on terms of friendship and good neighborhood with the Hawaiian nation, and to that end, will be pleased to entertain treaty relations between the two nations."

Accordingly, we have agreed upon a form of a Treaty, which you will find accompanying, but they had no authority to conclude a Treaty, & say that we must send down special authority to some one

for that purpose. They say they would recommend this, but how far it may be altered by their Government, they cannot say; they think, not at all.

On our part, we are perfectly willing to accept the Austrian, Prussian or Italian form, but you will see that this one which we forward, is concise and really all what we need.

The reason that it is put as terminating in 1872 is, that they say, that all their Treaties are to be revised at that date.

His Majesty's Government have not yet determined as to whom they may employ in the final negotiations; I take notice of your suggestion of Mr. De Long, whom Wooyeno likewise recommended. I am glad to hear that he feels friendly towards you.

I take notice of the remark in your unofficial letter to the effect "that, if it be found necessary to sacrifice any one, in order to make the Treaty, with and for His Majesty, rather than lose it, let me (you) be the one to prove my (your) sincerity for the welfare of the country"; and thank you sincerely for this evidence of this unselfishness. We will see what turns up in regard to the Treaty, upon the return of the Ambassadors, and will guide ourselves, in our future relations, by what will, then, appear advisable.

I have the honor to be

Yours truly,

CHAS. C. HARRIS.

E. Van Reed Esq.,
H. H. M.'s
Consul General,
Kanagawa.

(訳文第二)

Copy.

His Imperial Japanese Majesty the Tenno and His Majesty the King of the Hawaiian Islands, being equally animated by the desire to establish relations of friendship between the two countries, have resolved to conclude a Treaty, reciprocally advantageous, and, for that purpose, have named for their Plenipotentiaries, that is to say, His Imperial Japanese Majesty the Tenno:

····(Blank)····

and His Majesty the King of the Hawaiian Islands:

····(Blank)····

who having communicated to each other their respective Full Powers, which are found in good order, and in proper form, have agreed upon the following Articles.

Article I

There shall be perpetual peace and friendship between His Imperial Japanese Majesty the Tenno and His Majesty the King of the Hawaiian Islands, their Heirs and Successors, and between their respective Subjects.

Article II

The subjects of each of the two high contracting parties, respectively, shall have the liberty, freely and securely to come with their ships & cargoes, to all places, ports & rivers, in the territories of the other, where trade with other nations is permitted. They may remain and reside in any such ports and places, respectively, and hire & occupy houses & warehouses, and may trade in all kinds of produce, manufactures and merchandise of lawful commerce, enjoying, at all times, the same privileges as may have been, or may hereafter be, granted to the citizens and subjects of any other nation; paying, at all times, such duties & taxes as may be exacted from the citizens and subjects of other nations, doing business or residing within the territories of each of the high contracting parties.

Art. III

Each of the high contracting parties shall have the right to appoint, if it shall seem good to them, a Diplomatic Agent, who shall reside at the seat of the Government of the respective countries, and Consuls & Consular Agents, who shall reside in the ports or places within the territories of the other, where trade with other nations is permitted. The Diplomatic Agents and Consuls of each of the high contracting parties shall exercise all the authority and jurisdiction, and shall enjoy, within the territories of the other, all the rights, privileges, exemptions & immunities, which now appertain, or may hereafter appertain to Agents of the same rank, of the most favored nation.

Article IV

The two high contracting parties hereby agree that any favor, privilege or immunity whatever, in matter of commerce or navigation, which either contracting party has granted, or may hereafter grant to the citizens or subjects of any other State, gratuitously, shall be extended to the citizens or subjects of the other contracting party, gratuitously, if the concession in favor of that other State shall have been gratuitous, or in return for a compensation, as nearly as possible of proportionate value and effect, to be adjusted by mutual agreement, if the concession shall have been conditional.

Art. V

It is understood that the two high contracting parties may, on the day of—1872, propose the revision of the present Treaty, for the purpose of introducing therein such changes & amendments as experience shall show; but such notice of such revision shall be given at least one year in advance.

Art. VI

The present Treaty shall be ratified by H.I.M. the Tenno, and by H.M. the King of the Hawaiian Island, & the ratifications exchanged at——as soon as possible; and shall go into effect, from & after 6 months, after the date of such exchange of Ratifications.

The foregoing Memorandum of a Treaty, which H.H.M.'s Government proposes for acceptance, between H.I.J.M. the Tenno and H.M. the King of the Hawaiian Islands, has, this day, been agreed upon, between H. Exc. Wooyeno Kantoc no Kami, H.I.J.M.'s Special Ambassador to the Hawaiian Islands, and H. Exc. Chas. C. Harris, H.H.M.'s Minister of Foreign Affairs; which, said Memorandum of a Treaty, H.H.M.'s Minister of Foreign Affairs promises, on the part of His Hawaiian Majesty, shall be ratified and confirmed, immediately upon its being accepted by His Imperial Japanese Majesty; And, His Exc. Wooyeno Kantoc no Kami, having no authority to conclude a Treaty, promises upon his part, to recommend the same for the acceptance of H.I.J.M.'s Govt.

In testimony whereof we have hereunto affixed our respective signatures, at Honolulu, this 19th day of January 1870.

(Signed) CHAS. C. HARRIS.

(Signed) WOOYENO KANTOC NO KAMI.

（右本文和譯文）

（一）

合衆國公使館

横濱千八百七十年三月十六日

（二）

サントウキッ島外國事務執政よりイ、ユム、ウエンリード氏へ書送りし手續書の爲并右外國事務執政と日本使節上野監督正と千八百七十年一月十九日ホノル、都府において議定せし和親條約書案爲とを閣下に送る右二通の爲の趣意と閣下熟覽の上右和親條約の義に付此後閣下と御面晤の砌閣下の見込を承知いたし度候謹言

合衆國ミニストル レジデント

イ、デ ロング

（譯文）

上野監督正歸朝ノ上ナラデハ面晤トイヘドモ確答ニ及ヒガタシ

（譯文）

條約中ニ雇ハレ人ノ爲ニカヽワルケ條ヲ加ヘタシ

（右附屬書一和譯文）

千八百七十年第一月廿六日ハノル、外務局於て貴簡并内狀を落掌せり後の書簡は千八百六十九年第十二月二日附なり

日本使節の來着を甚た滿足する處なり右使節より余に宛たる書簡中に我國民を大切にし其備主にて懇に取扱ふを余等見たりと告述せり然るに歸國せんと欲する四十人を日本政府の出費にて歸國せしめんことを求むる事彼等にて至當と考へたり右人數をハノル、に送ることを談られし備主其事を心能く承諾せり右人數當所に到着の上哇布船アル、ドブリュ、ウート船に乘せ其船横濱入港の節は日本の國旗を引揚ることを使節許したり然れとも右免許は唯日本政府に禮を盡す而已にて都て疑惑の念を絶へたりと彼等言へり且當地にて砂糖の育殖を學んため人足等に附添せ日本の才智ある若輩を送り且又我國民に生絲の育殖を教導せんため他のものを送る樣に勉て日本政府に建言すへしと使節語れり其事採用せらるゝ哉否余等素より知る處にあらす

使節國王に向て哇布國と懇親に交る日本政府の希望たり右に付兩國の間に交際の條約を存保せんと欲する旨を告けた

り依て余等別紙條約案に同意せり然れとも右使節條約を取結ふ權を有せざれは其爲余等より或る人に全權を授くへしと言へり彼等此事を薦ると雖とも日本政府にて其を何樣改むる歟彼等語り能はす又は更に改めざることもあるへしと彼等思へり

余等墺太利孛漏生又は伊太利亞條約の振合にて承諾せんと欲す然るに玆に送る下案は短文にて余等か眞に要する丈のものたる事を足下知るへし千八百七十二年限りとある譯は都ての條約改正期限たる旨を彼等語りしに因てなり

右談判を盡さんため我政府にて誰を採用する歟政府にて未た治定せざるなり足下デロング氏を擧薦す上野氏もデロング氏を擧薦せり同氏足下と懇親なることを聞て喜悅する處なり

足下の內狀に條約を取結はざるより寧或る人を潰(ツヽ)し我國王陛下のため條約を取結ふ事要用と思はば當國の安全を計る足下の赤心を顯さんため足下を潰(ツヽ)せとあり其私欲なき證據を余深感謝す使節歸國の上條約一件如何變する哉向後の事は其時の模樣に因り取計へし謹言

チヤルレス、シ、ハルリス

神奈川にて

布哇國コンシユルゼネラール

イ、ウエンリード君へ

（右附屬書二和譯文）

貼紙一

大日本

天皇陛下と布哇諸島

君王陛下兩國の間に親睦の交際を起さん事を欲し兩國利益のため條約を結はん事を決定し日本

天皇陛下は　　を其全權に任し布哇諸島の

君王は　　を其全權に任し雙方互に其委任狀を示し其情實順正適當たるを察し以て左の條々を同意決定せり

第一條

大日本

天皇陛下と布哇諸島

君王陛下各其後嗣并兩國人民の間に永久の平和無窮の親睦あるへし

第二條

爰に條約を結へる兩國の臣民は他國の臣民と交易するを許せる總ての場處、諸港及ひ河河に其船舶及ひ荷物を以て自

由安全に來り得へし故に兩國の臣民右諸港、諸地に止り且住居を占め家屋土藏を借用し又之を領する事妨けなく諸種の產物、製造物、商買の法令に違背せさる商物を貿易し他國の臣民に許せし別段の免許或は此後許すへき別段の免許は常に得へき也尤爰に條約を結へる兩國の領內にて事業を營み或は居留する他國の臣民より取立つへき租稅は常に拂ふへし

第三條

爰に條約を結へる兩國若し然るへきと思はは彼プロマチツク、エゼントを命し兩國政府の首府に在留せしむへし又コンシユル或はコンシユル、エゼントを命し國中にて他國臣民と貿易する事を許せる諸港或は諸場處に居留せしむへし右兩國のコンシユル或はコンシユル、エゼントは他の最も懇親なる國の同位階を有せるエゼントの今現に得たる公理、別段の免許、免除、自由の殊典を得へし或は此後得へきものも亦然りとす

第四條

爰に條約を結へる兩國貿易航海の事に付他國の臣民え既に一般に許し或は此後許さんとする恩典、別段の免許或は自由の殊典はいつれのものにても右他國え一般に許容するものは爰に條約を結へる兩國の臣民にも一般に推及すへし又右恩典等の代りに可成丈それに適する丈の事を許すは其願出る免許採用すへきものならんには雙方同意の上決定すへし

第五條

爰に條約を結へる兩國此條約の趣を實地經驗の上變革改正せん趣意にて千八百七十二年何月何日に當り此條約を再議し得へし然れ共其再議の趣は少なくも一ケ年前に報知すへし

貼紙二

第六條

此條約は大日本

天皇陛下と布哇諸島の

君王陛下互に確證し本書は　　に於て可成速に取替すへし又此條約の趣は右本書取替の日限より六ケ月の後に施行すへし

大日本

天皇陛下と布哇諸島

君王陛下との間に結はんとする右條約の覺書は布哇諸島の

政府にて領承せんと欲する者にして日本政府より布哇島に遣はされたる特旨使節上野監督正閣下と布哇政府の外國事務宰相チヤアレス、シ、ハルリス閣下と雙方同意決定するものなり

右條約覺書は大日本天皇陛下にて領承あらは布哇政府の方にては速に定證すへきを布哇政府の外務宰相今玆に約束す又上野監督正閣下は條約を結定すへき權義を有せされは大日本政府にて此條約を承引せらるへき樣建言すへき旨を今玆に約束す

右證據として千八百七十年第一月十九日ホノルウ府にて予等互に自筆を以て性名を記す

チヤアレス、シ、ハルリス、自記

上野監督正自記

（貼紙一）

彼方より差出たる儘の方

（貼紙二）

此一條原文少しく詳ならさる處あれは譯文亦然り他日外國人に質合校正すべし　譯者敬白

一四八　二月二十三日（三月二十四日）　外務大輔寺島宗則、中辨中島錫胤ト亞米利加辨理公使トノ對話抜書

日布修好通商條約締結方及布哇出稼人ニ關スル件

午二月廿三日寺島外務大輔中島中辨米國公使え應接の內

サンドイツ島出張貴國官員上野監督正と同島外國ミニストルハルリスと條約取結申へきと遂談判候得共右を決するの權は上野に在らさるよしにて唯草稿を起し候而已との事定て御閲覽に相成候事と存候右ケ條中御異存の廉も無之候はゝ取極め彼地へ申送らん拙者御取次可申候さすれは本條約とり結ひ候ため改て御使節御差遣にも不及又は全權御遣被成候哉

其條約草案未た一覽仕らず候飜譯出來次第一閲可致候

ウエンリート不都合起せし故其事濟ざる內は條約不相成候何れ上野歸着次第閲合其事に取掛り可申候

ウエンリートにて條約談判難相成と申義に候はゝ公使呼寄可申候左すれは談判も容易に出來候

上野歸航も間も無之事故何れにも歸着次第に可仕候

承知致候

彼地にて貴國使節丁寧に取扱候事は御承知ならん人足をも能々手當いたし勞り候との事御承知の事と存候

此頃着いたせし人足共流涕なから嚴酷の取扱に逢ひし由愁訴いたし候

私は右樣には承らす至て憐み使ひ候と承り候兼て我政府よりも貴國人は他國へ雇ひ連れ行候事を差留可申樣被命候間私に於ては左樣の事は致させ間敷候

航海中も彼地在留中も至て手厚に人足共取扱候と承り居候

左に無之壹人つゝ呼寄委敷承り候處何れも酷なる取扱を受し由申聞候

左樣の事一向不存其義は意外の事に候

支那人も同樣の取扱を受居候と申事上野着島來急に日雇賃も相增し取扱も宜敷相成候と申事自在に歸國相稱候と申事極りて後は四弗の雇料が卅弗までに直あげ相成候

何故一同に歸國の事に成さらすや

雇料三十弗程にも相增候故夫等を見當に留島を歎し候ものも有之候然し年限定め通りよりは永く留めざる積りに候

我政府より兼て命令有之候故我國人此後人足體のもの召連候樣の事有之候節は御沙汰被下度候

二四五　三月二十九日（四月二十九日）

監督正上野敬介提出ノ布哇國ヨリ出稼人引戻ノ談判手續書

（事項一四參照）

一四九　四月三日（五月三日）　英吉利公使館ニ於テ外務大輔寺島宗則ト英吉利公使トノ對話抜書

布哇國ヨリ英吉利公使ニ委任アリタル日布修好通商條約締結方ニ關スル件

明治三年四月三日於英國公使館同公使え寺島外務大輔對話書の內書抜

哇布國王より御國と條約取結の義都て拙者え委任申越候右は政府於て御存寄如何に候哉

最前哇布と條約取結の儀談判有之節はウエンリードえ委任

可申遣に付御充分に御申聞有之度候
承知いたし候

一五〇 四月十四日（五月十四日） 外亞米利加辨理公使ヨリ宗則宛

布哇國ト條約締結ノ際ハ亞米利加政府ト商議アリ度旨申入ノ件

Legation of the United States in Japan.
Yokohama, May 14, 1870.

About ten years ago, (in 1860) the Hawaiian Government appointed an American merchant Mr. Smith as its Consul or Consul General for this port. Commissioning him to make a Treaty with Japan, and instructing him to solicit the friendly offices of the American Minister in this behalf; but Mr. Townsend Harris, who then held that office, declined to entertain this application.

In 1866 Mr. E. M. Van Reed, then in the employ of Messrs. Augustine Heard & Co., American Commission merchants at this port, returned to Yokohama, where he had been previously residing. Mr. Van Reed was also furnished with a Commission as Consul General from the Hawaiian Government and with power to conclude a Treaty of Amity and Commerce on behalf of that Government with Japan. He made repeated applications to the Japanese Government accordingly, but meeting with no encouragement, the Hawaiian Government finally determined to request my predecessor Mr. Van Valkenburgh to act in this matter as its Plenipotentiary.

Mr. Van Valkenburgh reported this request from the Hawaiian Government made to him, applying, if approved, for authority to act; but the President and the Secretary of State of the United States did not grant such authority, for reasons, which have not been disclosed.

It now appears, that in consequence of the recent visit of Japanese Commissioners to the Hawaiian Islands, the project of concluding at an early day a Treaty with that Government has been revived, and I have now deemed it my duty to address Your Excellencies on the subject, and to call Your attention to an important point of law, which in my opinion, would be involved in such a proceeding.

Although the King of Hawaii or the Sandwich Islands is a native of those Islands, his Ministers, as Your Excellencies are well aware, are foreigners, and a large portion of the inhabitants of Hawaii are Americans.

These Americans, if they visited Japan, would be amenable to American law; but under a Treaty, if concluded between Japan and Hawaii, they might claim to be no longer under American jurisdiction. The Consuls of Hawaii at the open ports would most probably be either Americans, Frenchmen or Englishmen, they would as such remain subject to the laws of their respective countries, and would furthermore be entirely unable to exercise sufficient control over such other foreigners, who might claim to be only amenable to Hawaiian jurisdiction, and who would certainly be expected to obey all Treaty Stipulations.

I deem it unnecessary to more specifically point out to Your Excellencies the anomalous situation,

に有之同人は米國名籍の人故其緣由を以て米公使え談話に渉り候義は有之候得共最早條約取結の義に於て差支無之上は右委任の人は何國の公使にても異論は無之候

右樣拙者え委任の義は申越候へとも哇布と條約御取結の義并委任の人との兩條の内に御異論有之候はゝ御腹藏なく御申聞有之度候

取結の義に異論は無之候へとも同國の義は軍艦も無之旁外各國同樣の條約書に無之候ても可宜と存候過日横濱出張の節米公使え面晤および候處哇布條約の義に付ては英公使え賴越候趣に付私は關係相脫し候旨話し有之候

哇布政府よりも英國政府え拙者え委任いたし度旨申遣し候よしに候哉ては米公使にても拙者にても宜敷事に候哉聊異論無之候

條約書草稿は何々條程に候哉

疑とは記臆不致候へとも凡六ヶ條程に可有之上野監督正歸國の節持越候分と其前に米公使より差越候分と同樣の物二冊有之只今反譯中に候

右草稿今日中に拜借いたし度一見の上速に返上可致候若條約ケ條中御異存の廉有之候はゝ御見込通り哇布政府え

that is likely to arise, should a Treaty be entered into between Japan and Hawaii without such extra and well defined stipulations being inserted, as will guard against the weakening of Authority over their respective Citizens and Subjects by the great maritime Powers, who are principally interested in the trade and the welfare of Japan.

And I have therefore the honor to suggest, in view of maintaining unimpaired the judicial authority of the Minister and Consuls of the United States over American Citizens in this Country, that before concluding a Treaty with Hawaii, Your Excellencies may deem it Your interest, as it would unquestionably be prudent and wise to consult my Government on this subject, and to take no action, which might be deemed hasty or unfriendly—until its opinion shall have been procured.

With respect and consideration,

C. E. DE LONG,

Minister Resident of the United States in Japan.

To

Their Excellencies

Sawa Jüsanmi Kiyowara Nobuyoshi &

Terasima Jüshii Fujiwara Munenori,

Ministers for Foreign Affairs,

etc., etc., etc.

（右和譯文）

午四月十八日出ス

千八百七十年第五月十四日横濱

日本に在る合衆國公使館におゐて

一紙貼　凡十ケ年以前則千八百六十年哇布政府にて米國商民スミツト氏を當港のコンシュルセネラールに命し

二紙貼　日本と條約を取結ふ事を委任し且此事に付米國公使懇篤の周旋を求むる事を命したり然るに其頃其職に在しトウンセント、ハルリス氏右求に應することを拒みたり以前横濱に在留せし當港米國商人ヲークスタイン、ヒールド社中に備れたるイ、エム、ウエンリート氏千八百六十六年當地に立戻りたり右ウエンリート氏も哇布政府より其政府に代り日本と和親貿易の條約を取結ふ權を授りコンシュルゼネラールの職に任せられたり右に付同人日本政府に數回掛合たれ

とも其甲斐なかりしに因り終には哇布政府より此一件を全權となりて所置する事を余が先任ファンファアルケンボルグ氏に請求するに至れり

ファンファアルケンボルグ氏哇布政府よりの請求を政府に申立て政府にて異存なければ其事を所置する命令を請ふたり然るに合衆國大統領及ひ執政右命令を與へざりし其子細は判然と掛合なきを以てなり

先頃日本の使節哇布島に赴きしに因り其政府と速に條約を取結ふ企再興せし樣に見ゆれは此一件を閣下に述へ右所置に關係すへきと思ふ法律の緊要なる廉に閣下の注意あらんを請ふは余の職掌と思へり

哇布又はサンドウヰツヽ島の王は其土人なりと雖とも若右米國人日本に來る時は米國の法律に從ふへし然るに日本と哇布の間に條約取結ひし上は右米國人條約面に據り向後米國の管轄にあらさる事の苦情を申立へし開港場在留の哇布コンシュルは多分亞人佛人又は英人の内なるへし其もの共矢張其自國の法律に從ひ其上如是他の外國人を十分進退する事決て出來さるへし右外國人等は唯哇布の管轄に屬すへきの苦情を申立且其もの共都て必らす條約面に從ふに至るへし

重に貿易及ひ日本の安全に關係し手廣く通商する國々の臣民を進退する權を減するを防くへき別段睦としたる箇條を條約中に加ふる事なくして日本と哇布との間に條約を取結ふ時は恐く生すへき不都合を余閣下に尚亘細に告述する事不用と思ふ

依之合衆國公使及ひコンシュル當國在留の米國人を裁斷する權を減せす猶存保するため哇布と條約を取結ふ以前此一件に付我政府と商議し其意見を聞く迄は輕卒又は無實と思はるゝ所置をなさゞる事無論良策なれば閣下それを閣下の益と考られんことを述ふ

在日本合衆國ミニストルレシデント

シ、イ、デロング

澤　外務卿

寺島外務大輔　閣下

（貼紙一）

意味通し兼候趣譯官にも申聞候結句何歟一了見御さ候て明白に不申出故に有之へく歟御面晤ものと存候（註　初原尚光ノ朱印ナリ）（印）

To Their Excellencies

The Ministers for Foreign Affairs,

etc., etc., etc.

From the records of this Legation it appears that the Hawaiian Government has for some years past been desirous of concluding a Treaty of Peace and Amity with the Empire of Japan.

To that end a special Power of Attorney from that Government to my predecessor Mr. Van Valkenburgh was forwarded to him whilst he was here with a Commission in due form to Mr. E. M. Van Reed as Hawaiian Consul General.

My predecessor it seems communicated these facts home to the Government of the U. S. with a request to be allowed to act for the Hawaiian Government and conclude the Treaty.

At the time when this was done the Government of the U. S. was involved in war and the letter of my predecessor seems not to have been answered; and consequently he did not proceed under the authority given to him.

During last year I was officially advised by H.E.

（貼紙二）

書中の事件は本國政府より尚沙汰有之までは御見合置被下度旨此程書簡にて申上候しか定て承知の事と存候云々

六月八日應接の節ミニストルより申出候事

哇

貼紙二ニ云フ六月八日亞米利加辨理公使トノ對話左ニ記ス因ニ該對話ハ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ト亞米利加辨理公使トノ間ニ行ハレタルモノナリ

サンドイック島條約取結一件の御談判は本國政府より尚沙汰有之候迄は御見合置被下度旨此程書簡を以て申上置候處定て御承知の事と存候

承知いたし候

一五一

（一八七一年一月十三日）

十二月三日

外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

亞米利加辨理公使ヨリ

日布修好通商條約締結發起ニ關シ亞米利加政府ノ許可アリ、又英國公使ノ都合許サザルニヨリ布哇ノ爲該條約締結ノ用意アル旨通知ノ件

No. 15.

U. S. Legation, Yokohama,

Japan, January 23rd, 1871.

Mr. Pierce U.S. Minister Resident at Hawaii that a similar request and power had been forwarded by the Hawaiian Government to H.B.M.'s Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan, Sir Harry S. Parkes; and requesting me on behalf of the Hawaiian Government to extend my good offices for his assistance.

I at once communicated these facts to the high Government that I have the honor to represent and in reply was advised that the Government of the United States was quite willing that such a Treaty should be concluded under the auspices of either the British Government or of itself.

Since the receipt of that despatch I have received from Mr. E.M. Van Reed Esq. official information of the inability of H.E. the British Minister to act for Hawaii as requested and asking my good offices to arrange and provisionally conclude a Treaty with Japan on behalf of the Hawaiian Government.

Under the sanction of the permission received from my own Government; and also under the powers extended to my predecessors and by virtue of the request made by Mr. Van Reed commissioned and empowered as Consul General to Japan from Hawaii I am quite ready and willing to do as requested by him, provided it may be the will and pleasure of His Majesty the Tenno, though Commissioners deputed for the purpose to arrange such Treaty with in subject to its future exchange and ratification by the high contracting parties.

With respect and consideration,

C. E. DE LONG,

U. S. Minister Resident.

（右和譯文）

貼紙一　第十五號

貼紙二　以手紙致啓上候陳は先頃哇布政府にて貴國と和親條約取結度義希望致候樣當公使館記錄に相見へ申候先役ファンフアルケンボルク氏貴國在留中哇布政府より右同氏にイ、ヱム、ウエンリード氏同國總領事に被命候委任狀相添へ同國代理の全權を授け申候右に付先役より其事を合衆國政府へ申遣し哇布政府に代り條約取結候義許容有之候樣申立候義と被存候折節戰爭中政府多端にて先役の書簡に恐らく回答無之

に付右同氏おゐても其事を取扱不申事と被存候昨年中哇布國在留合衆國辨理公使ピールス閣下より哇布政府にて日本在留英國特派全權公使シル、ハルリバークス閣下に右同樣の義依賴致し權を授け候由就ては哇布政府に代り拙者助力可致樣賴越申候に付早速其段我國政府へ書送致し候處政府於ては英國政府或は我國政府の助力を以て右條約取結候義最希望致し候右回答落手候後英國公使閣下依賴されし如く哇布國に代り右取扱候義出來兼候趣に付同國政府に代り貴國と假に條約取結呉候樣ウエンリード氏より公然と拙者へ賴越申候我國政府より免許有之先役哇布政府より受候權も有之且日本在留哇布總領事に被命候ウエンリード氏の賴も有之候間其爲全權のものを被命右條約被取結度叡慮に候はゝ拙者於てはウエンリード氏より依賴の通何時にても取扱可申候尤右條約は追て雙方にて爲取替可申候右可得御意如此御座候已上

千八百七十一年
第一月廿三日

米國辨理公使
シ、イ、デロンク

外務卿大輔閣下

（貼紙一）
先英の公使へ問合候上追々取調て可然か「（朱書）英ヨリ斷リヲ聞リ」

（貼紙二）
ハワイ國政府ヨリノ賴ナラハトモ角モウエンリート氏ノ賴トテ條約取結可致旨回答難及ト可申遣歟

一五二

十二月十四日（二月三日）　亞米利加公使館ニ於テ外務大輔寺島宗則ト亞米利加公使トノ對話抜書

亞米利加人「ヴアン、リード」ヨリ布哇國トノ修好通商條約締結方ヲ亞米利加公使ニ委任アリタル事ニ關スル件

庚午十二月十四日於横濱米國公使館寺島外務大輔米國公使對話の内

過日書簡を以ハワイ國條約の儀申上置候右は如何哉

我御來書にはウエンリード氏より公然依賴と有之同氏義は昨年我使節ハワイ政府於て談判の砌免職の儀談決に相成日本國地え居留丈けの義は差免す積りに有之右樣の事故同氏關係致す義にては假條約も承諾難致

左すれは其趣を以御返簡被下なは尙書翰差出可申素よりウエンリードの賴に依る事には無之全くハワイ國在留の自國公使より申越たる事に有之

歸府の上返簡可差進

一五三

十二月二十三日（二月十二日）　外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ亞米利加公使宛

布哇國政府へ亞米利加人「ヴアン、リード」ハ布哇國總領事ナルヤ否ヤ照會ノ上ニテ日布修好通商條約締結方ニ關シ申出アリ度旨回答ノ件

十二月廿三日達ス

千八百七十一年第一月廿三日附第十五號御書簡落手然は哇布國我國と條約取結の義に付云々御來意致承知候右は兼て御先役より御書通の趣且客歳哇布國へ差遣し候使節申立の趣も有之候へとも今般の御來書面にてはウエンリード氏より公然依賴云々と有之一體同氏義は我政府へ對し不都合の次第も有之ハワイ國政府へ我使節より談判におよひウエンリード氏コンシユルゼネラールの官職は被免候積の確答有之候に付彌被免候義と相心得候處御來書の趣にていまたハワイ政府にて免職不相成候哉に被察候右にては前顯の約にも相背き候間一應ハワイ政府え御問合の上尙御申越有之度候此段回答如此御座候以上

三年十二月廿三日

大輔
卿　御兩名

米國特派全權公使
デロンク閣下

事項九　太平洋海底電線ニ關スル件（事項一〇參照）

一五四　六月一日（一八七〇年六月二十九日）　亞米利加辨理公使ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

桑港ヨリ日本及清國ニ至ル海底電線敷設ニ付右電線ノ陸揚免許アリ度旨申出ノ件

Legation of the United States in Japan,
Yokohama, 29 June, 1870.

To Their Excellencies
The Ministers for Foreign Affairs,
etc., etc., etc.

Having reason to believe from the latest intelligence received by me from Washington that the President and Congress of the United States will have authorized the construction and laying of a Submarine telegraph cable to connect America from San Francisco with Japan and China, I have the honor to request Your Excellencies to notify your local authorities at this port and Nagasaki to that effect, and instruct them to designate, in concert with any officer of the United States to be named by me for that purpose, the spots where it is desirable to land such telegraph cable at the two ports named.

With respect and consideration,
C. E. DE LONG,
Minister Resident of the United States in Japan.

（右和譯文）

六月七日出ス

以手紙致啓上候然は合衆國大統領衆議の上亞米利加サンフランシスコより日本并に支那と聯接致候傳線を海中に沈め候義差許候趣此程華盛頓よりの音信にて承知致候就ては此義當港并に長崎の貴國長官に更に御告示被下且此事に付拙者より申付候合衆國士官と貴國長官談判の上右傳線兩港に陸揚致候場處被差示候樣御下命有之度存候謹言

千八百七十年　第六月廿九日横濱　米國公使　シ、イ、デロング

澤　外務卿
寺島外務大輔　閣下

一五五　六月十七日（七月十五日）　外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ亞米利加辨理公使宛

海底電線陸揚免許ニ關シテハ委細面談シ度旨回答ノ件

六月十七日達ス

西暦第六月廿九日附貴簡落手然はサンフランシスコより横濱并長崎兩港え傳線相渡し候義貴國政府より被差許候に付右陸揚場所可差示旨御申越承知いたし候右の義に付てはいつれ御面晤の上委細御談話申度存候此段御報如此御坐候以上

明治三年庚午六月　日　大輔

米國公使閣下　卿

一五六　七月二十四日（八月二十日）　外務卿澤宣嘉ト亞米利加辨理公使トノ對話抜書

海底電線ノ約定ニ關スル件

庚午七月廿四日於外務省澤外務卿米國公使應接の大意

サンフランシスコより貴國え傳機線落着の義に付場所御貸渡の免許如何被成候哉

我國え電信線落着の義は差支無之免許致候積然し右事業に不取掛以前亘細約定致度義に有之候既に丁抹よりも願立に付右同樣の所爲に致度存候既に長崎より横濱迄の陸傳信機は吾政府にて取立候積りに相成居候間夫是以永久不都合無之樣の條約致置度候

傳信機一件に付ては急き不申丁抹國傳信約定書丁國え御渡相成候已前右箇條書拜見致度吾國より引候線と續合せ候樣の事も可有之候間箇目中不都合の事あらは乍不及貴國の御爲に盡力可仕候

致承知候

一五七

九月二十八日（十月二十二日）　亞米利加辨理公使ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

海底電線陸揚免許ニ關スル處置照會ノ件

No. 122.　　U. S. Legation, Yokohama,
Japan, October 22nd, 1870.

To Their Excellencies
The Ministers for Foreign Affairs,
etc., etc., etc.

With reference to my request made several months since relative to a grant of permission for an American submarine telegraph company to land their cables on the shores of Japan at Yokohama and Nagasakii, I am now informed that the work of constructing the line from San Francisco here will be at once commenced and I am requested to at once urge this matter to a conclusion.

By the same letter conveying this request I was furnished with a Chart which I enclose to you (No. 1) showing the route of completed and contemplated lines.

Please advise me at once as to what steps you are desirous of taking in the matter.

With respect and consideration,
C. E. DE LONG,
U. S. Minister Resident.

（右和譯文）

午十月二日出ス

以手紙致啓上候陳は數月以前亞米利加海底傳信社中の爲日本横濱及長崎に右傳信線を陸揚免許の義に付相願置候處今便右傳信線をサンフランシスコより當所迄裝置の業に直樣取掛り可申に付急速右事件決議致呉候樣申越候且又同便にて目論見の傳信線全備の圖面差越候間相添一同差上申候就ては右事件に付如何御處置可被下候哉何卒早々御告知被下度相願候已上

於横濱
千八百七十年十月二十二日

ミニストル レジデント
シー、イー、デロング

（附屬書）

傳信機ヲ日本地方ニ陸揚スル免許ノ約定

第一條

會社ノ海中傳信機ヲ大日本國横濱長崎兩開港ニ於テ陸揚シ且海中ハ九州四國ノ南方ヲ廻リ其海底線ヲ右兩港ト相接セシムル事ニ付日本政府右會社ニ允准セリ

第二條

長崎横濱ニテ右傳信機取設方ノ用意ヲナシ且局ヲ建ルタメ會社ニテ要用ノ地ヲ借得ベシ尤兩港ノ日本官府ヨリ差支ナキ地ヲ指示シ可成丈ケ海濱ニ切近シテ其局ヲ建シメ且其機線ヲ地上ニ導ク爲ニ緊要ナルノ外之ヲ最モ短フスベシ

第三條

傳信局其外建物ノ爲借受タル地及傳信用ノ品物ハ條約面ニ從フテ之ヲ拂フベシ

第四條

會社ノ機線損スルト雖モ日本政府其責ヲ受ベカラス然シ日本政府ニテ右陸上ノ線及ヒ自國所持ノ線及ヒ柱同樣ニ防護スベシ且從來傳信機ヲ損スル事ニ付布告セシ刑律ハ日本領内ノ水陸ニ在ル會社傳信機ニアリテモ同般ニ行ハルベシ

外務卿大輔閣下

註　別紙「圖面」見當ラス

一五八

十月十二日（十一月五日）　外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ亞米利加辨理公使宛

海底電線陸揚免許ノ意向回答ノ件

閣議書　傳信機ヲ日本地方ニ陸揚スル免許ノ約定案

十月十九日達

千八百七十年第十月廿二日附御手紙致落手候然は兼て御申越貴國傳信社中の爲我横濱并長崎へ傳信線陸揚の儀猶又云々御來示の趣承知致し候右は貴國と我國との間のみならす全世界の利益にも相成候儀に付我政府にも固より御助力致度則大凡別紙の振合にて傳信線陸揚免許の積に有之候貴國傳信社中へ可然御達有之度存候此段回答如此御座候以上

庚午十月十二日

御　兩　名

米國公使閣下

第五條

日本人若シ日本領内ノ水陸ニ在ル會社傳信機ヲ損スルモノアリテ其證據明白ナレバ會社其者ヨリ其償ヲ得ルカ爲訴出ルノ理アルベシ

第六條

會社ニテ使役スルモノハ各其本國ノ戸籍ニ列セルモノニシテ其本國ト日本トノ條約ヲ守リ且日本ノ法ヲ遵奉スベシ

第七條

日本人民右傳信諸術ニ熟シ右ニ適スル人物アリテ此傳信機會社ニ入ンヲ請トキハ之ヲ免シ且會社ノ官員ト均シキ取扱ヲ受ケ一般ノ利益ニ至ル迄他人ト同樣タルベシ

第八條

日本政府ニテ傳ント欲スル信ハ他ノ傳信ヨリ必先ニ送ルベシ

第九條

日本政府ハ此度會社ニ其業ヲ營マシムル爲ニ之ヲ允准セシモノナレハ只一般ノ保護ヲナスノ外少シモ關係スル事ナシ向後モシ同業ヲ起サントスルモノアリテ之ヲ允准スル事アリトモ會社ニテ決シテ苦情ヲ唱フル事アルベカラス尤若シ日本政府他國ノ會社ニ此免許ヨリハ多ク利益ノアル免許ヲ出ス時ハ會社ニモ右同樣ノ利益ヲ差許スベシ

第十條

横濱ト長崎ノ間ニ日本政府ノ陸傳信機施行ノ日ヨリ横濱ト長崎之間ニ取立ル會社ノ海底線ヲ以テ差送ル總テノ傳信ノ賃銀ノ一分五厘ヲ日本政府ニ收ムベシ

第十一條

若以後日本政府ハ會社ニ加入セントシ或ハ長崎ヨリ上海迄并ニ長崎ヨリ横濱迄會社ノ海底線ヲ買入ント欲スル時ハ會社ニ於テ右兩線製造雜費ノ元金ヲ證明スベキ公書ヲ無差支會社ヨリ日本政府ニ差出スベシ其節ハ日本政府ヨリ會社ニ直ニ相談シ會社ニテ賣リ又ハ加入ノ事ヲ承諾セハ合議シテ相當ノ價ヲ以テ取極ムベシ

第十二條

此約定海底線成就ノ年ヨリ三十年ノ間施行シ三十年ヲ過ル時ハ合議シテ箇條ヲ改革スベシ

事項一〇 丁抹ト海底電線ニ關スル約定ニ關スル件（事項九參照）

一五九 四月五日（一八七〇年五月五日）

外務西郷從道宜蘇代理（函館在勤）ヨリ

露西亞ヨリ日本ヲ經テ支那ニ至ル海底電線敷設ニ付右電線ノ施設許アリ度旨申出ノ件

No. 23. Хакодате 23 Апрѣля 1870 года.

Его Превосходительству

Министру Иностранныхъ Дѣлъ

Господину Сава Уемонгонноске

Образовавшееся въ Россіи Акціонерное Общество предложило Императорскому Правительству свои услуги по устройству подводнаго телеграфа отъ Азіятскаго материка Россіи къ прибрежью Японіи и изъ Японіи въ Китай.

Императорское Правительство, имѣя въ виду что сѣть эта представляетъ и для Японіи кратчайшую и безпрерывную линію телеграфнаго сообщенія съ Европою и могущая примкнуть къ той сѣти телеграфовъ, которая въ недалекомъ будущемъ проведена и по Японіи, выказывающей стремленіе къ усвоенію плодовъ цивилизаціи Европы, и вполнѣ расчитывая на дружбу искони существующую между обоими государствами поручило мнѣ просить правительство Его Величества Микадо не отказать въ своемъ согласіи на проведеніе къ прибрежью Японіи отъ Азіятскаго материка Россіи и изъ Японіи въ Китай подводныхъ кабелей.

Имѣя честь обратиться къ Вашему Превосходительству съ просьбой объ исходатайствованіи изложеннаго и о своевременномъ увѣдомленіи меня о послѣдующемъ, прошу принять увѣреніе въ совершенномъ моемъ почтеніи и преданности.

С. ТРАХТЕНВЕРГЪ
Управ. Консульствомъ.

（右和譯文）

第廿三號

以手紙致啓上候然は我國にて此度傳信機製造方の組合出來致し候處右のもの魯西亞の亞細亞の地より日本の地夫より支那迄海中往復の傳信機を製造致し度旨我政府え申立候右傳信の機管は日本と歐羅巴通信の爲には不斷永續いたし候便捷の製作に有之候故貴國にも不遠御製造に相成候節は夫と聚合いたし候にも自由に有之且は貴國にて近年に至り漸々歐羅巴の敎治を御採用に相成候證跡も有之且は貴國と我國は舊來格別懇親も保有し候により右日本幷支那地え海中の傳信機製造の儀貴國政府にて御承知に相成候樣いたし度依て右之段相願可申旨我政府より拙者え命せられ候間可然樣御周旋被下度御商議の上否哉の貴答拙者迄御申越被下候樣奉願候此段爲可得貴意如斯に御座候以上

千八百七拾年四月廿三日

魯國岡士

タラヘテンベルグ

日本帝政府

外務卿　澤右衛門權佐閣下

一六〇　四月二十四日（五月二十四日）　外務省ヨリ函館出張開拓使宛

海底電線敷設ニ關シ露西亞領事代理ニ詳細照會方依頼ノ件

四月廿四日達ス

別紙の通魯國岡士タラヘテンベルクより書翰差出候處魯國より御國を經過し夫より支那迄海中傳信機製造の義は魯國いつれの邊より支那はいつれの處え渉り候哉且御國にて追て製造の節はいつれの邊にて繼合せ候哉右の段無急度談話の序に同人え御聞合の上委細應接の次第御申越有之候樣いたし度此段及御懸合候也

四月　日

外務省

箱館出張開拓使御中

尙以本文コンシュルは最初御國へ渡來の節委任狀か又は彼國政府よりの紹介書にても持參候義に候や一新前の事

には候得共相知れ候はゝ御報に御申越可被成候

註　本文書ニ「別紙」トアルハ一五九ヲ指ス

一六一　四月（假）（月日）　函館出張開拓使ヨリ外務省宛

海底電線敷設ニ關スル露西亞領事代理ノ口上書遞送ノ件

附屬書　露西亞領事代理（函館在勤）ノ右口上書

函館

外務省御中　　開拓使

四月廿四日付の御書狀致披見候然は魯岡士タラヘテンベルクより差出候書簡中魯國より御國えの傳信機取立の儀に付事情同岡士え可問合旨御申越致承知候則別紙の通申立候間口上書一緩御廻し申候也

註　本文書日附ヲ缺クモ一六〇ノ返翰ナルニ付假ニ此處ニ入ル

（附屬書）

魯國ペイトルホルクよりニコライス迄既に相設け有之候事

今度魯國テレカラフの組合は士官九等官のチッケン。ヘイトル、タンヤ、ゼネラル、コンシュル竝に商人エレキセントなり

ペイトルより亞細亞支那のワシハスト或はハシエタより横濱大坂長崎え傳へる尤右三ケ所の內貳ケ所え局を設たく夫より支那シャンハエ、ホンコンえ傳候見込

支那政府は既に決裁改已にホンコンえ銅線等も集め取掛り居候得とも

日本政府未決議の返答無之故海中の處未其運に不至

廣東よりペイトル迄の壹傳信賃拾六枚の定め大坂長崎横濱の傳信機は取掛りより三ケ年にて成就の見込

ホンコン、シャンハエの傳信機は取掛りより五ケ年にて成就の見込

右の次第に付兼て日本政府え願置候付一日も早く決議候樣相願候

一六二　五月三十日（六月二十八日）　外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ト丁抹使節等トノ對話書

謁見ノ儀ニ付テノ打合、海底電線敷設ニ關スル

件

庚午五月三十日外務省於て澤外務卿寺島外務大輔丁抹公使幷和蘭公使と面話の大意

一應握手了て

卿　遠洋無恙我國へ御渡來滿足の至以後益懇親の厚らんを要す

丁公使　今日始て卿大輔兩君の面謁を得候段拜賀の至兩國交際尙親睦永久なるを希望する所に候

大丞權少丞に至る迄出席一應挨拶畢て退席

今般我丁抹國王より貴國

皇帝陛下え可捧國書を持參致候間貴國

皇帝陛下え拜　謁の義兼て書簡を以相願置候得共拜奏に任せ又々申上候間不日

皇帝陛下へ拜謁の義偏に願入候

拜謁の義に付て規則未た確定不仕候間政府え打合日限可申入候就ては御持參相成候國書幷言上書拜　謁已前彼我御打合の廉も可有之候間右書面不日御差越有之度候

今日右書類幸ひ持參致候間原文幷反譯文共草稿の儘入御覽候間速に參　朝日限御報知可被下候

寺　拜　謁の義前申述候義に付規則取極候上各國公使え相談致し候上ならては日限も申入れ難く候如何となれは是迄各公使參　朝の例も有之候得共今般改て參　朝の儀式取極候に付各公使え相談もなく新定の儀式突然取行ひ候得は各國公使へ取行ひ候過去の式と今般の例と一樣ならす左候得は各公使の議論不少候に付規律相立公平の所置に致し候義故速に日限の義申入兼候

右にては拜　謁の日限も遲延に及ひ規則相立候には凡三四ヶ月も相掛り候義と存候

過日も申入置候敬稱の義に付言上書の認方等も取極不申候半ては是又規則確定とも至り難く候然し敬稱の語我片假名にて相認御差支も無之候はゝ其段政府へ問合急束拜　謁日限取極可申候

追々遲延に相成候ては困却致し候間敬稱の義片假名にても差支無之候間可成早々御取極可被下候

敬稱の義佛語相用ひ候て差支無之候哉

佛語にて差支無之候

前件にて宜敷候はゝ參　朝の手續子細の義は不日御相談に可及候

今日相伺度候

圖面等相認後日御相談に及ぶへく候

參　朝の節總人員何程に候哉

私幷岡士ベビール兩人のみに候得とも爲差添蘭公使同道仕候然し拜　謁の砌は　玉座前えは不罷出唯御所內控所迄同陪致候義に有之候

日本天皇陛下の御勅語振は御書付に候や又は御口上に有之候や

列座官員の者　勅語振を申通其上書付御渡に相成候

天皇陛下よりの御勅語は何に歟有之候や

最初二三語被　仰候義に有之候

丁國公使シツキ氏には日本國渡來は始ての義に有之候哉

貴國えは始て渡來致し候是迄迎も彼我兩國間の交際親睦なれとも尙此上厚からんを希望する所に候就ては今般貴國の爲に盛大なる便利を謀り今度渡來致し候義に有之我國に於て今般傳信器製造に付社中を結ひ歐洲より亞州を通し傳機線を造營の見込に候

今日乍序右造營手續概略申述候先つ日本國より支那幷魯國迄傳機線を通し候得は貴國の爲に多少の益ある事無量の事に候右樣私方於て製造致し候とも貴國にて右入費を御差出には不及義に有之猶子細の義は後日縷々可申上候

右御示の趣は篤と熟考の上回答可申入候得とも兎に角子細云々の義は御書記の上御廻有之度一覽其上にて確答可申入候

公使には永久我國え滯留の義に有之候哉

傳機製造の義に付渡來候故右落成の上歸國の見込に候

寺　元日本在留和蘭公使フロスブロック氏に依托致し我國え貴國よりジプロマチツクエセントを差置へき云々の書簡貴國政府へ差立置候右は御一覽被成候哉

貴國政府よりの御書簡は拜見不致候得とも御來示の趣意は承知致し候

近々我國より貴國え軍艦渡來致候

何の故にて渡來致し候哉且乘組の官員はアトミラルに候哉

何の故にも無之尋問の爲に候且アトミラル乘組には無之ケヒテーン乘込罷在候

此度傳機の義に關係渡來の義に付總てテレカラフ通信の如く拜調の日限御報知は隣息なるを妙とす

右畢て退散

一六三 (六月八十日) 外丁抹使節澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

丁抹ノ電信會社ノ概要說明ノ件

覆書 丁抹ノ電信會社ヨリノ海底電線陸揚免許草案

Yokohama, le 8 Juillet 1870.

Messieurs les Ministres,

J'ai eu l'honneur de porter verbalement à la connaissance de Vos Excellences qu'une Compagnie s'était formée à Copenhague dans le but d'établir des communications télégraphiques entre le Japon, les Indes, la Chine et la Sibérie Orientale et que cette Compagnie vient solliciter du Gouvernement Impérial la permission d'atterrir des câbles sous-marins dans les ports du Japon ouverts au commerce Européen.

Cette Compagnie dispose des fonds nécessaires; elle possède des bâteaux à vapeur; elle a ses propres ingénieurs et le Gouvernement Danois, en reconnaissant le caractère solide et honorable de cette Compagnie, a mis à sa disposition une Frégate de la Marine Royale de Danemark, le "Tordenskjold", qui prendra station dans les parages de la Chine et du Japon pour sauvegarder l'exécution de cette grande entreprise.

Je prends la liberté de soumettre ci-près à la haute appréciation de Vos Excellences un projet dans lequel se trouvent consignés les points à l'égard desquels la Compagnie désire obtenir le consentement du Gouvernement Japonais. Préalablement le plan de la Compagnie dans ses traits principaux est de réunir par des câbles sousmarins d'abord Hong-Kong avec Shanghaï puis Shanghai avec Nagasaki, ensuite Nagasaki avec Wladiwostok et Nagasaki avec Osaka et Yokohama.

Il serait superflu de fixer l'attention d'un Gouvernement aussi éclairé que le Vôtre sur les immenses services que le télégraphe est destiné à rendre à l'humanité. C'est un moyen qui peut contribuer efficacement au maintien des rapports pacifiques entre les Etats, en prévenant ou faisant cesser des malentendus. Par les câbles sousmarins projetés le Japon, comme l'indique le plan ci-joint, serait mis par la voie la plus courte en relation avec le monde entier et Il aurait le moyen de savoir, dans son propre intérêt, en quelques jours ou heures, ce qui lui fallait auparavant des mois pour apprendre, ce qui dans des circonstances données pourrait être de la plus haute importance dans des questions politiques. Le télégraphe profite également au bien-être matériel des peuples, en développant les transactions commerciales; il permettrait à tout moment voulu au négociant Japonais de connaître exactement l'état des marchés pour les denrées Japonaises aux Indes, en Chine et en Europe, et il se verrait guidé dans ses entreprises commerciales par des renseignements sûrs.

Venant assurer de pareils avantages au Gouvernement et au peuple Japonais, sans aucune dépense pour le trésor de l'Etat, la Compagnie espère que ses propositions trouveront un accueil favorable de la part du Gouvernement Impérial.

Je suis chargé par mon Gouvernement de les appuyer auprès de celui de Sa Majesté Impériale l'Empereur, comme étant dans l'intérêt des deux Pays et de nature à resserrer encore davantage les rapports subsistant si heureusement entre le Danemark et le Japon et je prie Vos Excellences de vouloir bien me faire savoir quand je pourrais traiter cette affaire, afin de tomber le plus promptement possible d'accord sur un arrangement définitif à son égard.

J'ajouterai que la Compagnie Danoise a fait des arrangements avec les Compagnies télégraphiques qui aboutiront dans ces mers-ci en vue de rallier l'Europe à la Chine et au Japon.

Je saisis avec empressement cette occasion pour réitérer à Vos Excellences les assurances de la plus haute considération avec laquelle j'ai l'honneur d'être,

Messieurs les Ministres,
de Vos Excellences

le très humble et très
obéissant serviteur,
JULIUS SICK.

A Leurs Excellences
Messieurs les Ministres des Affaires
Etrangères de Sa Majesté Impériale
l'Empereur du Japon à Yedo.

（右和譯文）

以手紙啓上イタシ候然者已ニ閣下ヘ口宣ニテ申上置候通リ今般日本天竺支那幷シベリヤヲリエンタール國々ノ間傳信機通信ヲ取建ガ爲コペンハーグノ都府ニ於テ會社已ニ編制ニ相成候右會社日本開港場ニ於テ右海底ノ線ヲ着岸セシムル事ヲ

朝廷ノ御免許御願申上候

同會社ニオキテ入用ノ元金蒸氣船幷自己ノ器械方モ所持致居候且丁抹政府ニテ右會社ノ素性盛强ナルト正直ナルトヲ熟知シ右大ナル取建ヲ給助センガタメ日本支那ノ海中ニ滯泊致サセベキ同國

皇帝ノ軍艦コルデンスキヨルドト申船貸下シ被置候

右會社日本政府ノ御免許願度件々予ニオキテ左ノ通リ閣下ノ賢慮ニ御進メ申上候

右會社一體ノ目的ハ海底ノ線ヲ以テ始メ香港ト上海夫ヨリ上海ト長崎夫ヨリ長崎トウワデユポストクトト申所ヲ通信又長崎ヨリ大坂ト横濱ヲ通信スル目的ニ御座候

日本政府斯聰明ナル政府ヘ對シ世界ノ爲メ傳信機ノ限ナキ緊用ナルヲ入念細說スルニ固リ不及候ヘ共諸國ノ間御閉鎖チ等ノ節直チニ右ノ謬閉ヲ糺シ其和親ヲ守ルタメノ善方ニ相成候右海底ノ線ヲ以テ別紙繪圖面ニ相見ヘ候通リ日本國ト全世界ノ直通信ヲ可取設且以前傳閉ノタメ數月掛リ候事ハ今般數日或ハ數刻ニテ傳達可致右ハ政事一件ニモ甚緊要ナル義ト存候尙又傳信機ノ助ヲ以日本ノ商人天竺支那歐羅巴國ニテ日本產物ノ價ト市ノ模樣等體ニ相分リ候間其貿易ノ爲メニ被用候

右會社今般日本政府ノ會計ニ於テ何等ノ入費モ相掛ケ不レ申シテ右樣ノ益ヲ日本政府ト人民トニ奏シ候間右ノ願朝庭ヨリ御承諾可被遊ト信用イタシ候右ノ願兩國ノ益アリテ且今迄幸ヲ以テ引續居候親睦ノ交愈硬結ニ可相成候間今般我政府ニ被命

皇帝陛下迄念ヲ入奉紹介候

右一件御決定ノ義ニ付成丈ケ取急ギ閣下御同意被成候樣御面晤願入候尙又申上候右會社歐羅巴支那日本國ニ通信スルタメ都テ當時現在ノ各傳信機組約定ヲ已ニ團結イタシ置候此段可得御意如斯御座候以上

午六月十日

ジユリアンシク

澤　外務卿
寺嶋外務大輔　閣下

（附屬書）

Projet
de Concession demandée
au Gouvernement Impérial du Japon
par la Compagnie Danoise dite "Det store Nordiske China og Japon Extension Telegraf Selskab" (the great Northern China and Japan Extension Telegraph Company :) et octroyant à la dite Compagnie la permission d'atterrir des câbles sousmarins dans les ports du Japon ouverts au commerce Européen, afin de rallier le Japon avec les Indes, la Chine et la Sibérie Orientale.

Ladite Compagnie Danoise a sa résidence et sa direction à Copenhague et entretient une succursale à Londres, 7 Great Winchester Street Building.

---

§ 1.

Le Gouvernement Japonais accorde à la Compagnie Danoise dite "Det store Nordiske China og Japan Extension Telegraf Selskab" le droit d'établir des câbles sousmarins ralliant le Japon avec les Indes, la Chine et la Sibérie Orientale. A cet effet il octroye à la dite Compagnie la permission d'atterrir des câbles sousmarins dans les Ports Japonais ouverts actuellement au commerce Européen, savoir Nagasaki, Osaka, Hiogo, Yokohama et Hakodadi, ainsi que dans ceux qui pourraient l'être dans la suite.

La Compagnie aura la faculté de réunir entre eux les dits ports par des câbles distincts. Elle aura le droit de construire le nombre de stations télégraphi-

ques nécessaires, munies du personnel et du matériel requis pour le service. Partout où un abord difficile du port intérieur ou d'autres circonstances spéciales le rendrait nécessaire, elle pourra établir des lignes télégraphiques terrestres d'un caractère entièrement local et servant à la prolongation seule des câbles du point d'atterrissement jusqu'à la station établie dans la ville. Il sera accordé à la Compagnie la plus grande facilité dans ses transactions pour se procurer à titre d'achat ou de location les terrains d'exploitation nécessaires pour les constructions télégraphiques.

§ 2.

Les machines, appareils et ustensiles appartenant à la Compagnie, ainsi que les objets de différente nature destinés au service télégraphique suivant les certificats délivrés par le Chef de station ou son représentant à l'autorité compétente Japonaise, sont et resteront exempts de payer à leur entrée dans les Etats Japonais de droits de douane ou autres de quelle dénomination que ce soit.

§ 3.

Le Gouvernement Impérial, aimant à reconnaître les bons rapports qui ont de tout temps existé entre le Danemark et le Japon, et prenant en considération les notables intérêts qui se rattachent pour l'Empire Japonais à l'œuvre que la Compagnie se propose de mettre à exécution, accordera Sa Haute protection à toute cette entreprise en général.

Les employés de la Compagnie et les personnes qui desservent les télégraphes seront placés sous sa sauvegarde toute particulière.

Il ordonnera aux Hanjis ou Gouverneurs Impériaux ainsi qu'aux autres hauts fonctionnaires dans les villes maritimes où des stations seront érigées, d'accorder aux Chefs de station et aux Employés en général toute aide et assistance qu'ils se trouveraient dans le cas de réclamer d'eux.

Les dits hauts fonctionnaires seront investis de pleins pouvoirs discrétionnaires afin d'être, le cas échéant, en mesure de faire droit à de telles réclamations et d'intervenir sans perte de temps et avec la plus grande énergie.

Ils se feront un devoir de veiller à ce qu'aucun dégât ne soit fait par malveillance ou inadvertance aux établissements, bâtiments, appareils et stations appartenant à la Compagnie.

Les Agents de la Compagnie s'entendront avec les Autorités Japonaises pour assurer aux stations télégraphiques la protection dont elles auront besoin en toutes circonstances.

§ 4.

L'exploration et le sondage des parages intérieurs du Japon, tels que p. ex. du Suwo-Nada, Bingo-Nada, Harima-Nada et Sumi-Nada, où on se proposerait d'immerger des câbles, et entrepris dans l'unique but de trouver les meilleurs placements et points d'atterrissement, seront en tout temps permis aux navires dont dispose la Compagnie.

Les Commandeurs de ces navires veilleront soigneusement à ce que leurs subordonnés observent sous tous les égards le plus parfait ordre et la plus sévère discipline dans les cas où ils auraient des rapports avec des sujets Japonais.

§ 5.

Les dépenses occasionnées par la pose et l'atterrissement des câbles sousmarins, la construction des stations et cætera sont et resteront uniquement à la charge de la Compagnie.

§ 6.

Le Gouvernement Japonais jouira du privilège de faire expédier les dépêches de l'Etat avant celles de toute autre catégorie. Les dépêches pour l'étranger et nommément pour l'Europe devront être rédigées en langue Anglaise ou Française. Aussitôt que la ville de Nagasaki aura été réunie à un autre des ports du Japon ouverts au commerce Européen par un des câbles sousmarins de la Compagnie, des arrangements vont être pris en vue d'assurer au Gouvernement et au public Japonais la faculté de pouvoir télégraphier en langue Japonaise et avec des caractères Japonais.

Les employés desservant les télégraphes seront tous assermentés et tenus à garder scrupuleusement le secret des dépêches.

§ 7.

Les sujets Japonais qui ont acquis les notions nécessaires et qui possèdent les qualifications re-

quises, seront à leur demande admis à entrer au service télégraphique de la Compagnie, à condition toutefois de se soumettre aux dispositions réglementaires en vigueur pour les employés de la Compagnie. Ils seront traités sur le même pied et jouiront des mêmes bénéfices que ces derniers.

§ 8.

Les employés de la Compagnie et les personnes desservant les télégraphes seront tenus à observer une conduite irréprochable vis-à-vis des sujets Japonais. Ils respecteront les lois, institutions et ordonnances du pays et s'abstiendront de toute ingérence dans les rapports qui n'appartiennent pas strictement à la sphère de leur activité officielle.

（右附屬書和譯文）

シベリヤオリヱンタール支那日本に通信する爲日本開港場え傳信機の海底線を着岸せしむる御免許狀を日本皇帝政府え丁抹の會社デトストレーノルジュスケシナオグジヤハンヱキステンションテレグラフセルスカブ（但支那北國と日本との傳信機弘めの會社）より願立の下稿（但右丁抹會社の元店はコンペンハークの都にて有之且倫敦都に出店所持いたし居候）

第一條

日本政府に於てシベリヤオリヱンタール支那天竺日本の國々を通信する爲海底線取建の御免許を右會社（デト、ストレー、ノルジュスケ、シナ、オグ、ジヤパン、エキステンション、テレカラフセルスカブ）中え御允諾可被下候事

右の爲是迄開港相成居候都ての場所則長崎大坂兵庫横濱箱館幷已來開港可相成他の場所えも海底線を着岸せしむる御免許を御許渡可有之候事

會社にて右港を別々の線にて通信する勝手たるへき事

右業務の爲入用の道具幷人數を以入用丈けの傳信機繼立場を取設る事勝手たるへき事

若何れの港にても滯泊場え近寄る事六ケ敷候歟或は惣して非常の差支ありて無據候節は陸地傳信機の分を取設る事勝手たるへく候尤右は全く線陸揚丈けの所陸地傳信相廻し候のみの義にて其海底線着岸の所より市街役所迄接續せしめんか爲に有之候

右會社にて傳信機建物に付入用の地所を買ひ又は假る事を望む時は右懸合を容易にせんか爲に日本政府にて御周旋可有之事

第二條

傳信機繼立場管轄人或は右手代より日本掛り役人え證書を

以て申立たる右會社附屬の惣器械道具幷傳信機械に相用ひ候都て諸類の品物は日本諸國において入港の稅幷如何樣なる稅にても被免不絕無稅にて輸入いたし度候事

第三條

今般日本

皇帝政府にて丁抹と日本の間今迄連續したる和親に對し加之會社の大經營より日本國家の爲大益を生すへく右等の邊熟考ありて右都て大經營に御周旋可有之又右會社の官員幷傳信機の爲に用らるゝ人には日本政府の保護を更に可受候事

右傳信機繼立場管轄人又は都て傳信機官員助力願出候節は府藩縣幷海岸の長官助力せらるゝ樣日本

皇帝政府より御下命有之度事

尙又非常の場合に臨み何等の訴訟をも被聞取一般の力を盡し速に事の落着する樣取計を爲す樣兼て右の長官は全權を掌握可致候事

會社の繼立場器械道具建物に手過ちの破損又は惡意にて害を請さる樣實體に注意有之候事

總て臨時に要用の保護を請る事に付會社役人より日本官員と談合可致事

第四條

傳信機線の着岸せしむると右の線を海底え沈るとに適當したる場所を鑒定せんか爲め會社にて用ひ候船內海を（譬ば周防灘備後灘播磨灘スミ灘等々）測量する事其勝手たるへく候尤船將に於て其乘組の者日本人に交り候節不法不取締の所業無之樣屹度相慎ませ可申事

第五條

海底線沈め方と陸揚幷に繼立場等の普請件々の爲め惣雜費右會社限りにて可致事

第六條

日本政府よりの傳信は都て他の傳信より前（サキ）に傳へ可申右は政府の格段の理に有之候外國別けて歐羅巴州との通信は佛語或は英語にて可認候長崎縣より他の開港場え右會社の一線を以通信に相成候樣立至候はゝ日本語幷に日本文字を以傳信いたし候樣日本政府幷人民の爲手段可致且傳信機に仕役する役人は盡く誓詞を爲し傳信の趣決して他へ漏さす秘密に致さすんはあるへからす

第七條

日本人民右傳信諸術に熟し右に適用する人物ありて會社傳信機組に勤仕の儀を願出候時は其會社に入る事を得且會社の官員と均しき取扱を請一般の利益に至る迄都て外々のものと同樣たるべし

第八條

會社の役人并電信機用を取扱候者は日本人民に對し少も不良の行不可致候日本都ての法則に遵ひ自己の勤めに不抱る餘事に關係不可致候事

一六四　六月十二日（七月十日）　外務西亞領事代理（函館在勤）ヨリ

丁抹ノ電信會社ニ封スル海底電線ノ陸揚免許ニ關シ重本テ申出ノ件

No. 32.　　Хакодате 28 Іюня 1870 года.

Его Превосходительству

Господину Сава Уемонгонноске,

Нижеподписавшійся, имѣвъ честь обратиться къ Вашему Превосходительству съ письмомъ отъ 23 Апрѣля сего года, которымъ просилъ Вашего

содѣйствія объ исходатайствованіи разрѣшенія Вашего Правительства въ пользу образовавшагося въ Россіи Акціонернаго Общества, предложившаго свои услуги моему Правительству къ устройству подводнаго телеграфа отъ Азіятскаго материка Россіи къ прибрежью Японіи и изъ Японіи въ Китай, оставленной въ неизвѣстности несвоевременнымъ отвѣтомъ по изложенному имъ предмету, считаетъ нелишнимъ, препровождая при семъ копію съ письма отъ 23 Апрѣля сего года рекомендовать упомянутое общество, состоящее изъ гражданъ Датскаго Правительства и пользующееся заслуженною извѣстностью по своимъ торговымъ операціямъ; оно намѣрено по изложенному предмету вступить въ переговоры съ Вашимъ Правительвтвомъ для заключенія условій къ обоюдному согласію.

Вполнѣ расчитывая, что Ваше Правительство сдѣлаетъ зависящее къ содѣйствію упомянутому обществу, чтобы удостоиться разрѣшенія Правительства, нижеподписавшійся проситъ принять увѣреніе въ совершенномъ его почтеніи и преданности.

С. Трахтенбергъ

（右和譯文）

第三十二號

以書翰致啓上候然は我國此度出來の傳信機製造方の組合にてロシヤのアジヤの地より日本の地夫より支那迄海中往復の傳信機を製造致し度旨我政府え申立候故貴政府御許諾に相成候樣御周旋被下度段我當年四月廿三日附の書簡を以相願置候處未た其貴答無之就ては右廿三日附の書翰の寫を今又是に添差進申候右製造方の組合はデネマルカ國の商人にて諸商向手廣く致し候故頗る高名のものに有之右の組合製造に係る約定を取結候ためには貴政府と猶御掛合に及ひ候積りに御坐候間於閣下右の事件成就致し候樣何卒御周旋重疊乞申候謹言

千八百七拾年六月廿八日

魯國コンスル

タラヘテンベルグ

外國事務卿

澤　右衛門補佐閣下

一六五　六月十四日（七月十二日）　外務大輔寺島宗則ト和蘭辨理公使トノ會話書

丁抹電信會社、丁抹皇主ノ敬稱ニ關スル件

六月十四日於外務省寺島外務大輔荷蘭公使ファントルフーフェン對話大意

先日差上候テリカラフ廉書御一覽の上御勘考被下候哉

右書面夫々一覽飜譯いたし政府え差出候積にて候

右は尤容易の事にて混し候譯柄にも無之長崎箱館横濱等え傳信線を揚候迄の事に御座候

右取扱の儀は拙者壹人にも無之候間向々談判いたし可申候

丁抹公使參　朝前電信の義に付御相談として來る十八日第十字御面晤いたし度存候

委細承知いたし候ジヤハの方電信の儀は丁抹より頼み有之出來候義等有之候哉

ジヤハの方にては英のコンペニーにて印度よりホンコン迄取立候積ホンコンより日本魯西亞アモール迄は丁抹社中にて約定いたし候由に候

左候得は米國にても取立可申と存候何歟御聞込に候哉

米國の義は聢といたし不申候得共少々噂は承り込申候丁抹にて電信機取建方年來志し罷在候義に付成功相成候へは從來の本意にて候

魯西亞より申立候義も有之是は丁抹のコンペニー一緒に相成候事に候哉

是以約束有之事に御坐候

魯西亞都下よりシベリヤ迄續せ候線出來いたし候事に候哉

當年中には落成の由に御座候魯西亞領分丈の電信機三十年の間は丁抹社中にて遣ひ不苦積の由に御坐候尤丁抹申立の通に御差許相成候はゝ歐羅巴州に通し候線貳筋に相成申候英國よりは電信機の義に付何共不申上候哉

風聞は有之候得共いまた聢と承り込不申候

丁抹國王の尊稱一條如何相成候哉

其儀に付ては昨日横濱え官員差遣各國公使一同え拙者共面晤の上委細相談いたし度旨申入候間不日相分可申候

其一件に付ては各國公使え御面晤御相談相成候方可然候

右は不日面晤の上取極可申と存候

電信の儀に付始終引受談判いたし候もの御人撰御託し被成候哉

取極り不申候間いまた其沙汰に不及候

左候得は閣下え直に御引合申候方猶更都合宜有之候

取極候迄は卿大輔にて承り可申候

一六六　六月十九日（七月十七日）　横濱裁判所ニ於テ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ト丁抹使節等トノ對話書

海底電線敷設ニ關スル件

附記　六月十四日丁抹ノ電信會社代理人「シウアンソン」ヨリ丁抹使節宛

丁抹ノ電信會社ノ計劃ニ關スル件

庚午六月十九日於横濱裁判所澤外務卿寺島外務大輔丁抹公使ジュリアンシク海軍士官イ、シューソンえ應接大意

一我四月廿三日（西暦五月廿三日）魯國岡士タラベテンベルグより亞細亞支那海中往復の傳信機取立候に付日本にても製造相成候節は續合せ度旨書翰（註一五九ヲ指スカ）差出し候右傳信機貴國にて御製造の道筋も同し樣に被存候處果して同しものには無之哉

一右傳信機の義は魯國政府え申立相談の上免許を請候義に付必同しものと存候

一右魯國よりの書翰に所謂の傳信機は何れの地より何れの邊え渉り日本地何れの邊にて接續の積りに候哉の旨魯國岡士え問合候樣箱館え申遣置候處同し者に候へは當今外務省にて貴國と右義相談中に付此方談判取極り候上に無之ては挨拶致し兼候趣魯國え可申遣存候

此時丁抹の傳信圖取出し

一圖中青筋は魯國にて既に出來候ものに有之赤筋は丁抹にて出來の處も有之又今より成し候場所も有之候右器械は既に出來いたし居候間御免許次第直に取掛り候事に有之候今年中にはシンガポールよりポッセットベイ迄出來の積に候（ポッセットベイは魯國と傳信の界也）

一體是迄南海の方は英米兩國にて傳信機出來有之候此圖北海の方傳信機は魯丁兩國にて拵へ候積に候

魯國はウキラジヲストクと申場所便利宜地に付見立傳信機陸揚いたし候

若し日本政府にて右着岸の儀免狀被下候はゝ日本地丈先え製造候ても宜く候

原より圖上赤線の如くシンガホールより魯國の方え通し候積に候處日本にて免許御坐候上は改て日本を過き魯國え通し候樣にいたし候ても宜しく又原圖の如く魯國の方え製造日本の方は枝を生し二線に致し候ても宜候

一然らは我國えは長崎にて着岸を御求に候哉

一否各御開港場の場所々々え着岸に無之ては日本政府の御爲にも不相成候其譯は日本各御開港の地より五大洲全世界と通信相成候樣に無之ては日本の大御益には無之候

一我國内地丈は既に自國にて製造いたし候事に極り布告も出民部省にて取掛り候事に有之候尤各開港場而已に無之其他處々え拵候積に候

一若し日本にて御製造相成候はゝ私方會社には澤山器械人數等も有之候間廉價にて作り差上可申候

一壹里の價何程に候哉

一夫は用候道具次第にて好き器械用候得は自然永く保ち惡き品用ひ候へは速に修復いたし候樣成行候右品善惡に因り夫々價高下も有之候

西洋と日本の傳信機とは違ひ候哉

一同し事に候
一夫々取調候はでは價の義難申上候へ共他の國よりは器械も宜成丈廉價に可仕候
　此時書付出す
一未た日本政府よりの御布告は不存御國御益に相成候義別紙に認め持參致し候
一内地傳線は處々え作り候事には候得共此書付に有之場所は最先に拵へ候積りに候
一前如申人數道具等澤山有之候へは私方にて拵差上度候
　一ヶ月立候へは代價等も委細に相分り候間民部省にて御製作の義暫御待被成品宜しく廉價の方御用ひの義可然と存候
一其儀は隨分待候ても宜候米國よりも日本え傳線を掛る事を願出候とれも貴國の願と粗相似り
　一米國にては未た海中には出來居不申候
一夫は不存候へ共始終は出來候事に可有之左候へ共米國と貴國と同し場所え傳線を掛候樣可成行哉に存候且つ此後他の國より同樣の願ひ出候も難計左樣の節は日本政府彼え許し此え不許候ては不都合に候間何れえも同樣に許し

候樣可相成左候時は貴國にて定て御不都合と存候
一夫は私方少しも差支無之候其譯柄は私共會社傳線は新發明にて他國より器械精工に有之候間自然永く行はれ可申存候に付少しも他國より願候を恐れ不申候併丁抹
　一國え御許に御坐候へは更に大幸に御坐候
一傳信器械無税陸上けと申義一體傳信機も商法の義に付是迄條約面の無税品共違有税にても可然義に被存候へ共夫も無税にいたし可申且中途にて截斷するもの有之哉も難計候間是又防可申候得共我政府より他處にある我國民え申遣し候義又は我國民より我政府え申越候義は何れも無賃なるべく候尤夫は政府え掛り候事丈に候
　一其外にも御益に成候義有之候器械運轉等も御國人覺可申候
一夫は既に我國人學居候
　我政府にて内地丈の傳線出來候事取極り候上は貴國會社の傳線渡し方等模樣も替るべくと存候
　一日本政府にて傳線御出來相成候義私方於ても恐悦の義に存候夫に付私方傳線の模樣替り候義は少しも無之候
一左樣相成候へは傳線着岸の義各港には及間敷存候
一矢張夫は各港に願度候若し萬一貴國に事故相生し傳線截斷いたし候節は世界一般の傳線夫が爲め不通に相成可申其時接續の義私方にて取計可申と存候
一此圖中傳線下の關邊え渉り居候處右の邊は至て海淺く候間若し截斷する者有之猶接續致候とも猶又引揚截斷可致甚懸念に存候間外海の方え御拵にては如何候哉
一下の關は淺場に付掛念に思召候はゝ外海の方え渉し候ても宜候
一此ヶ條書猶篤と考思の上政府え申立候後に無之ては御挨拶及び難く尤考思いたし了解難致義も候はゝ猶御面晤申度候
一先刻申上候御内地傳線製造一月御待被成候義は御承知に候哉
一夫も尚御面晤の節御挨拶可及候
一何日に御目に掛可申哉
一我來る廿五日西暦廿三日十一字に外務省え御出有之度候

註一、本文書中ニ「來る廿五日」云々トアルハ外務省側ノ都合ニヨリ二十九日ニ延期サレタリ
二、本文書中ノ「電信圖」ハ記錄中ニ見當ラス但シ「書付」トアルハ左記文書ヲ指ス

（附記）

Yokohama, le 12 Juillet 1870.

Votre Excellence,

Selon le désir manifesté par Votre Excellence j'ai l'honneur de soumettre à Votre considération les points principaux de l'entreprise que la Compagnie Télégraphique que je représente désire mettre en exécution au Japon, conjointement au projet, déjà présenté par V. E. au Gouvernement Japonais.

Si Le Gouvernement Japonais veut bien y donner son autorisation, la Compagnie se propose de relier entre elles par des lignes télégraphiques terrestres les villes principales du Japon, qui au moyens des câble sousmarins de la Compagnie seraient ainsi mis en rapport direct avec la Chine, les Indes et l'Europe.

N'ayant encore qu'une connaissance imparfaite du pays et des localités la Compagnie ne pourra pas encore tracer exactement la direction qu'elle jugera la plus favorable à la ligne, mais à moins qu'il y

ait des obstacles sérieux dans le terrain, elle se propose de suivre la route du "Tokaido" en commençant à Hakodadee dans le Nord, en passant par Yédo, Kanagawa, Kioto, Osakka, Hiogo, Simonosaki, Kokura et en finissant à Nagasaki, où elle mettrait la ligne terrestre en communication avec son câble. Les détroits de Tsugar et de Simonosaki seraient traversés par des câbles sousmarins. Du reste pour toute ce que regarde cette question la Compagnie ne demande qu'à aller au devant des désirs du Gouvernement Japonais.

L'exécution de ce projet permettrait au Gouvernement de communiquer en quelques heures avec tout point important de l'Empire, ainsi qu'avec la Chine, l'Europe et tout autre point de la terre jouissant de l'avantage des communications télégraphiques.

Se conformant aux désirs du Gouvernement la Compagnie sera prête à entreprendre la construction et l'exploitation des lignes surmentionnées pour son propre compte, en donnant tout avantage raisonnable au Gouvernement, ou d'en entreprendre la construction et l'organisation du service, la remettant ensuite entre les mains du Gouvernement sur les conditions les plus avantageuses.

La Compagnie introduirait dans ses lignes et dans ses appareils toutes les dernières inventions et modifications de la science. Elle transmettrait des dépêches écrites en Japonais et en Chinois.

La Compagnie étant en train dans ce moment-ci d'exécuter une entreprise pareille en Chine, elle aura l'avantage d'avoir un personnel et un matériel considérable sur les lieux mêmes, ce qui lui permettrait de construire des lignes télégraphiques au Japon avec moins de dépense que toute autre Compagnie.

Pour prouver l'excellence de son matériel la Compagnie se charge dans trois mois d'ici de relier entre elles par une ligne télégraphique les villes d'Osakka et de Hiogo, ou deux autres points, séparés par une distance pareille.

Voici, Votre Excellence en peu de mots le projet que la Compagnie Vous demande de vouloir bien présenter au Gouvernement Japonais en faisant valoir toute considération en faveur de la Compagnie, qui pourrait la recommander aux yeux du Gouvernement.

Veuillez agréer, Votre Excellence, l'assurance du profond respect avec lequel j'ai l'honneur d'être

de Votre Excellence

le très humble et très obéissant

Serviteur,

SUENSON,

Lieutenant de 1er de la Marine Royale de Danemark Agent en Chef de la Grande Compagnie Télégraphique du Nord pour la Chine et le Japon.

Son Excellence J. Fr. Sick,

Envoyé en Mission Extraordinaire

de Sa Majesté le Roi de Danemark

au Japon.

一六七　六月二十五日（七月十三日）　西外務省ヨリ箱館出張開拓使宛

海底電線ノ陸揚免許ニ關シテハ丁抹使節ト談判中ニ付未タ回答シ得サル旨露西亞領事代理ニ通達方依頼ノ件

（續）

「六月廿五日達ス」

當四月廿四日附を以魯國岡士より書翰寫相添傳信機經過の場所竝御國傳信機と繼合せの場所等岡士え御問合の上御申越の義申進置候處今般丁抹國專任公使ジュリース、デ、シッキ傳信機の義に付渡來御國各開港場え懸渉し度旨申出候尤右傳信機は魯國政府えも願立免許受候義にて魯國傳信機と同一物に有之由同人申聞候右傳信機の義昨今同人え專ら引合中に有之且同一物にも候へは此方の事取極り不申候て は魯國の方も挨拶難致候間此段同國岡士え御通し置有之度右及御懸合候也

庚午六月　日

外務省

箱館出張開拓使御中

一六八　六月二十九日（七月十七日）　拔外務大輔寺島宗則ト丁抹使節等トノ對話

電信規約ノ件

七月四日大隈大藏大輔ニ廻ス

庚午六月廿九日於外務省寺嶋外務大輔丁抹公使ジュリアンシック同國海軍士官イ、シューンソン應接の大意

傳信機の事

扨私方傳信機の義は世界一般の通信にて萬國の便利に相成候事にて右義會議の上規則條約決定いたし候義に御坐候右寫書有之候間入貴覽可申哉

我政府にてはケ様の義今般貴國及魯米兩國の願書を初て取扱候義故不案内に候間何歟類例等も有之候へは夫を押て思慮も可決候へ共何分空手にて考候とも不捗取候間右寫は一覽いたし度候

右條約は免狀とは違申候則國々一般の規則に有之候魯細亞へは我會社の外傳信機の義免狀願出候もの有之候へ共皆我會社とは願面替り居候

何ケ國計候哉何れも免許いたし候哉

英佛を初五國程に候併し免許は我會社而已に候

英佛等西洋國々にては願候へは誰也とも免許相成候へ共貴國政府の義はケ様の事初てに可有之と存候間免許の義手間取れ可申哉も難計存し先つ最初に罷出候事に候尤六ケ敷義相願候へは是又手間取れ可申存し機械着岸の義而已願候事に候

支那より日本へ繼參り候義に付支那は我國より先に免許を被乞候事と存候

是は先頃同國勅使我丁抹へ參り其節薄々咄しもいたし候義に付先つ貴國へ罷越候

西洋國々抔古來はケ様の義免許は賣物同樣にて價を出し受候事に有之候處當今は代價を出し候義は無之候

前にも如申ケ様の義不案内故西洋の模樣を知り然る後免許いたし度存候

此時シューンソン書付を出す

是は外會社と違ひ候願を我丁抹會社計へ許を與ふる書付に候其譯は傳信機丁抹の持品となれは國中爭戰等の事起り候とも萬國の通信には妨無之候

我國にては夫等の事を知るに由なければ傳信機規則等の義認候書類は何れの國に歟有之候哉御尋申候

左樣の書は何れにも無之候へ共此書付は御望に候はゝ獻候ても宜候此書付中六ツケ敷事も御坐候へ共日本へ願候はこれと違手易事に候

兩三冊所望いたし度候何歟類例無之候へは何分考も附き不申ものにて最初米國より通信貿易の義申來候節も評議種々にて容易に一決いたし兼候

左樣に候兎角類例なけれは諸事難處置ものに候

貴國傳信機の事極り候へは米國の方は速に處置出來候

魯國の方は地所も與へ是迄出來居候傳信機も總て償金にて我會社へ三十年渡し候事にて願方至て六ケ敷候へ共日本の方は着岸而已に有之地所入用の節は價を以借用いたし候事にも可致候魯國の方は軍艦も一艘用立與候程の義にて願の義多端に有之候

尤貴國にて傳信機御出來の後三年も過候はゝ我會社にて右を遣ふ事相願可申も難計候へ共今日の處にては先相願不申候

日本と同樣の適例有之候へは尤都合宜候

夫は無之候如何となれは日本への願は餘り容易の事なれば也日本は未た不開場所も有之候由に付斷線の防禦等も書入候得共何れも容易の事と存候

英國政府よりの傳信機の義に付香港政府へ送りし書翰幷返簡も有之候へは可入貴覽哉

一〇　丁抹トノ海底電線ニ關スル約定ニ關スル件　一六八

一覽いたし度候

是は香港に出來居候傳線柱を借り復一線を挂る免許の事も有之候尤英文に候

免狀條約等を取極るは速に決し候事に候へ共何分一體の事不存候間夫を知るに苦み申候

御尤に御坐候

一里の價何程と申義成丈早承知いたし度候

夫は別の事に御坐候

いへ〳〵別の事にはあらず我國にて上海迄傳線を通し候評議も有之候間承知いたし度候尤是は決し候事には無之只拙者丈承知いたし度事に候

過日の御咄は陸線の事にて是は貴政府於て御決しに付私方にては止め申候只今の御咄は海底線の事にて今迄更に御咄し無之候

此節海底線も評議有之候故可成は雙方とも承知致し度候

英國一里にて何程の價と歟何れの國の里數にても宜敷候得共英國の貳里（シューンソン潤筆）は凡日本の一里に當り候間易く分り候

是より十日の間私香港上海の間え參り海底へ傳線鋪申候尤船は三艘にて右鋪終り長崎に着岸する間に日本の免許

を受度存し夫故急き申候

夫は遠なる事に候併日本は前にも度々如申不馴故他國の如く遠には參り不申候

斷線防禦等の事も願候へ共只海底線而已着願ひにいたし候はゝ遠に御極り可相成候間左樣いたし候てもよろしく候

魯國岡士よりの書翰持參いたし候間御掌握可被下候

過刻御咄し申候書類入御覽候義日本と違候處はしるしを付可入貴覽候

此魯國との書付は獻し候へは政府にてゲ樣の義願候事と御思召候ては猶更手間取れ候事に可成行候間閣下丈御覽有之度候

左樣の義は決て無之色々違候義も皆參考の種と相成分り方更に宜事に候

左樣に候へは更に何冊差上可申哉

今一冊所望に候

御望みと通りの書は可入御覽候

夫を一覽の上猶此方より可申入候

私はいつにても差支無之候へ共シューンソン義は是非十

日の間香港へ不參候ては不相成又私は使節同人は傳信機を取扱ふものに付同人不在にては遠に御挨拶出來難被存候

註　右對話書中ニ謂フ諸書類ニ關シテハ詳ナラサルモ一六九參照

一六九（七月二十九日）

外丁抹使節ヨリ大輪寺島宗則宛

海底電線敷設ニ關スル參考書類送付ノ件

附屬書　一、四月十八日丁抹ノ電信會社代理人「シウアンソン」ヨリ英吉利「コロニアル、セクレタリー」（在香港）宛書翰寫

海底電線陸揚免許ノ件

二、四月二十六日英吉利「コロニアル、セクレタリー」（在香港）ヨリ丁抹ノ電信會社代理人「シウアンソン」宛書翰寫

右件

Confidentielle

Yokohama, le 29 Juillet 1870.

Monsieur le Ministre,

En me référant à notre entretien de l'autre jour j'ai l'honneur de transmettre à Votre Excellence, outre quelques documents d'un intérêt général, deux pièces qui me paraîssent suffisamment indiquer la manière dont les demandes d'atterrir des câbles sont accueillies par les Gouvernements Européens.

Ces pièces sont a/une demande d'atterrissement adressée récemment par M. l'Agent en Chef de la Compagnie Danoise au Gouverneur de Hong-Kong; et b/la réponse du Gouverneur Anglais.—Suivant les lettres que j'ai reçues, l'approbation formelle du Gouvernement Anglais doit être regardée comme un fait accompli, et dans le courant du mois prochain la Compagnie va procéder à l'immersion du câble entre Hong-Kong et Shanghai. L'Agent en Chef de la Compagnie se rendra à Hong-Kong pour y attendre l'arrivée de trois grands steamers portant le câble, qui représente une valeur de 300,000 £ Sterling.

Je ferai observer à Votre Excellence que la Compagnie Danoise a demandé et obtenu d'avantage à Hong-Kong qu'elle n'est venue demander au Gouvernement Japonais. (voir les endroits marqués à l'encre rouge.)

Ici elle demande simplement à être autorisée à atterrir des câbles dans tous les ports qui sont ou seront ouverts au commerce Européen et à établir dans ces ports les stations nécessaires où le Gouvernement Japonais et le public qui voudrait se servir des câbles sousmarins pouvait remettre leurs dépêches. (Le Traité existant entre le Japon et le Danemark lui assure la protection de ses employés et de son matériel.)

En retour la Compagnie offre de très grands avantages au Gouvernement Japonais, sans lui occasionner la plus légère dépense. Le Japon sera mis en relation avec le monde entier et jouira des bénéfices que cela Lui assure même sous le rapport financier. Car supposons que des câbles rallient d'un côté le Japon avec l'Amérique (Compagnie Américaine) et de l'autre le Japon avec l'Asie et l'Europe (Compagnie Danoise), supposons encore que le Gouvernement Japonais, comme il en a l'intention, établit dans le pays même un réseau de lignes

terrestres. Il aura la faculté de percevoir au profit du trésor de l'Etat, un droit notable de transit de toute la correspondance télégraphique étrangère qui se croiserait sur les lignes de l'Etat.

Le coût des lignes terrestres est très-minime en comparaison de celui des lignes sousmarines qui peuvent être évaluées à coûter jusqu'à 300 £ Sterling par mille Anglaise avec toutes les dépenses.

Les Gouvernements de l'Europe ne donnent plus de concessions exclusives, mais ils ne réfusent jamais d'accorder des concessions d'atterrir des câbles, par la simple raison que de telles entreprises restent aux risques et périls de la compagnie seule tandis qu'elles ne peuvent que porter avantages aux Pays et Gouvernements respectifs.

Aux Personnes qui verraient peut-être dans les câbles et leur atterrissement une source de complications avec l'Etranger, je répondrai que les câbles sont justement le contraire. Les télégraphes sont des instruments de la paix, ils apportent seulement des paroles et des pensées. Pour la guerre il faut des faits. Mais le télégraphe a un grand, pouvoir

et c'est de prévenir souvent la guerre!

Je saisis cette occasion pour renouveler à Votre Excellence les assurances de la plus haute considération avec laquelle j'ai l'honneur d'être

de Votre Excellence

le très humble et très

obéissant serviteur,

JULIUS SICK.

A Son Excellence

Monsieur Terasima,

Ministre des Affaires Etrangères

de Sa Majesté Impériale l'Empereur

du Japon.

(右和譯文)

先日御相談上ニテ御約束申上置候通リ今般別紙ニテ一般目的ノ諸書附ノ外ニ兩書翰ヲ閣下ニ差進申候右書翰ハ西洋政府ニテ傳信機海底線ヲ着岸セシムル願ニ付取捌キ方ヲ閣下ニ十分顯示イタスベク存候右書翰卽チ丁抹會社ヨリ香港管轄人ニ先日差出置候海底線着岸セシムル願文幷ニ右管轄人ヨリ回答有之候

予ガ落手セル數書翰ニ從ヘバ英ノ政府ニ於テ公然ノ免許最早被下候ト相見ヘ候且來月中右會社ヨリ香港ト上海ノ間海底線ヲ取沈ニ相掛リ候ベク候故同社ノ支配人香港ニ參リ右線ヲ運送ノ大蒸氣船三艘着スルヲ可相待候

右海底線英ノ金高三十萬リブルステルリン相掛リ候

右兩書翰御讀過被成候節同社ニテ香港管轄人ニ願許サレ候事ハ唯今日本ニ願出候ヨリハ甚多分ノ事ニ有之候ト宜シク着眼可被下候但右書翰中朱引ニテ不相顯分ヲ御座候ハ當今同社ヨリ日本政府ニ願出候ハ唯開港ニ相成候ト幷ニ以來開港ニ相成ベキ場所々々ニ海底線ヲ着岸セシムルト又日本政府ト人民ト其傳信機書ヲ屆出候樣立局ヲ取建ルノミニ御坐候但會社ノ所持ノ器械ヲ御保護被下候義ハ決シテ有之ベキ義ニ非ズ已ニ丁抹國ノ間ニ被取結候條約ノ義ハ右免狀ノ代リ會社ヨリ日本政府ヘ入費ヲ爲負不申シテ大益ヲ獻納致候全ク右ニテ日本國全世界ト通信ニ相成又金益モ請取ラルベク候如何ントナレバ若シ日本國ニテ亞墨利加會社ノ海底線ヲ以テ亞墨利加ト通信ニ相成又日本國ニテ丁抹會社ノ海底線ヲ以テ亞細亞歐羅巴ト通信ニ相成又貴政府ニ於テ御見込通リ貴國中陸傳信機ヲ取設ラレ候ハヾ各國往復ノ文通ハ日本國ヲ縱橫通過セルニ付右通過スル稅トシテ日本金庫ニ莫大ナル稅相納リ可申候

海底線傳信機價ノ義ハ總テノ入費ヲ加ヘ英ノ一マイルニ付同三百リブルステルリン相掛リ候陸傳信機ノ價ハ右ヨリ極メテ廉ニ御坐候

歐羅巴政府ニ於テ株免狀但コンクセスクーシルジョンニト唱フルハ當今ニ至リ最早許容無之乍併海底線着岸セシムルノ免狀ヲ願ム事ハ決シテ不致候如何ントナレバ右樣ノ經營ニ損失有之節ハ其會社ノ損失ニ相成却テ免狀ヲ許ル、政府ト國トハ唯益ノミヲ請取計リニ御座候

萬一其海底線ヲ着岸セシムル免狀ニ付外國ト障碍ヲ生ズベシト或人ナル者申候ヘバ予ハ反體ノ說ト回答可致テリガラフト唱フルハ和睦ノ道具ニテ言語ト思慮ヲ運ブ仕用ニ御座候却テ傳信機ハ大ナル勢ヲ持候其勢ト唱ルハ度々戰爭ヲ避ケ候事ニ御座候此段可得御意如斯御座候以上

午七月二日

ジュリアス シック

寺島外務大輔閣下

註 本文書ニ謂フ「一般目的ノ諸書附」ハ「Concession pour la pose de câbles électriques entre le littoral russe, le Japon et la Chine.」「Telegraph-Convention, afsluttet den 21de Juli 1868.」並ニ「Con-

vention de Paris du 17 Mai 1865.」ナルモ右ハ名略ス

（訳編第一）

Copy.

Hongkong, 18th May, 1870.

The Honble J. Gardiner Austin,
Colonial Secretary, etc., etc.
Hongkong.

Sir,

With reference to a letter addressed to You by Mr. George Helland under date of 5th Instant, soliciting permission from Her Majesty's government to land a Telegrafic Cable on the Island of Hongkong and to establish (sic) a Telegraphic Station at Victoria, I beg now to advice You of my arrival here as Agent of the "Great (sic) Northern Telegraf, (sic) China and Japan Extension Company", and that I am provided with the necessary power to conclude all arrangements in behalf of the said Company.

Acting under instructions from the Direction of my Company, I shall feel obliged by Your submitting to H. Excell. the Lt. Governor, if a provisional permission can be granted to land a cable on the Island of Hongkong, subject to the approval of the Colonial Office.

(系) In the event of such permission being granted by the Colonial Office, if H. M.'s Government will allow my Company to make use of the Telegraph Posts allready erected, to convey our wires from the landing place to the station at Victoria, subject to such conditions as H. M.'s Government may hereafter think fair to demand.

Finally I also respectfully ask permission from H. M.'s Government to take soundings at different places on the Island, with the view to select the most convenient place for landing the Cable.

I have the honor to be, Sir,
Your most obedient Servant,
E. SUENSON,
Officer in the Royal Danish Navy.

（訳編第二）

Copy.

Colonial Secretary's Office, 26th May, 1870.

E. Suenson Esqr.,

Agent of the Great Northern Telegraph
China and Japan Extension Company.

Sir,

I have the honor to acknowledge your letter of the 18th Instant applying for permission:

1st To land a Telegraphic Cable on the Island.

2nd To make use of the Telegraph Posts already erected by this government between the coasts and Victoria.

3rd To take soundings at different places around the Island with a view to the selection of the most convenient place for landing the Cable.

In reply I have to acquaint you by desire of His Excell. the Lt. Governor that, subject to the approval of H. M.'s Government, your several requests will be complied with.

I have the honor to be, Sir,
Your most obedient servant,
J. GARDINER AUSTIN,
Colonial Secretary.

（右附屬書一和譯文）

香港千八百七十年第五月十八日

當月五日附書翰を以てジョルヂヘルラント氏より香港島へ海底傳信線陸揚ウキクトリア市街へ傳信機立場造營の儀を英國政府へ願立置候儀に付今般拙者右社中の代人として當所へ着右社中の事に付諸取極等致候權有之候間此段御報知におよび候我社中の差圖に隨ひ右海底傳信線陸揚の儀假りの免狀を御渡し被下候樣鎖臺閣下へ御申立被下候はゝ添存候（系）追て英國事務官の閲覧を請可申屬國事務官の免許相渡り候上は是迄取建有之候陸地傳信線を我社中の線と聯合致右線を我社中にて相用ひ候樣御許容被下度且又海底線陸揚に相當の場所相撰み候ため島内各所測量致候儀を英國政府に御免許被下度此段相願候以上

丁抹國海軍士官
スヱンソン

香港において
秘書官
ジガルデイネルスヲーストロ貴下

（右附屬書二和譯文）

香港秘書官役所
千八百七十年五月二十六日

當月十八日附の御書狀落手第一條此島内え海底傳信線陸揚の儀第二條海岸幷にウキクトリア市中との間當政府にて取建候陸地傳信線其社中にて御用ひ被成度儀第三條海底傳信線陸揚相當の場所御撰み被成度候に付此島内各所測量の儀件々御申越の趣承知致候英國政府におゐて閉屆可相成上は御申越の廉々御需に應し可申候此段鎭臺閣下の命に依り回答如斯に候以上

秘書官

カルデイネルオースチイン

傳信會社代人

スウエンソン貴下

一七〇　七月九日（八月五日）　外務大丞等ヨリ露西亞領事代理（兩節在勤）宛

海底電線ノ陸揚免許ニ關シテハ丁抹使節ト約定締結ノ談判中ナル旨回答ノ件

七月九日達す

貴國千八百七十年六月廿八日附御書翰落手然は貴國亞細亞部分より我國を經夫より支那まて海中往復の電信條張渡の義丁抹國電機製造會社へ御委任被成云々御申越の趣承知いたし候右の儀につきては此頃丁抹使節ジュリアンシク氏と談判中に付何れにも近々致決定右使節え及結約可申候此段御回答如斯御座候以上

庚午七月三日草

大少丞

御連名

魯國コンシュル

タラヘテンベルク貴下

註　本文書ニ謂フ「御書翰」ハ一六四ヲ指ス

一七一　七月九日（八月五日）　英吉利公使館ニ於テ外務大輔寺島宗則ト英吉利公使トノ對話抜書

海底電線敷設ニ關スル件

七月九日於英公使館寺島外務大輔同公使應接大意

一禮畢て

丁抹にて造營の傳信機を我國にて買取候事は出來間鋪哉丁抹にて不承知に可有之候丁抹におゐて何そさし支候儀も有之候哉

差支候節の爲に預め御相談いたし候

夫はウエンナ會約の事公使の書中に可有之儀と存候

右傳信機着岸の儀港内碇泊船等の邪魔不相成樣いたし候義は如何

夫も右同公使の書中可有之候と存候右等の義各國と同樣なれは御免許相成候て可然と存候

左樣に候過日の書付は御覽被下候哉

香港鎭台へ丁抹傳信會社よりの願書一覽いたし候陸揚又は測量等も免し有之候都て我にて免し候義は彼にても同樣に免さねばならぬ事に候併日本にては右樣の事は無之義と存候

三个條目には双方相談にて陸揚とあり然らは彼一存にて上るとは大に庭徑有之候何れにも丁文にては困却に付英か佛かに取直しを御望の方と存候

一七二　七月十日（八月六日）　丁抹使節ヨリ外務大輔寺島宗則宛

海底電線ノ陸揚免許ニ關シ亞米利加辨理公使ト共ニ面會ノ期日打合ノ件

Yokohama, le 6 Août 1870.

Monsieur le Ministre,

Le Ministre des Etats-Unis d'Amérique, M. De Long, qui doit avoir Mardi prochain une conférence avec Votre Excellence au sujet de la demande d'atterrissement de câbles faite par lui dans l'intérêt d'une Compagnie Américaine, m'a proposé de nous réunir à cette occasion vu que nous plaidions la même cause auprès du Gouvernement Japonais.

Croyant, Monsieur le Ministre, pouvoir compter d'avance sur Votre agrément et de celui de Son Excellence Monsieur le Ministre des Affaire Etrangères Sawa pour une combinaison qui paraît offrir des résultats pratiques et satisfaisants, j'ai accepté la proposition de mon très honoré Collègue et j'ai l'honneur de prévenir Votre Excellence que je me présenterai avec Sa permission Mardi à 11 h. de l'avant-midi au Ministère des Affaires Etrangères pour prendre part à la dite conférence, heureux si

j'étais en mesure de fournir quelques données utiles.
Je suis avec la plus haute considération,
Monsieur le Ministre,
de Votre Excellence
le très humble et très obéissant
Serviteur,
JULIUS SICK.
A Son Excellence
Monsieur Terasima,
Ministre des Affaires Etrangères
S. M. Ile. l'Empereur du Japon,
Yedo.

（右和譯文）

以手紙啓上いたし候然者亞國公使デロン氏西洋當月九日閣下と御應接可有之右應接の所以は此間亞國會社にて海底線着岸の儀に付閣下迄差出置候願の譯に御座候趣同人より私え爲申聞候就ては方今亞公使と私と日本政府え同事を御掛合申候間來る九日同伴致候樣同人より私え被勸候

右實地に都合克相見候間閣下幷に澤外務卿御異存無之候儀と信用いたし候間今般來る西洋九日第十一字外務省え亞公使と同伴參上可致の趣閣下え前廣御知らせ申上置候

尙又右の應接中に出席し緊要なる指し示しを閣下え申出る序を蒙らば恐悅に奉存候誠惶謹言

午七月十日

丁抹特派公使 シ ツ ク

寺嶋外務大輔閣下

一七三 七月十三日（八月九日） 外務大輔寺島宗則ト丁抹使節トノ對話書

海底電線ノ陸揚ニ關スル約定案等ノ件

庚午七月十三日於當省丁抹公使ジュリアンシクえ寺島外務大輔應接大意

過日被相嘶候傳信機約定書中には如何樣の事認有之候哉一覽いたし度候

右は陸上傳信機取締規則にて海底傳信機の關係は無之候此間申上候通御免許有之候得は御國益莫大の事に候間早々御免許有之度候

傳信機計に無之諸人の益にて政府の益は無之候間傳信する毎に運上樣の物にても無之候ては政府の益には相成不申候

米國にて願出候義は如何樣申立候哉難計候へとも御國開港場え着岸迄に付稅等差出候譯は無之貴政府には益有之候米歐と御國と雙方通行可致左候得は御國の益と相成可申候

本國にては米歐とコンペニーは如何相成居哉

米歐との線は雙方政府よりの賴にてコンペニーは是迄西洋には無之候

香港にて約束相濟候事は致承知其外傳線の着岸する所二三ケ所は可有之其ケ所にて運上等取建候事有之候哉事柄不存候間承り候事に候魯國は別段の趣に付不承候

御國の爲めに候間御了解可被成候

免狀差出さすと申には無之候得共其先例を承り度事に候

會社にて入費を出し貴政府と各政府との通信速にして御爲と存候

譬へは商ひをするにも品物安けれは人其場所を賞す稅高けれは人其場所去る如し政府の益國益となるとの事に候得共外品にも右に類し雙方の益に相成候もの數多有之候

魯國は自國の雜費を以取設け候右代りに丁抹海底の傳信機の稅を取り候貴政府にて御入費も無之稅と申事は了解致し兼候全く御國內を通り候節は其稅さし出候事に候

譬へは聊かの場所にても夫丈けの稅被差出相當の事と存候今日約束を極め候ても後日に至り改め候事出來候樣にては不都合に付再應申入候事にて先例なき事は出來かたし

今般特命を受け相越候所御差支と申義は甚以困却いたし候三十ケ年間の免狀を請其內御國の御不益と相成候はゝ改め可申候

三十ケ年を取極候事六ケ敷候

魯國との約三十年に候間夫故申上候事に候

多分の入費相掛り候上にて後年に至り差縺れ取止め候事に無之樣致度事に候

入費は二千五百萬フランク相掛り候

支那にて陸え揚けすして船え繫き留候由承り候

私は更に不存候支那には海底線無之候

外國にて右樣の事有之樣承り候

英人にて貴政府え陸線免許相願候處御許容有之候由承り候

夫は尙不存候

右英人はトンと申者にて英會社の役人の趣に御坐候右を

英公使に承り候得は不存趣に候
御約束の書面役に不立もの事には候へ共いつれにも一覽いたし度候
私より申上候は事實に有之候
米公使え御咄し被成候はゝ先例も可有之候間右を致一覽度
米公使の事は別事に候
本國より特命を奉し相越今日の御談判向も相纏り不申候
拜謁の義も其儘にて未た御沙汰無之候
四日中には拜謁の義は可申入傳信機の義は時日差定めかたく候
上海え御越相成候は幾日頃に候哉
廿一二日頃出帆いたし候
上海は同所官員にて出來候哉
自國皇帝よりは御國丈け特命を奉し相越し候支那えは使節にては無之手紙計りに有之候兎に角今日日限丈け相伺度候
書面一覽の上にてケ條の内を能々一見の上取極め可申候香港も魯も此書簡中にて相分り候得共この程申入候一ケ條殘り居候間書面一見の上日限可申入候

右御相談は米國公使と同道にて罷出可申候右書面は手許に有之候間明後日表題丈け反譯いたし差上可申候
各國君主敬稱の義に付各國公使協議有之候趣に付右決定問合の爲め書翰さし出右挨拶參り次第早々取極可申入各國公使にも拜謁遲延相成候は敬稱故の義承知いたし居候間必らす速に挨拶さし越可申候間左樣御承知有之度候
右にて畢る

（下ケ札）
シブスケの口上承り取兼候廉も有之事情通り難きケ所有之候

一七四　（八月八日 九月三日）

外務大輔寺島宗則ト獨逸北部聯邦代理公使トノ對話抜書

丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定案ニ關スル件

庚午八月八日外務省おいて寺嶋大輔宇國公使フヲンブランド應接の大意
傳信機の事御話申度候
我紙に畫して示し
此邊小嶋多く海淺し恐くは線を引揚て斷ずるの易き陸上の線を斷するが如くならん
四國中國の間は海至て深し錨を卸すも不据處多し深き既に如此豈手易く引揚べけん哉且線損ずるとも日本政府於て關係せざる旨を以約定せば又愁なからん
長崎より支那へ我政府にて造んとせしが夫は止めたり內國丈は是非政府にて造る積なり夫も若し久しく時日を經造らざれば丁抹にて造ることに相談すべし外海の方は丁抹にて引も妨なし
線を引揚け斷するとの說は予思ふに線は至て重し豈引揚ること容易ならん哉若し多人數徒黨して引揚けば斷べくも候へ共左樣の事は有間敷と存候又內海より線を引時は三つの利あり曰海常に靜也曰程短し曰兵庫大坂の便を得內灣を引かば兵庫の利ありといへども斷線の患深し横濱より長崎迄の路程は外海必近し
飛脚船は近き故に常に內海を行
夫は兵庫へ寄が爲也
兵庫未た開港ならざる前も內海を行
何れにも內海え造らせる時は日本の傳信機に許多の損あり何を以て損とする哉
線二道に分る故に損也喩へは爰に商賈あり今迄品物一軒にて商ひし處新に同し商ひの家一軒旁へ出來る時は品物半は新家にて買ふべし左すれば舊家半の利を失ふと同論也
若益にならぬと思はゝ止めらるゝ哉
横濱より兵庫迄の處は必益あり兵庫より長崎迄の處は益あるまじと思へり併し損益に係らずそれ丈は都て造る積なり
何故益なき見込にて造る哉兵庫迄の益は長崎迄の損にて差引詮なき事と被存候丁抹會社に屬して稅を取にしかじ稅を納る譯ならば又其相談もあるべし
夫は予丁抹公使に談すべし
併し夫は予壹人の考也未た公然談ずべからず
然らはそれはまだ內々の事也併し長崎兵庫横濱とも政府にて許すにあらずや
政府にては長崎さへ未た不極長崎を許すも只陸揚丈の事也ウエンナの約條を見るに政府の用事は無賃にて傳信す其替り諸物陸揚運上無き旨を記せり矢張日本も同樣の譯ならば許すべし
前に如申若し線損するも日本政府に關せず併し日本政府

にて斷するものを不制と申譯にはあらず矢張政府の品の
如く大切に思ふべし斷ずるものあらば嚴罰を加ふへし且
其ものより償を取べし
夫等面倒故外海の方安心と存候なり併し夫迚も横濱に至り
揚ると揚ざるは日本の權にあり横濱より揚けず外海を引而
已ならば何處迄引ても我政府にては構はず
無賃と云ふも上海まで也何處迄も無賃にはあらず
會社の心得は毎日百言丈は無賃とせり其餘は政府にて拂
ふべし大抵百言ならは政府の用は足るへし
百言も日本言葉にていへは西洋の百言と違ふべし且横濱其
外とも日本人を雇ふべし然らは日本人頼むもの亦多し
然り日本人は雇料もやすし
他國人を呼よりは其地のものを雇ふはやすき理なり
日本より他えの公用は四分の三を拂ふべし
何れの國にても右の規則歟
不然日本にては餘り議論手重き故かく許んと欲せり
上海より長崎迄は無賃長崎より兵庫々々より横濱此所は何
れも無賃たるべし併し長崎より横濱の間は其外に税何歩歟
を出すべし

傳線を建るは其益幾許歟未た分り難し然るに日本にて多
分の税を要する時は會社の事是が爲に廢さんとす且言數
を極めず無賃と云ふは大いなる事なり終日日本政府の用
而已にて他の傳信出來ぬ時は如何長崎より上海迄價を減
する事は相談すべし且日本政府よりの用事は外に何程頼
むものありとも政府の用を先にすべし

一七五　八月十一日（九月六日）　獨逸北部聯邦公使館通譯官ヨリ外務權大丞馬渡八郎宛

日本ト丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定案送付並ニ此ニ關スル面談ノ件

以手紙啓上仕候然は別紙規則案貳ケ條差進候間寺嶋公え入
御覽可被下候丁抹國公使右規則の如く御約定いたし度尤貴
方にて被立候規則案第三ケ條第四ケ條第五ケ條第六ケ條右
公使致承知候其外兵庫横濱及兵庫長崎の間の傳信機は右公
使今差止別紙規則案の通り御約束十分と被思候長崎より上
海まて公便無賃にて屆け候儀難相成候間權宜の見込にて價
貳割五分減し可申由に御坐候拙者義明後貴國十三日朝九字
寺嶋公え拜晤の上右の事に付御相談申度間其節御確答承度
存候間乍御面倒右の段即刻寺嶋公え御通達被下度奉存候此
段可得御意如此御坐候已上
千八百七十年第九月六日

ケンプルマン

外務權大丞
馬渡君貴下

註一、本文書ニ謂フ「別紙規則案」ハ一八一ノ原案ナレハ省略ス
二、十三日ノ對話ノ記錄ハ見當ラス

一七六　八月十二日（九月七日）　外務權大丞馬渡八郎ヨリ獨逸北部聯邦公使館通譯官宛

日本ト丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定案受領通知並ニ此ニ關スル面談ノ儀回答ノ件

午八月十三日達ス
貴國第九月六日附の御書簡并御別紙規則案共落手御來示の
趣は速に寺島外務大輔え申達候儀に有之然處丁抹國公使參
朝の擧あるに當り政府於て事務多端なるにより右規則決定
の儀昨今其運に難至就ては明十三日爲御相談御面晤は可致
候得共其節及確答候義には難至旨大輔より申聞候右の趣貴
公使へ御申入希度存候此段回答如此御坐候以上
庚午八月十二日

馬渡外務權大丞

ケンプルマン貴下

註　十三日ノ對話云々ニ關シテハ一七五註二參照

一七七　八月十七日（九月十二日）　外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ亞米利加辨理公使宛

丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定案送付ノ件

八月十七日達
以手紙啓上いたし候然は傳信機約定別紙の通一兩日の内取
極候積右は兼て御約諾いたし置候義も有之候に付爲御心得
懸御目申候此段得御意候以上
八月

御兩名

米國公使閣下

註　本文書ニ謂フ別紙ハ一八一ノ原案ナレハ省略ス

一七八　八月三十一日（九月十六日）　外務卿寺島宗則宛

日本ト丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定案ノ件

U. S. Legation,
Yokohama, September 16, 1870.

To
Their Excellencies
The Ministers for Foreign Affairs,
etc., etc., etc.

Your letter of the 17th of the 8th month (the 13th (sic) instant) in regard to the contract proposed to be entered into by the Japanese Government with the Danish submarine Telegraph Company with a Copy of the proposed contract I have received and considered. After first thanking You for Your courtesy in the premises I will state that I see nothing objectionable therein as I understand it to reserve the right to Your Government to freely enter into similar engagements with the Citizens or Subjects of other Powers—but I would suggest to you the propriety of making your contract a little plainer and more positive in that respect and further to guarantee to Yourselves and all others that under no pretence whatever shall there be any discrimination between persons or Governments in the rates to be charged for sending or receiving messages by the line when constructed.

With respect and consideration,
C. E. DE LONG,
Minister Resident of the United States
in Japan.

（右和譯文）

横濱千八百七十年九月十六日

貴國八月十七日附貴翰落掌致候然は日本政府にて丁抹海底傳信機社中と御取結ひ可相成約定書案御約束の通御差越被下萬謝の至に奉存候右約定案箇と熟覽致候處他國人民と同様の約定取極候共日本政府に於て勝手たるべき旨箇條中に有之候上は拙者に於て更に異存の廉無之候乍併御約定の廉々今少々明白に致し殊に成功の上其線にて通信往復の賃銀は假令何事ありとも人民と政府との間に差別無之樣疎と御約定相成居候はゝ可然と奉存候右御回答申上度早々已上

合衆國ミニストル レジデント
シイデロング

外務卿
外務大輔　閣下

一七九　八月三十一日（九月十七日）　外務省川路寛宛

丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定調印期日延期ノ旨丁抹使節ニ通告方指令ノ件

神奈川縣御中

外務省

丁抹使節シッキ過日より同國傳信機を上海より我地え陸上の儀願出歟々應接の上彌明後廿四日調印の積昨日佛通辯チプスケを以致報知置候處明後日は調印差支候義有之尤右に付同使節え此條約中一二ヶ條猶及相談度候に付明後廿四日午後二時頃東京外務省え被差越候樣早々御申入有之度候實は調印の積にて同使節明日より出府其用意有之候ては氣の毒の儀に付態々及斷候委細の義は明後廿四日に及談判候間此段も丁寧御通置有之度候也

庚午八月廿二日

一八〇　八月三十四日（九月十九日）　宗參議副島種臣、外務卿寺島宗則宛

海底電線陸揚ニ關スル約定案ノ追加並ニ調印期日ノ件

丁抹ノ對話書

庚午八月廿四日外務省おいて副島參議澤外務卿寺嶋外務大輔丁抹公使と電信機約定の義に付應接の大意左樣に候

御加へ被成候丈の事に候へは此間外務卿大輔と協議いたし假令何事ありとも人民と政府との間に差別無之樣疎と御約定相成居候はゝ可然と奉存候右御回答申上度早々已上

合衆國ミニストル レジデント
シイデロング

し決定の分丈は調印いたし加へ候分は別に又調印いたし
候て可然と存候
未た鈐印無之内に付書加へ度談判いたし候事に有之候夫が
則談判と申ものに候
外國には一旦取極候義を再ひ談判致し候抔申義は曾て無
之候日本政府にては兎角左様の事而已にて殆當惑いたし
候既に調印の日限も極り候へは其趣本國政府へも申遣し
候義に有之候
夫等の邊は我國政體は外國とは異り居候間獨斷にて事を取
極め難相成政府へ伺候へは相違の廉も出來申候
改め候處はこれ〳〵の場所にて是は言葉を改候而已にて意
味は變り不申候と約定書添削の廉を示す
夫は既に承知いたし候
猶貳た廉加へ度廉有之候と新に加ふる一と廉を示す
其廉は御無理とは不存候へ共一體拙者使節に罷越候は我
政府の權を握り參候義に有之候處一旦決し候義を又候加
刪被成候ては我政府の權を御殺き被成候義に有之候
併し貴政府より閣下を御差越し相成候は貴國會社の御世話
被成候爲に可有之候我政府にても國内に傳線を作る事を欲

し候人民有之候時は夫々世話いたし不遺候ては不相成候貴
國人の益而已を成就し我國人の益を不構と申事には不相成
候預め夫等の事を思ひ候間今ケ條を加へ度と存候義に有之
候
承知いたし候然らは只今拜見の廉は日本にて製造の日よ
り傳信賃の五分を納め可申候
然らは貴方にて文に認むべし
傳信を施行の日よりにて可然哉
左様に候
横濱と長崎と兩所に候へは兩所へ五分を納め候義にては
違ひ申候
壹ケ所へ五分御納相成候共兩所へ貳分五厘つゝ御納にても
同し事故何れにても宜候我方にて强て貪る譯には無之候間
趣意さへ相立候へは宜事に候
然らは兩所へ貳分五厘つゝに可致候約文を認出す
跡の一廉に候と、若右傳線を政府にて買取ん欲る事あら
は作り候費用の公書を見る云々の廉を示す
拙者は政府よりの使節にて會社の者に無之候間費用等の
義は不心得候間ケ様に認て可然と存候と、右公書の廉を記
し末に日本政府より會社へ直に相談との廉を記す

是迄總て公使と懸合候處此義而已會社へ直に懸合候譯は有
之間敷存候
拙者に無之とも會社其權あらば同し事に候
右兩ケ條は添約定に可致候
添書も本約定書と同様に候へは宜候と、彼の約定譯文を直す
本約定書と同様といふ事も書入可申候乍併是非とも日本
にて御買取と申譯にては丁抹會社の手を縛ると同様にて
會社の業は何も出來不申候
費用に利を加へ格別會社の損に不相成候はゝ可然義と存候
格別の差支も有之間敷候へ共此約定は會社に非らざれば
結兼候末に會社よりも政府へ相談すべしと申文字を加へ
候ては如何
相談と認候は則雙方互に善惡を談論し候義にて片方より申
事のみには無之候
公書を御覽に入候義は宜候へ共賣る賣らぬとの決は會社
の權に有之候
年限を切り候て賣る事にいたし候へは如何
何ケ年の後賣ると申事に候哉夫も極め兼申候
賣る賣らぬの義不極候上は公書を見るも無役の事に候

併し公書を御覽の事は以後の例にも有之候間矢張日本政
府の御利益と存候相談可致と書し可取極といふ文を刪候
ては如何
相談いたし候ても賣ることを阻み候はゝ不相談も同し事に
候
夫にては前にも如申會社の手を縛るの論に候然らは會社
にて賣らんと欲る時は公書を以賣るへしとせば如何
我國にて傳線既に成らば貴國會社にて作ることを御請求も
無之事也未た我方にて不成候故右義御許し申事に有之候今
日本にて義理を立御許申候義に付後來日本にて買んと欲る
時は又貴國會社にても義理を以御賣り被成候樣致度候也
後來貴政府にて御建造被成候節は傳線二道に相成候とも
夫は拙者方にては構ひ候義は無之候畢竟今傳線を作る事
は丁抹に而已利益ありて日本政府に益無之と御思召候故
左様の御論も有之候へ共日本國の御爲にも大有益の事に
有之候今西洋の新聞を得るは二ケ月餘りも程合あるべし
夫を隨分一日間にも得らるべし
若賣るといふ論相成兼候はゝ後來日本にて買んと欲する時
長崎歟横濱歟一ケ所丈を足溜りに許し一ケ所丈は日本にて

買ふ事にせば如何

少しも日本政府の費なく右樣の大有益を御受の事なれは

左樣の御論は有之間敷義と存候

夫故相當の價にて買ふ也

今迄貴政府よりは種々の廉被仰聞候處一々承知いたし候

へ共丁抹の方よりは何一つ異論は不申上候少しは丁抹の

方をも御助有之候て可然と存候

然らは政府へ相伺御返答可申候拙者も一人にて決を取る權

を受參り候事に無之候間不伺候ては難決候尤速に何れと歟

極め參り候

只今迄の談判事六ケ敷候間爰に一つの御進め申上候義を

思付候年限を極め何ケ十年の後は約定を改め候と申事に

候尤三十年を以期限と可致候されば魯國と同樣に候

魯國は三十年なれ共我國は政體一變いたし開け候初めに付

諸事替り易く候間今少し年期を短ふすべし

魯國と繼く傳線なれは矢張三拾年に無之ては不都合に候

西洋は大抵七十年に有之候

貳拾年といたし度候

拙者より工夫いたし御進め申上候義に付三拾年より短く

は難取計候今晩直に約定取極め申度故三十年と申上候義

に御坐候

今晩拙者直に伺ひ可申候拙者考にては多分承諾可相成と存

候

年限を切り改約の條は第十條目に入れ可申候外貳ケ條は

添書に可致と存候

承知いたし候伺候上成否とも今晩速に可申入候

明日は何字に出候て可然哉

伺之通相濟候へは明日午後第二字に調印可致候

又御相談の事も可有之候間早く支度いたし可罷出候

畢る

一八一　八月二十五日（九月二十日）

丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定書

丁抹國電信條約幷内約添箇條

日本政府及ヒ丁抹

皇帝陛下使節ト議シテ丁抹國デット、ストレ、ノルテスク、

シナ、オク、ヤパン、エキステンシユン、テレガラフ、セルスカト（東北支那幷日本ヘ傳信機取設方會社ノ名）會社ノ傳信機ヲ日本地方ニ陸揚スル免許ノ約定

第一條

丁抹國デット、ストレ、ノルテルスク、シナ、オク、ヤパン、エキステンシユン、テレガラフ、セルスカト、（東北支那幷日本ヘ傳信機取設方會社ノ名）會社ノ海中傳信機ヲ大日本國横濱長崎兩開港ニ於テ陸揚シ且海中ハ九州四國ノ南方ヲ廻リ其海底線ヲ右兩港ト相接セシムル事ニ付日本政府右會社ニ允准セリ

第二條

長崎横濱ニテ右傳信機取設ケ方ノ用意ヲナシ且其局ヲ建ルタメ會社ニテ要用ノ地ヲ借得ベシ尤兩港ノ日本官府ヨリ差支ナキ地ヲ指示シ可成丈海濱ニ切近シテ其局ヲ建シメ且其機線ヲ地上ニ導ク爲ニ緊要ナルノ外之ヲ最モ短フスベシ

第三條

傳信局其外建物ノ爲借受タル地及傳信用ノ品物ノ租税ハ條約面ニ從フテ之ヲ拂フベシ

第四條

會社ノ機線損スルト雖モ日本政府其責ヲ受ベカラス然シ日本政府ニテ右陸上ノ線及ヒ柱ヲ自國所持ノ線及ヒ柱同樣ニ防護スベシ且從來傳信機ヲ損スル事ニ付布告セシ刑律ハ日本領内ノ水陸ニ在ル丁抹會社傳信機ニアリテモ同般ニ行ハルベシ

第五條

日本人若シ日本領内ノ水陸ニ在ル丁抹會社傳信機ヲ損スルモノアリテ其證據明白ナレバ會社其者ヨリ其償ヲ得ルガ爲訴出ルノ理アルベシ

第六條

會社ニテ使役スルモノハ各其本國ノ戸籍ニ列セルモノニシテ其本國ト日本トノ條約ヲ守リ且日本ノ法ヲ遵奉スベシ

第七條

日本人民右傳信諸術ニ熟シ右ニ適用スル人物アツテ此傳信機會社ニ入ンヲ請トキハ之ヲ免シ且會社ノ官員ト均シキ取扱ヲ受ケ一般ノ利益ニ至ル迄他人ト同樣タルベシ

第八條

日本政府ニテ傳ント欲スル信ハ他ノ傳信ヨリ必先ニ送ル

ベシ

第九條

日本政府ハ此度會社ニ其業ヲ營マシムル爲ニ之ヲ允准セシモノナレハ只一般ノ保護ヲナスノ外少シモ關係スル事ナシ向後モシ同業ヲ起サントスルモノアリテ之ヲ允准スル事アルトモ會社ニテ決テ苦情ヲ唱フル事アルベカラス尤若シ日本政府他國ノ會社ニ此免許ヨリハ多ク利益ノアル免許ヲ出ス時ハ丁抹ノ會社ニモ右同樣ノ利益ヲ差許スベシ

第十條

此約定海底線成就ノ年ヨリ三十年ノ間施行シ三十年ヲ過ル時ハ合議シテ箇條ヲ改革スベシ

第十一條

此約書原文ハ日本語ニ通佛朗西語ニ通ヲ認ムベシ

明治三年庚午八月廿五日

洋曆千八百七十年第九月廿日

於東京

外務卿

澤　從三位清原宣嘉(印)

外務大輔

寺嶋從四位藤原宗則(印)

下名ノ者此約定並添書ノ日本及佛蘭西原文ハ全ク相違ナキ事ヲ證ス

佛蘭西公使館附一等通辯士官

ヂ　ュ　ス　ケ

內約ノ添條

第一條

横濱ト長崎ノ間ニ日本政府ノ陸海信機施行ノ日ヨリ横濱ト長崎之間ニ取立ル丁抹會社ノ海底線ヲ以テ差送ル總テノ傳信ノ賃銀ノ一分五厘ヲ日本政府ニ收ムベシ

第二條

若以後日本政府ハ丁抹ノ會社ニ加入セントシ或ハ長崎ヨリ上海迄幷ニ長崎ヨリ横濱迄丁抹會社ノ海底線ヲ買入ントスル時ハ丁抹會社ニ於テ右兩線製造雜費ノ元金ヲ證明スヘキ公書ヲ無差支丁抹會社ヨリ日本政府ニ差出スヘシ其節ハ日本政府ヨリ丁抹會社ニ直ニ相談致シ會社ニテ賣リ又ハ加入ノコトヲ承諾セハ合議シテ相當ノ價ヲ以テ取極ムベシ

右添約定ノ二ケ條ハ本書ニ記スルト同樣ニ雙方ニテ之ヲ守ルベシ

明治三年庚午八月廿五日

洋曆千八百七十年第九月廿日

於東京

JULIUS SICK.

外務卿

澤　從三位清原宣嘉(印)

外務大輔

寺嶋從四位藤原宗則(印)

(右佛文)

CONVENTION

passée entre

le Gouvernement Japonais

et

l'Envoyé Extraordinaire

de Sa Majesté le Roi de Danemark

Relativement à l'autorisation d'atterrir des câbles au Japon, accordée à la Compagnie Danoise dite "Det store nordiske China og Japan Extension Telegraf-Selskab."

Article Ier

La Compagnie Danoise "Det store nordiske China og Japan Extension Telegraf-Selskab" est autorisée à atterrir ses câbles aux deux ports de Yokohama et de Nagasaki, à leur faire contourner la partie sud de l'île Kiu-siu et de l'île Shikokf et à relier entre eux les deux ports de Yokohama et de Nagasaki par un câble sous-marin.

Article II.

La Compagnie Danoise pourra louer dans les deux ports de Nagasaki et de Yokohama les terrains qui lui seront nécessaires pour l'exécution de son projet et l'établissement de stations télégraphiques; toutefois les autorités locales lui désigneront les terrains qui peuvent, sans inconvénient, être mis à sa disposition. Les stations télégraphiques devront être établies aussi près que possible du rivage et la longueur du parcours des lignes terrestres construi-

tes par la Compagnie devra être aussi restreinte que le permettront les nécessités de l'entreprise.

Article III.

La Compagnie aura à acquitter pour les terrains qui Lui sont loués à l'effet d'y construire des stations et autres bâtiments, les mêmes droits que ceux qui sont perçus pour tous les autres étrangers, résidant dans le même port. La Compagnie paiera également pour les différents objets qu'Elle introduira au Japon pour Son service, les droits d'importation fixés pour les mêmes matières par les Traités.

Article IV.

Le Gouvernement Japonais ne pourra être responsable pour les dommages occasionnés aux câbles de la Compagnie ; mais, Il fera respecter les fils et poteaux des lignes établies sur terre par la Compagnie, comme les fils et poteaux des lignes appartenant au Gouvernement. Le Gouvernement Japonais fera aussi des publications pour faire connaître qu'à l'avenir les lois et règlements relatifs aux dommages causés aux lignes télégraphiques seront également applicables aux lignes télégraphiques de la Compagnie et à ceux de ses câbles qui se trouvent dans les eaux Japonaises.

Article V.

S'il venait à être prouvé clairement qu'un sujet Japonais eût causé des dommages aux lignes télégraphiques de la Compagnie ou à ceux de ses câbles qui se trouvent dans les eaux Japonaises, la Compagnie aurait le droit de formuler une demande à l'effet d'obtenir une indemnité par le coupable.

Article VI.

Toutes les personnes employées dans le service de la Compagnie, devront être inscrites sur les registres où sont portés les noms des résidents de leurs nationalités respectives ; de plus, chacune d'elles devra se conformer aux clauses du Traité conclu entre le Japon et son Pays, et respecter les lois du Japon.

Article VII.

Les sujets Japonais possédant les qualités et connaissances requises, qui demanderaient à entrer au service de la Compagnie, y seront autorisés. Ils seront traités de la même façon que les autres employés de la Compagnie et jouiront en tout des mêmes avantages que ces derniers.

Article VIII.

Les télégrammes que le Gouvernement Japonais désirerait envoyer, devront toujours être expédiés avant les télégrammes d'autres provenances.

Article IX.

Le Gouvernement Japonais, en accordant à la Compagnie l'autorisation de mettre Son projet à exécution, n'entend se mêler en rien des opérations de la Compagnie, si ce n'est pour Lui assurer sa protection générale ; et, si dans l'avenir des Compagnies d'autres Pays Lui demandant l'autorisation d'exécuter une entreprise analogue, le Gouvernement Japonais venait à la leur accorder, la Compagnie Danoise ne pourra s'en plaindre au Gouvernement Japonais. Toutefois, si le Gouvernement Japonais accordait à d'autres Compagnies de plus grands avantages que ceux accordés à la Compagnie par la présente Convention, ces mêmes avantages seront donnés à la Compagnie Danoise.

Article X.

La présente Convention sera valable pendant trente ans, à compter de l'époque où les lignes télégraphiques sous-marines de la Compagnie seront achevées. A l'expiration de ces trente années on procédera à la révision de la Convention.

Article XI.

La présente Convention a été faite en quatre exemplaires authentiques dont deux en langue Japonaise et deux en langue Française.

Ainsi fait à Yedo le vingt Septembre mil-huit-cent-soixante-et-dix.

Mei-ji san nen Ka no ye Ma hatschi gatze ni djiu go nitshi.

JULIUS SICK.

外務卿

澤 從三位清原宣嘉（印）

外務大輔

寺島從四位藤原宗則（印）

Je soussigné certifie que les textes Japonais et Français de la présente Convention et des articles additionnels sont en parfaite conformité.

DUBOUSQUET,

Officier attaché à la Légation de France en qualité de 1er Interprète.

Articles additionnels et secrets.

Article Ier

Dès que le télégraphe terrestre Japonais entre Yokohama et Nagasaki fonctionnera, le Gouvernement Japonais prélevera $2\frac{1}{2}$ (deux-et-demi) pour cent sur la recette de toutes les dépêches expédiées par le télégraphe sous-marin de la Compagnie Danoise entre Yokohama et Nagasaki.

Article II.

Si dans la suite le Gouvernement Japonais émettait le désir d'entrer dans l'entreprise ou même d'acheter à la Compagnie Danoise ses lignes de Nagasaki à Shanghai et de Yokohama à Nagasaki, la Compagnie donnera sans difficulté au Gouvernement Japonais les pièces constatant les dépenses faites par Elle pour l'établissement des deux lignes susdites. En ce cas le Gouvernement Japonais devra s'entendre directement avec la Compagnie Danoise

et si celle-ci consent à vendre ou à continuer l'entreprise de moitié avec le Gouvernement, on décidera un prix convenable d'un commun accord.

Les deux articles additionnels ci-dessus devront être observés par les deux Parties contractantes comme faisant partie intégrante de la Convention.

Fait à Yedo le vingt Septembre mil-huit-cent-soixante-et-dix.

Mei-ji-san nen Ka no ye Ma hatschi gatze ni djiu go nitshi.

JULIUS SICK.

外務卿
澤 從三位清原宣嘉（印）
外務大輔
寺島從四位藤原宗則（印）

一八二 ペ乃三十六号（九月二十一日） 外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

海底電線ノ通信料ノ樣ニ就キ説明ノ件

Messieurs les Ministres,

En me référant à la conversation que nous avons eue à la fin de la conférence d'hier, j'ai l'honneur de réitérer ici, qu'il sera veillé à ce que les engagements pris au nom de la Compagnie Danoise des télégraphes vis-à-vis du Gouvernement Impérial par le premier Article additionnel et secret de la Convention télégraphique du 20 Septembre 1870, disant que: "Dès que le télégraphe terrestre Japonais "entre Yokohama et Nagasaki fonctionnera, le Gou-"vernement Japonais prélevera deux-et-demi pour "cent sur la recette de toutes les dépêches expédiées "par le télégraphe sousmarin de la Compagnie "Danoise entre Yokohama et Nagasaki", seront, quand l'époque prévue par l'article sera venue, exécutés de manière à donner pleine connaissance au Gouvernement Japonais du montant de la quote-part (par mois ou par trimestre) de cette recette qui devra être versée dans le trésor Japonais.

L'agent en Chef de la Compagnie Danoise va être muni des instructions nécessaires à cet égard et il indiquera à cette époque les moyens pratiques pour arranger ce point d'une manière entièrement loyale.

Je saisis cette occasion pour offrir à Vos Excellences les nouvelles assurances de ma plus haute considération.

Yokohama, le 21 Septembre 1870.

L'Envoyé en Mission Extraordinaire
de Sa Majesté le Roi de Danemark
JULIUS SICK.

A Leurs Excellences
Messieurs les Ministres
des Affaires Etrangères de
S. M. l'Empereur du Japon,
à Yedo.

（右和譯文）

九月廿日出ス　此ノ書簡ハ馬渡君持參政府ニ差出ス

昨日御面晤の節御談判いたし候趣に依り玆に改て申述候日本政府へ對し丁抹傳信社中の名代として千八百七十年第九月二十日取結たる傳信内約添箇條第一條中横濱長崎との間日本政府陸地傳信機施行の日より横濱と長崎の間に取立る丁抹會社の海底線を以て差送る總ての傳信賃銀の二分五厘を日本政府へ收むくしと有之箇條の趣に從ひ其時限に至り候はゝ日本政府金庫に納むべき賃銀請取高差引を一ヶ月毎

又は三ケ月毎に日本政府へ明白に勘定相分り候樣の仕方を設け屹度其箇條の趣を相守り可申候丁抹社中頭取のもの右の儀に付要用の差圖をなし其期々に至り候はゝ信實公平の仕方を以て右勘定合の取極出來候樣行はるへき良法を指示し可申候

横濱千八百七十年第九月二十一日

特任公使

ジュリーデシッキ

外務卿大輔閣下

註　本文書ハ我方ヨリノ申入（一八四）ニ應シ八月二十六日附ヲ以テ九月一日丁抹使節ヨリ送付セルモノナリ

一八三　八月二十六日（九月二十一日）　英吉利公使館ニ於テ外務大輔寺島宗則ト英吉利公使トノ對話抜書

丁抹電信機ニ關スル件

庚午八月廿六日寺島外務大輔英國公使館おいて同國公使え應接筆記

通商社のもの寄合候て金子差出置候處何々ケ條にて傳信機こしらへ候や其譯不知しては不都合には無之哉

コンペニーの人は不知して不相叶事に候へとも其外のものは不知共宜候

都てケ樣の商社は一年つゝ出費の高取調政府え差出可申事に御坐候

是は兩政府の間の條約にも無之と相見候一方は日本の政府一方は商社なるもの歟

左に無之日本にて商社へゆるし爲取扱候事なり

然る上は兩政府條約に無之候や

決て右樣の譯に無之丁抹政府の命を受來候ものに命を下し置候義に候

商社のもの公使となし差越候義か丁抹公使と相認られ申間敷候

商社のものは別に來り候シッキと申名は差越候書付に有之

シッキは商社の役人に無之候はては約定相成申間敷唯公使にては右取扱は出來致間敷候

エゼント參り居候間此くらゐならはと申取極もいたし置候事にも可有之哉存候

シッキは公使に相違無之候へ共電信の世話人なりや夫は

不存事に御坐候

此頃は不居候へ共先日中エゼント連參り候其人影に居候自分か兼帶の積コンペニーに懸るもの迄シッキ必成就いたし可申と信用いたし候

實にエゼントならは證書をさし出候權無之筈に候

右に不拘出來の權を附與し候事にて世話人の權有や否はしらす候へ共唯彼より來り候國書有之彼政府を信用せる故任せ置候義に有之

右は政府の事にて商社の事には無之候

今度もしコンペニーより沙汰有之夫迄出來不致候へはシッキはやめに致し候はねは相成不申候

夫は當然の事に御坐候シッキを疑惑いたし不申候へ共國書はあてになり不申同人は自分にて約定取極候程の權力有之ものに御坐候且條約書には無之免許狀に御坐候雙方官員名前に不及世話人名前にて相當の事と存候

一八四　八月二十八日（九月二十三日）　外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ丁抹使節宛

海底電線ノ通信稅ノ儀ニ就キ聲明ノ書翰送付越

一〇　丁抹トノ海底電線ニ關スル約定ニ關スル件　一八四　一八五

八月廿八日達

以手紙致啓上候然は去る廿五日應接の節御談判いたし候丁抹會社傳信機約定添箇條中第一條に就き總て傳信の賃銀無相違旨を日本政府より監察する爲め賃銀受取候局え役人差出又は右同樣日本政府にて十分證明すへき丈けの方法を施す事差支無之旨の書面御答有之度存候右可得御意如斯御座候以上

庚午八月

御兩名

丁抹公使

ジュリースシッキ閣下

註　本文書ニ關シテハ一八二註參照

一八五　九月二十三日（十月十七日）　外務大丞等ヨリ露西亞領事代理（函館在勤）宛

丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定締結通知ノ件

九月廿三日達

以手紙啓上いたし候然は兼て御申越有之候丁抹國電機製造會社にて我國え電信機線を陸揚致度義に付此程同國使節ジユリアンシツキと談合の上横濱長崎兩港へ陸揚の免許約定書爲取替および候委細は同國政府より御承知の事と存候へ共爲御心得此段申入候右可得御意如此御坐候以上

庚午九月廿日草

大少丞

魯國岡士

クラヘテンベルグ貴下

註　「クラヘテンベルグ」ハ八月二日離任シ當時ハ「ヲラロウスキー」領事代理タリ尙一八六參照

一八六　十月十四日（十一月七日）　露西亞領事代理（函館在勤）ヨリ外務權大丞馬渡八郎等宛

丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定締結ノ通知

了承竝ニ右約定書寫送付アリ度旨申入ノ件

午十月廿二日出ス

一八七

第九十號

當年九月廿三日附第一號貴翰致落手候然はデネマルカ電信機製造會社にて貴國迄陸揚電信機製造致し候義貴政府免許に相成且同國使節と約定取替しに相成候段御申越の趣於拙者致大慶候同人よりは右約定の寫未た落手致し不申候得とも定て近日に差送り申事と被存候併和文の寫我政府え差遣申候筈に付乍御手數何卒右寫一冊拙者方え御遣し被下度至願仕候此段得貴意度如此御坐候已上

千八百七十年十月廿六日　魯國コンスル　ヲラロウスキイ

馬渡外務權大丞

宮本外務少丞　貴下

註　日附ハ露曆ト認メラル

一八七　十月二十五日（十一月八日）　外務大丞等ヨリ露西亞領事代理（函館在勤）宛

丁抹トノ海底電線陸揚ニ關スル約定書寫送付ノ件

十月廿五日達ス

貴國千八百七十年第十月廿六日附第九十號の貴翰落手然は丁抹國電信機製造會社にて我國へ電信機線を陸揚免許約定爲取替および候段申進候我九月廿三日附の書翰御落手相成候處同國より右約定の寫未た御落手無之然る處和文寫貴政府え被差出候に付差進候樣御申越の趣致承知候則右約定書和文寫壹冊差進申候此段回答旁如此御坐候以上

明治三年庚午十月廿二日草　大少丞連名

魯國コンスル

ヲラロウスキイ貴下

註　本文書ニ謂フ「約定書」ハ一八一ニ同シ

一八八　十月二十九日（十一月十二日）　外務省ヨリ長崎縣宛

丁抹ノ海底電線陸揚地點用意アルヘキ旨申入ノ件

十月廿九日達濟

長崎縣御中　外務省

丁抹國電信機製造會社にて傳信機線陸揚免許の儀別紙の通約定取極候間爲御心得寫壹冊幷書簡往復寫御廻し申候尤傳信建造場所の義今より御用意有之度此段申入候也

庚午十月

註　本文書ニ謂フ「寫壹冊」ハ一八一ニ同シ尙「書簡往復寫」ハ詳ナラサルモ前出ノ日丁當事者間相互ニ往復サレタル書翰ト認メラル、又此等ノ書類ハ十月二十八日附ニテ神奈川縣宛ニモ送付シ居レリ

一八九　十月二十四日（十二月十六日）　長崎縣ヨリ外務省宛

丁抹ノ海底電線陸揚地點選定ニ關スル件

丁抹國電信機製造會社にて傳信機線陸揚の儀御免許の御約定書壹冊幷就右御往復の書簡類一同附囑御申越の旨承知仕候此段御報申進候以上

庚午閏十月廿四日　長崎縣（印）

外務省御中

事項一一　新潟開港ニ關スル件〔第二卷事項三八、四〇參照〕

一九〇　二月二日（一八七〇年三月三日）　外務省ヨリ太政官辨官宛

外務少丞水野千波ヨリノ報告書進達ノ件

附屬書　一月外務少丞（新潟出張）水野千波ヨリノ報告書

新潟、佐渡夷港開港事情ノ件

依

御沙汰水野外務少丞新潟出張中進退別紙の通書取を以申上候也

二月二日

外務省

辨官御中

（附屬書）

私儀去々辰十一月新潟開港に付出張被仰付彼地に奉職罷在候處今般御沙汰の次第も有之交代出京仕候彼地出張中取扱候廉々大略申上候樣御談に付左に申上候

一辰十二月下旬着直樣夫々手配可取掛の處人民固陋の風習兎角開港を嫌い殊其頃の知事西園寺殿には長岡表に奉務雙方知事の職御讓合にて更に開港の事務に關係無之新潟管轄罷在候其頃の權判事高須梅三郎え引合および候得共知事の差圖無之ては取扱兼候由申立既英岡士よりは知事に面會を乞且開港の手順相後れ候儀を彼是差迫り申立然る處高須梅三郎は免職願差出候由にて歸國土地進退の長官不罷在百件難配（困難カ）其節の事情は東久世殿在職中度々申立候儀に御座候其折柄楠田五位新潟判府事奉命にて西京より出張に付諸件談判の內新發田領の者共三百餘人信濃川水吐の儀に付徒黨新潟隣村關屋村地內え不法に堀割取掛雙方の人民沸騰下々より歎訴に付鎭撫および主謀巨魁の者召捕其已來外務職の盡力相分開港の儀下も方にて强て難澁不申立樣相成候

一新潟の儀元來川港にて信濃川吐口漸々押埋り川水砂漠を海水逆浪と揉合水戸口大難所にて度々難破船有之永久の見據無之候間諸營繕向可成丈け減略取掛り申候

一外國繫船場川口より南方十五六町程隔候場所にて海岸は高浪打當上陸難相成運上所可取建相應の場所無之仍て衆評の上信濃川岸字廐島地先船固場（船繫場）四千坪高六間に築立申候

一右場所え運上所并石造の庫補理エンテレホット取設申候

一同所えの往來地底にて諸荷物運送不辨に付蓮沼埋立三百五十間餘の新道并二橋懸渡申候

一新潟地勢三方は海岸又は川にて非常の節凡取締も不相立候間陸路入口え關門壹ケ所取建戍兵交代固衛爲致申候

當時戍兵新發田藩二小隊長州豐浦藩一小隊也

一川港入口兩岸え約書の通燈明臺取建申候

假立にて高三丈也

一商法の儀は貿易第一にて開港場專要に付東京府の振合を以商社取開き候處元來多欲頑固の人民一已の利に走り疑念强加入の者無之候に付開港金の內壹萬兩相下け追々市中よりも持寄當時日々盛に相成申候

壹萬兩の利足每月取立文武場入用に仕拂罷在候此文武場は昨巳六月取立申候馬術は備馬にて稽古爲致申候是は外國人護衛馬也

一都て營繕向出來迄は商家等借上け假に取設置巳三月より同九月迄に些出來相成申候

一新潟は前書の通り船附き六ケ敷土地にて既約書にも運送船の儀揭け有之然る處大船は川口出入難相成辨利の船當三月迄に製造の積岡士え引合當時三艘製造中に有之尤日本形押送り船の三つ合せ候程の形に有之御入費受負高六百兩に不過其外日々押送り船貳拾五艘相備陸揚差支無之岡士え引合賃銀等取極有之候

遣用方規則取極申候

一港入口難所に付澤筋え浮木瀨印可取立約書に候得共出水の度々變瀨いたし取設候ても無用に屬し平日水先案內小船にて出居右を目當に日本船入津いたし候間是又岡士え引合外國船も同樣にいたし浮木等は見合申候

一佐州夷港の儀は外國人碇泊所にて且金島(全カ)遊歩に付渡海見分いたし夷港えは約書の通借庫并上陸場取設申候尤同所は一時風波を凌候迄の場所にて暴風を凌候には約書面の通後面の湖(此湖は四方凡壹里程有之深二丈三丈程有之)堀割不申候ては不相成即今御入費相掛候は無益に付佐州縣え懸合是迄貢米積入候土藏手入いたし借庫といたし手輕に上陸場取設荷物改所の儀も在來内國改所を兼用に取計申候

取扱規則取設け申候

一夷港にて外務取扱候者新潟と異にいたし候ては品々不都合に付佐州えも掛合知事えも面談新潟より出張を希望候間追て體裁相立候迄權大屬以下兩人通辯壹人出役佐州縣役擘と打交奉職罷在候尤新潟の地永々相離候ては事情も疎く相成用辨不相成候間百日交代爲致申候

一開港御入用金の儀諸色騰貴の場所にて去春中何分目當無之凡二十萬兩と取極内拾貳萬兩會計官より受取候處永世開港の見据無之候間精々省略條約面を持し候迄にいたし營繕其外運上所諸入費仕拂備馬買上けに至迄一式凡四萬兩内にて仕上け殘八萬兩餘(脱カ)本地大參事え引繼申候

一ホテル無之彼か旅客差支の段度々申立休泊手數も相掛素より官にて可引受儀には無之市中の者說諭および一ケ所取極申候追て相應の場所貸渡候積に候

都て官費には不致候

一拾里部内遊歩規程山川は地理に寄取極候段約書に有之候得共未た公使え談判治定に無之差向此方限り區別取極申候岡士へも申入置候

此書類別に有之候

一英語教師フロヲン御雇に相成申候是は追て時機見計相斷候見込に有之候

一開港都ての手順御體裁役擘盡力にて去巳九月中迄に相整申候當今御不體裁の儀無之候都て事務取扱方等神奈川の振合に准取扱申候

一外國人埋葬地壹區新潟地内入會寄居村え取設け申候

一貿易場の儀は土地大關係の儀にて水原合併巳來大參事兼任をも被仰付其巳前より市政民政をも兼務租税又は仲税と唱へ御收納筋其外改正人民撫育方公事吟味物裁斷等取扱申候

此取扱方多數にて一々は難申上候

一右の外内外務十三ケ月取扱府縣局と度々御改正其度々意外の煩勞多端に有之數百件の事務一々は難申上尚慶々御尋に隨御答可申上候

右大略開港相立候手續申上候

正月　　水野外務少丞

一九一　七月十五日（八月十一日）　英吉利公使ヨリ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則宛

新潟、佐渡夷港開港ニ關スル諸施設ノ整備並ニ新潟通商司ノ通商妨害禁止方等要請ノ件

附屬書　一、二月九日英吉利領事代理（新潟在勤）ヨリ同國公使宛書翰寫

慶應三年ノ「新潟佐州夷港外國人居留取極」ノ履行狀況ヲ報告シ意見上申ノ件

二、二月九日英吉利領事代理（新潟在勤）ノ新潟港施設整備方ニ關スル意見書寫

三、五月十三日英吉利領事代理（新潟在勤）ヨリ同國公使宛書翰寫

新潟港ノ貨物船運送設備不充分ナルニ付東京政府ヨリ新潟縣ヘ右整備方指令アル樣取計ラレ度旨上申ノ件

Yedo, August 11, 1870.

The Undersigned has frequently represented to Their Excellencies that, in view of the unwillingness or the inability of the local Authorities to carry out upon the spot the arrangements which are required under the Agreement made with the Foreign Representatives in November 1869 (1868) for the settlement of foreigners at Niigata and Ebisuminato, it becomes necessary that the Government at Yedo should give their attention to this subject.

By the above mentioned Agreement the Japanese Government engaged to construct at Ebisuminato proper warehouse accommodation in accordance with the requirements of the trade, to construct lighters for the landing and shipping of merchandise at Niigata and Ebisuminato and for the safe conveyance of merchandise between these two places; to provide steam communication between Niigata

and Ebisuminato; to open a passage into the lake at the back of Ebisuminato; to erect a lighthouse at Niigata; to mark and buoy the bar, and to provide bonded warehouses at Niigata.

Of these eight stipulations the last alone has been fulfilled. Of the remaining seven, five were rendered necessary by the late Government pressing Ebisuminato upon the Foreign Representatives as a substitute for the absence of a harbour at Niigata, and because they objected to give foreign vessels access to the harbour of Nanao. The despatch of the Foreign Representatives of the 4th November 1867 shows that they accepted Ebisuminato only on the promise of the fulfilment of the above conditions, and also subject to further consideration, if experience should prove that these arrangements failed to supply "the convenient Port on the West coast of Nipon" which is stipulated for in the Treaties.

The Undersigned is aware that the question has since been raised whether, instead of incurring expense at Ebisuminato and in connecting that place with Niigata, it would not be better to endeavour to construct a harbour at the latter place by clearing the bar to a depth that would enable vessls to enter the River. To this date, however, the Government have not yet taken the preliminary step of despatching a competent Engineer to the spot to make the necessary surveys, without which it is impossible to determine whether this is a practicable scheme.

To make the necessary surveys and calculations the scientific skill, both of a Civil Engineer and of a nautical surveyor are requisite, and the Undersigned has therefore frequently urged upon Their Excellencies that the Government should despatch to Niigata, during the present summer months, the Government Engineer, Mr. Brunton, in the Government vessel "Thabor", the Commander of which, Captain Brome, is competent to make a survey of the bar.

In addition to this question, Her Majesty's Consul at Niigata has reported to the Undersigned that the local Authorities still decline to fulfil such of the aforesaid stipulations as relate to lighters. In November of last year, nearly a year after the port

had been opened, this simple want had not been supplied and the Foreign Consuls then agreed to a temporary arrangement in order to afford the authorities a further delay of six months to enable them to carry out the terms of the above mentioned Agreement of 1867. Those six months expired in May last and the Chikenji has only constructed two lighters which are not sufficient to discharge the cargo of a single ship. The Consul complains of the serious obstruction caused to Trade by this neglect, and states that, unless the Yedo Government will issue stringent orders to the Authorities at Niigata to carry out the provisions of the Agreement of 1867, there is little hope of these obstructions being removed.

The difficulties occasioned by the illegal proceedings of the local Government, the Tsushoshi and the Shosha, having for their object the creation of a great monopoly which would utterly stifle, instead of encouraging trade have so frequently been brought to the notice of Their Excellencies by the Undersigned that further reference thereto is not needed in this Despatch. In view, however, of these three important questions, namely, the said illegal proceedings of the local Authorities, the Tsushoshi and Shosha, the harbour question combined with the Ebisuminato arrangements, and the neglect of the authorities in providing cargo boats at Niigata, the Undersigned urges the Government to send to Niigata an officer holding powers sufficient to enable him to deal effectually with all these questions and to correct the deficiencies of the local Authorities. The Undersigned as Their Excellenceies are aware intends shortly to visit Niigata himself and it is necessary that when there he should be met by a competent functionary and not only by those local officers of whose conduct he has had so often to complain.

In order that Their Excellencies may clearly understand the details of the question as to whether the arrangements for Ebisuminato should be carried out or a harbour provided at Niigata, and also as to the failure of the Authorities to supply cargo boats, the Undersigned forwards to them copies of two Despatches from Mr. Troup, Her Meiesty's Acting

consul at Niigata, severally dated the 18th March and 11th June, and also a copy of a Memorandum by Mr.Troup on the harbour question, a copy of which, he states in his Despatch of the 18th March, he had supplied to the Chikenji.

The Undersigned avails himself of this opportunity of renewing to Their Excellencies the assurance of his distinguished consideration.

HARRY S. PARKES,
Her Majesty's Envoy Extraordinary
and Minister Plenipotentiary.

Their Excellencies
Sawa Jusani Kyowara Noriyoshi,
Terashima Jushii Fujiwara Munenori,
etc., etc., etc.

註一、本文書末文ニ三月十八日附ノ英吉利領事代理（新潟在勤）ヨリ同國公使宛書簡寫ヲ送致スル旨記載シテアルモ實際差越シタルモノハ三月十日附ノモノ即附屬書一ナリ

（附屬書一）

Niigata, 10. March, 1870.

Sir,

A new Governor having, as I lately had the honor to report to you, taken charge of the affairs of this Port, I have felt it my duty to represent to him the necessity of undertaking the carrying out of the Arrangements for Foreign Trade at this Port, more particuarly such as affect the shipping, which are still in abeyance. As however, he informs me that some of the most important of these are now the subject of reference to the Yedo Government, and as, moreover, I have little hope of anything effectual being done here on the spot, unless under special instructions from the Central Government, I deem it will not be unacceptable to you to have laid before you a statement of what has actually been done hitherto towards carrying these arrangements into effect. My last despatch to you on this subject is that of the 22nd September, 1869, No. 2, in which reference is made more particularly to the arrangements relating to Ebisu-Minato. In my despatch No. 2 of the 25. January, also, some references will be found to the state of the harbor, and other matters to which I may now allude; but at the risk of repeating some of the details which I may have already laid before you, I shall here refer seriatim to the articles of the "Arrangements for the Settlement of Foreigners at Niigata and Ebisu-Minato", concluded in November, 1867, stating what has been done under each:—

(Art. I.) I am informed that certain godowns previously existing at Ebisu-Minato have been put in a state of repair sufficient to receive goods, but I understand this to be a temporary measure. No warehouse accommodation has been specially constructed at that place for storing foreign goods.

(Art. II.) The want of efficient lighters here at Niigata for the landing and shipping of merchandise last year was a fruitful source of delay, annoyance and expense to foreign merchants. An arrangement was made between the Foreign Consuls and the Japanese Authorites in November, however, whereby the latter bound themselves to have a sufficient number of proper lighters constructed within, at most, six months from that time, and I am now assured that such part of these as are still wanting are in course of construction. I am not aware of any lighters having been constructed for Ebisu-Minato, and certainly no proper sea-going lighters are to be had for the conveyance of merchandise between the two places. Such goods as have been brought from Ebisu-Minato to Niigata have come in such large boats as could be had, but at enormous risk. The charges paid for such boats have been exorbitant.

(Art. III.) No steamers have yet been provided to run between Ebisu-Minato and Niigata. This matter I am now informed by the Authorities here, has been referred to the consideration of the Yedo Government.

(Art. IV.) is still in abeyance.

(Art. V.) Two light-towers were erected, one on each side of the entrance to the River, in the early part of last summer; but it now appears that it is only since about the beginning of December that the lighting apparatus for one of them, that on the west side, was got into working order, and only since that time that a light has been regularly shown in

it. The small house attached to the one on the eastern side of the River has been blown down, and the projected lighting of it (which never appears to have been in operation) has, for the present, been abandoned as impracticable. I am informed that difficulties have been experienced in the way of placing marks and buoys on the bar, on account of the changes which cccur in the channel of the River. In place of these, the temporary expedient was adopted last year of sending out a boat to show where the the channel lay, but this would not appear to be a sufficient substitute for the marks and buoys.

(Art. VI.) has been fairly well carried out.

It will thus be seen that the principal arrangements which are still in abeyance are thcse which have reference to Ebisu-Minato and the Communication with that harbor, and the lighting and buoying of the entrance to the River here. These are just the points which more particularly affect the shipping, and the frequent accidents which occurred here last year indicate how necessary it is that the entrance to the River should be properly lighted and marked.

One at least of the dangerous boat accidents, (happily not a fatal one,) which cccurred, I have little hesitation in attributing to the want of harbor lights, and probably also the grounding of a steamer entering the anchorage at night.

Respecting the arrangements which have reference to Ebisu-Minato, it will be in your recollection that I mentioned in my despatch of the 22nd September that it had been in the contemplation of the Japanese Authorities to propcse as a substitute for these arrangements, the improvement of the present harbor of Niigata, but that this project had been afterwards abandoned on the score of the expense. Nothing has, however, since that time been done towards carrying out the original arrangements, and as it is without doubt very questionable whether even these original arrangements would be found at all practicable unless the entrance to the River here were more or less improved, so as to facilitate the crossing of the bar by the steamers proposed to be put on the passage between Ebisu-Minato and this place. it appears desirable that the question between these two schemes should not be settled unless after a due investigation and appreciation of the facts of the case. I have accordingly drawn up a memorandum in which I have endeavoured to state the relative advantages of the two projects. As far as regards the interests of Trade, almost every consideration points towards the advantage of the concentration of such efforts as are made or expenses incurred with the object of facilitating Trade here, on the improvement of the one harbor of Niigata, even as regards the immediate questin of expense, it is problematical which of the two schemes would be the cheaper one. All I have taken the liberty therefore to recommend in the enclosed memorandum is, that a competent European Engineer, acquainted with harbor works, should visit this place as soon as possible, examine the locality, and report upon these questions. It appears to me necessary that such a step should at least be taken by the Japanese Government, were it for no other reason than that of assuring themselves against a large expenditure being incurred on a scheme which might, after all, turn out to be impracticable. The services of such an engineer would also be invaluable in the matter of lighting and marking properly, by some temporary expedient, the entrance to the River, until permanent arrangments were made.

I may add that I have forwarded a copy of the enclosed Memorandum to the Governor of this place, who is favorable to some project for deepening the River, and from whom a representation on this matter will be made to the Yedo Government. I trust you will see fit to bring the matter of these arrangements under the notice of the Mikado's Government, with the view of something practical being done without further delay, as the matter is one which vitally affects this Port, and which, I will be permitted to say, has not hitherto received that attention from the Government which it demands.

I have etc.,

(Signed) J. TROUP.

Sir Harry S. Parkes, K. C. B.,
etc., etc., etc.

Considerations on the arrangements for supplying the want of a harbor at Niigata

(1) Niigata appears to have been well selected as the seat of Foreign Trade on the North West Coast, for every reason, with the exception that there is no sufficient harbor for Foreign Ships. To supply the deficiencies of the harbor an engagement was made by the Japanese Government whereby the harbor of Ebisu-Minato, in Sado, might be used as supplementary to that of Niigata, and arrangements were to be made by the Government for the carrying of merchandise by means of steamers and lighters from the former to the latter place. These arrangements have, however, not yet been carried out; and in place of them another project has been mooted, namely the improvement of the harbor of Niigata itself, so as to admit of foreign ships coming into the River. The development, almost the existence of Niigata as an Open Port depends on some arrangement being carried out without delay to supply the deficiencies of the harbor; but, as neither of the above proposals have yet been carried into effect, it appears desirable to compare the relative advantages of the two schemes.

(2) The carrying out of the scheme for using Ebisu-Minato as the supplementary harbor of Niigata would involve commercial houses in the expenses of having an agent at Ebisu-Minato for the purpose of discharging and shipping cargo, with all the concomitant expenses either of a permanent agency there, or of sending an agent there from time to time as occasion required. There would be the additional expenses and risk of landing the cargo, at Ebisu-Minato and shipping it again in sea-going lighters or steamers for Niigata; and during winter there would be no possibility of carrying the cargo between the two places except at certain times when the weather was favorable and the bar at Niigata smooth. It is not probable, moreover, that any Insurance Company would take the risk of goods carried between the two places in winter, even in steamers.

The same scheme would involve on the Government the expenses of providing a supply of lighters for landing goods at Ebisu-Minato; of providing large, covered, sea-going lighters, and, at least two steamers, to go between the two places, as well as of keeping up the same; of erecting insurable Bonded Warehouses at Ebisu-Minato, and constructing a landing place for merchandise, sheds, a Custom-House, and officers' permanent quarters, and of keeping up a separate staff of Custom-House Officers there. In order to ensure the possibility of ships being always able to discharge and take in cargo, also, at Ebisu-Minato, it has been shown by the experience of the past winter that it would be necessary to carry out the provision of Article V of the Niigata "arrangements" for opening a passage into the lake at the back of the town. Probably also something would have to be done to the mouth of the River at Niigata before even steamers of small draught could safely cross the bar.

The capital which would be required to set and keep all these arrangements a-going until they should pay themselves, it is difficult here to estimate, but it would evidently amount to a very large sum of money.

On the supposition that the harbor of Niigata were improved so as to admit of foreign ships coming into the River, the result to the Foreign merchant would be not only that he would be relieved of the additional expense just mentioned which he would be involved in were Ebisu-Minato used as a supplementary harbor, but, both in summer and in winter, he would have very much less lighter hire to pay for the discharge and shipping of cargo than at present he has at Niigata itself, besides getting cheaper Insurance and boat risk, which latter is now excluded by Insurance Companies; ships could calculate on being able to discharge and load in all weathers, throughout the whole year, and thus the Foreign merchant would on the one hand be able to supply the Japanese merchant with foreign goods on more favorable terms, and on the other would be able to offer him a better price for the produce of the Country.

It would therefore appear to be a very fair question to determine how far the sum which would be

required for the carrying out of the former scheme would go towards carrying out the latter, so much more advantageous, one, or what additional expense would be required to carry out the latter. But in making this estimate it would appear proper to take into account the advantage which would accrue to the Japanese Shipping now using the harbor of Niigata, were an improved entrance to the River constructed. While at present junks which would otherwise come straight to Niigata, during the winter half of the year, either have to go to other harbors along the coast or lie about Sado until the bar at Niigata is smooth, — they would then be able in ordinary circumstances to enter the River as during the calmer seasons of the year. If therefore the scheme for improving the entrance to the River were carried out, it would appear fair to charge a small tonnage due upon junks; and considering the advantages which would be conferred upon foreign vessels, it would appear reasonable to charge them with such in the same way. A reason for this charge would obviously then exist here which does not do so at the other Open Ports, —which are all natural harbors, little improved by art. Another probable advantage resulting from the deepening of the mouth of the River at Niigata but not concerning the shipping, would be that the quicker outlet which would thus be afforded to the water, would have some effect towards mitigating the effects of the inundations from the River which so frequently devastate the rice-crops.

(3) What would appear therefore to be the practical method to pursue in this case is, for the Japanese Government to have all obtainable information collected regarding the depth of the River here, the changes which occur in its bed, its currents, etc. etc., from seamen, pilots, or others acquainted with the same; to submit this information to a competent European engineer who should here on the spot examine the locality personally, and make an estimate of the probable cost of one or more schemes for improving this harbor, with the view of allowing ships to enter the River at all seasons of the year.

(4) Should it be deemed inexpedient to undertake

the carrying out of any of such schemes, then the original arrangement for using the harbor of Ebisu-Minato, as supplementary to that of Niigata, should be at once proceeded with, with the view of having the same as far as possible in working order by the month of October of the present year.

(Signed) J. TROUP.

Niigata, 10th March, 1870.

(英國領事)

Copy. British Consulate,
Niigata, 11th June, 1870.

Sir,

I regret to be under the necessity of referring to you the matter of the continued non-fulfilment of the local Government here of the stipulation in the "arrangements for the settlement of Foreigners at "Niigata and Ebisu Minato," of 1867, which has reference to cargo-boats.

In my despatch No. 6 of the 10th March, I had the honour to address you with regard to these arrangements generally, and I then mentioned that an arrangement was made between the Foreign Consuls and the Japanese Authorities in November last, whereby the latter bound themselves to have a sufficient number of proper lighters constructed within, at most, six months from that time. I now inclose a copy of this arrangement of November last, in the form in which it was finally accepted by the Foreign Consuls and Mr. Midzuno Gwaimushojo, in order to complete the information which it seems desirable that I should lay before you now on this matter. The period of this temporary arrangement, which was accepted by the Consuls only to give the Authorities of this Port time to construct efficient lighters, having now expired, I drew the attention of the Governor to this subject on the 1st instant, and in the replies which I received to my inquiries I was informed that two cargo-boats had been constructed in conformity with the agreement of 1867. As these, however, were not sufficient to meet the wants of the Port, a proposition was made by the Governor in effect to cancel the provision of Clause 2 of the agreement of 1867, and in place of it to institute an arrangement for supplying, through two

agents appointed by the Government, such boats as at present lie in the river here and at the neighbouring villages, for the landing and shipping of the cargoes of foreign ships. On consultation with the Acting Consul of North Germany, and the Vice Consul of Holland, I found that they quite agreed with me that it was not competent for the Consular Authorities here to set aside the agreement of 1867 and accept such a proposition as that now made by the Governor. It further would appear that the proposition is otherwise objectionable, if not totally impracticable. The existing boats in the River are of too slight construction and too small, as a rule, for use as lighters for foreign cargo. Moreover, the time when large numbers of them would be required is just the season of the year when the owners of them are most likely themselves to want them. The result of this would probably be either that the boats would be procured by a species of coercion, or that Foreigners would be unable to get them at all. In the former case a subdued ill-feeling towards Foreigners could not but be the result, and in the latter case the business of the Port could not go on. At such times as the existing boats are really disposable, there is nothing to prevent Foreign merchants from hiring them direct, should they want them,—provided the boat-owners were informed that they were at liberty to hire out their boats to Foreigners by private arrangement. The enhanced charges also (which, I need hardly say, are out of proportion to the current prices of labor etc. here,) now asked for boat-hire under this new proposition, are so high that merchandise brought here can hardly bear such charges in addition to the others which have to be paid on it.

I have therefore the honour to inclose copy of the reply which I addressed to the Governor regarding this proposal. I regret to have to trouble you with this matter, but I am satisfied that unless intsructions are given from the Yedo Government to the Authorities here to comply with the agreement of 1867, and prepare a sufficient number of efficient lighters, further efforts on my part would now be ineffectual and too late.

I may mention, as bearing on this matter, that the Foreign Shipping Trade of this Port has this year, up to this date, shown a considerable increase over that for the same period last year. Exclusive of one ship which was wrecked in the attempt to make this Port, there have this year arrived here, and in Ebisu-Minato, 6 British, 3 French, 1 American, 1 North German, 1 Dutch,—in all 12 vessels,—in comparison with 4 vessels for the same period last year, and I see no reason why the same proportion, at the least, should not hold for the remainder of the season.

Under the above circumstances therefore I trust that you will consider this matter of sufficient importance to bring to the notice of the Ministry for Foreign Affairs.

I have etc.,

(Signed) J. TROUP.

Sir Harry S. Parkes, K. C. B.,

etc., etc., etc.

(右英文和譯文)

此書簡の趣意新潟え相達置候旨萬難少條申聞候事

以手紙致啓上候然千八百六十九年第十一月各國公使と取結候新潟兵港外國人居留規則同所役人施行不致又は施行可致を承知無之事に依て拙者より度々閣下え申立今般東京政府にて右事件可致注意場合に相成候右規則を以交易の入用に準し夷港には相當の倉を建築し新潟夷兩港に於て大切に荷上げ又は本船え運送のため夷港と新潟え往來する荷物船を差置又兩港の間に蒸氣船を差置夷港裡手の湖水に舟路を開き新潟に燈明臺を建築し川口の沙嶺え浮標を建築し於新潟貸倉を設候樣右規則に依て貴政府え約束いたし候右八ヶ條の內未件一ヶ條施行いたし候其他七ヶ條の內五ヶ條は薦幕府新潟には港無之七尾港え入津の儀許容無之に付夷港を用ひ候樣强て御勸め被成候に付右五ヶ條を約束いたし候各國公使千八百六十七年第十一月四日運印を以夷港を受候は右箇條を致施行候廉を以受候事にて右箇條施行不致候はゝ受不申又は右條約の港西海岸相當の港に相成不申候はゝ其節に至り再考可致事に有之候且又新潟夷港運送便利のため雜費かゝり候よりは新潟の方に於て通船相成候樣川浚いたし候方可然抑申論も有之候得共右は通船相成候や不相成の所

は測量に熟し候者差遣測量不致候ては不相成候處貴政府にては今以測量人差送無之候將又測量算用のため建築方又は船の測量共入用に御坐候間當夏中貴政府建築方ブロントン氏貴國テーブル船に爲乘組御遣被成候樣閣下え度々御勸申候尤右船將ブロントン氏川口致測量繪圖を取候事出來申候且又前文規則荷物船の箇條彌施行不致旨岡士より申立候昨年十一月迄開港より已に一年に相成候處手輕の事すら今以相調不申千八百六十七年の規則を取行はせんかため各國岡士假の規則を相立六ケ月猶豫いたし候此六ケ月は去る第五月にて終り候得共知縣事は僅二艘の荷船相拵申候右にては大船一艘の荷物を荷上け致し候事も難相成候右樣等閑の所置交易上に大に響き候間貴政府より千八百六十七年の條約を施行いたし候樣新潟縣の官員え嚴敷下命無之ては此妨は相止不申候同縣の役人通商司商社は交易を盛に可致筈の處大なる株を設け却て交易を消滅する不法の所置有之候へ共右は度々申入置候事故別段不申入候則三ケ條の大事件一は神奈川（ママ）通商司商社の不可行法律を犯候事二は夷港規則と新潟港の事三は新潟におゐて荷物船不備事右三大事件有之候間貴政府新潟え全權の士官を遣し右事件を相當に所置爲致

同縣の役人不行屆の事共改革いたし候樣押て御賴申入候閣下御存の通拙者近日中自身にて新潟え可罷越存候依て每度訴置候役人而已にては不都合に候間相當なる士官え面會いたし度存候夷港と新潟の間運送便利の規則を行ひ候や又新潟にて港を拵候や又は荷物船不拵事右件々委細御了解のため新潟滯留我國副岡士ツルツプ氏三月十日五月（六カ）十一日附の二通且同人港の儀に付認候覺書相添へ別紙差進申候此覺書三月十日附の書簡に申越候通知縣事えも申入候事に御坐候右の趣可得御意如此御坐候以上

庚午七月十五日

大貌利太尼亞特派全權公使

ハルリーパークス

澤從三位清原宣嘉

閣下

寺嶋從四位藤原宗則

（右附屬書一和譯文）

千八百七十年第三月十日新潟

余此程足下に報せし如く新鎭臺當港の事務を引受けしに付當港外國貿易に付ての約書面就中未た其儘打捨ある船積に關る條を施行すへき事の肝要なるを右鎭臺に申立つる事余が職掌たりと思へり然るに右ケ條の內最も肝要なる事は江戶政府に申立べき旨を鎭臺余に告げたり政府より別段の命令なければ恐らく當地限りにて其事行はれ難かるへし故に是迄右約書に據り眞に施行せし條々を足下に報する事足下に於ても悅はる〳〵へしと思ふ此一件に付足下に送りし千八百六十九年第九月廿二日附第二號の余が書簡に夷港に關する事に付尙巨細に揭載せり第一月廿五日附第二號の余が書簡にも港の形勢及ひ今玆に揭くる他の事を記載せり余既に足下に報せし條々の內千八百六十七年第九月（ママ）中に取結たる新潟及ひ夷港にて外國人居留地約書の箇條を逐て玆に告述す但し右箇條中既に施行せし廉も揭るなり

第一箇條は先前夷港に在る納屋を修覆し荷物を藏るに差支なき旨を聞たり然るに之は一時の處置なるへし外國の荷物を藏るため其地に別段建造せし土藏なし

第二箇條は昨年中新潟に商物積卸すための荷船缺乏なるより諸事運びあしく外國商民難澁し且雜費掛りたり第九月（ママ）中外國コンシュルと日本長官と約を取結ひたり其約書中に日本長官にて其時より永くとも六ケ月の內に至當の荷船を充分に建築すへきを契約せり右荷船は當今建築中なり夷港の爲荷船を建築したる哉知らさる也新潟と夷港の間に商物を運送するに適宜の荷船なきは慥なるへし夷港より新潟に運送せし荷物は同所にて得へき所の大舟にて來着せり然るに其危害甚し且其船賃法外なりし

第三箇條は夷港と新潟との間に往返する蒸氣船未たなし此一件は江戶政府の勘考に任せ置きし旨を當地の長官より聞たり

第四ケ條は未た其儘に打捨ある也

第五箇條は燈明臺二ケ所築造せり右は昨夏の初より河の入口の兩側にあり然るに西方に在る燈明臺一ケ所の器械整ひしは第十二月初旬の頃にして漸く其以來右燈明臺に正しく燈を照されたり河の東手に在る燈明臺に附屬する小家吹倒され燈を照す事出來さるものとし其を廢止せり但し右は曾て燈を照せし事なき樣に見ゆ河底凸凹にして深淺變動あるに據り河口の沙線に標及ひ浮標を置く事難きを經驗せる旨を聞きたり其代りに昨年中河底の凸凹深淺を差示さんため小舟をさし出し置く假の仕法を設けられたれとも是は標及浮標の代りになるとは思はれさるべし

第六ケ條は適宜に施行せり

尙其儘に打捨たる肝要の取極は夷港に關する事にして其港との通路及ひ當地河の入口に燈を照し及ひ浮標を置く事なるへし右は船積に重に關る廉々にして昨年中當地にて不慮の事屢ありたれば河の入口に燈を照し標を置く事實に緊要なるへしある舟不慮の危害ありし其一は（天幸にして命に拘はらさりし）港に燈明臺のなき事に歸し且又夜中碇泊場に入津する蒸氣船恐らく洲の上に乘上げしにあるへし夷港に關する取極に付ては余第九月廿二日附書簡を以て右取極の代りに新潟方今の港を改革せんとする日本長官の存意たりしを足下に報せしことを想像あるへし然るに其後出費掛るに據り右企を廢止せり其後元來の約書面を施行するに付更に處置なかりし夷港と當地の間に往返せんとする蒸氣船港口の沙線を渡るに便ならしめんため當地の河口に多少の改革なけれは此元來の約書面迚も全く施行する哉否實に知れ難し

右兩策中の論は此一件の事實を篤と吟味し其益あるを知るにあらされば繼らざる樣に見ゆ故に余覺書を認め其内に右兩策の益あることを述たり貿易に付ては當地の貿易に便ならしめんとの主意にて新潟の一港を改革せんと勉勵し或は

入費を多分掛くる時は必らず夫丈の益あるへし何れも入費の論なれども右兩策の内何れか下直なる哉決し難し依て別紙覺書を以て勸むるは港の普請に熟練せる歐羅巴の築造方可成丈速に當地に來り地勢を探索し夫を報告すへき事也日本政府にて必らす右樣の所置を爲す事肝要なりと思ふ右は必竟行はれ難ければなるべき策を建て政府莫大の入費の掛るを防くの外他の術なし右築造方の職は永續の取極ある迚一時の所置を以て河の入口に正しく燈を照し及ひ標を置く事缺べからさるもの也

余別紙覺書の寫を當地の鎭臺にさし出たり鎭臺河をさらゆる企に同意し此一件を江戸政府に同人より申立べし此事は當港に關る緊要なる一事なれば此後遲滯なく行はれる樣右取極を朝廷に報告する事足下におゐて至當と思はれん事と信す此一件に付是迄政府の注意を得さりしを告く

セ、ツループ手記

（右附屬書三和譯文）

以手紙致啓上候然は新潟外國人居留地并夷港の事に付千八百六十七年約書中荷物運送船箇條の趣意を當地の官府にて遵守せざる趣今閣下へ報するは歎息の至存候右約書の義は既に第三月十日附六號の書簡を以て都て閣下に報し置其折同書中に申述候通去年第十一月中日本長官と外國コンシュルと相議し日本長官は其頃より六ヶ月の内に相應の荷船若干を可取設旨約束被致候事に有之候右第十一月取結候別紙約書の寫拜呈致候間御一覽可被下候尤右約書は水野外務少丞殿并に外國コンシュル今拙者の閣下に報知する趣意を施行せんため雙方同意決定致候ものに有之候右六ヶ月の期限は唯荷船を建造する趣意のみにて外國コンシュル承諾せしに今既に其期限は經過せし也故に當月一日此事を知縣事に申入候處其返答に右千八百六十七年の約書に從ひ二艘の荷船建造相成候趣に有之候乍去二艘の船にては迚も當港の要用を辨するに足らざれば知縣事右千八百六十七年の約書第二類の旨意を廢し其代りに方今外國船の荷物積下しのため當港の河口および近傍の村落に浮め在る如き船を官府より命する代人二員の手にて設けしめ之を備置へき約を結ばん事を望まれたり依之拙者獨逸北部聯邦のアクチングコンシュル并に和蘭ワイスコンシュルと相談致候處同人等に於ても千八百六十年（七歟カ）の約書を廢し右知縣事より相談有之候如き新法を了承するはコンシュルの權にあらさる旨全く拙者と同意に有之候加之右新法は同意遵從すへきものにあらす假令同意せしとも迚も行はれさる事に可有之存候方今河口に在る船は其造り甚手薄なる上形も小なれば外國人の荷船には適合致間敷其上一年の内にて外國人の多分其船を要する節は其持主も亦其船を自用に要する時なり是を以て觀れば外國人に强て其船を設けん事を迫り終に壹艘も得難きに至らしむるなるへし右の趣を强て迫るは外國人に對し好意の處置ならされは行ふへき事にあらす又終に壹艘も得難きに至らは當港にて商業を營み難からん右船の義は相對にて其船を外國人に貸渡し不苦旨其持主に兼て達し置候へは其船の差支さる節は要用の時々外國人より直に借受る共決て差支無之義と存候且此新法の船賃は甚高價にて實に當港普通の諸賃錢の類にあらす當港に持來る商物の代價には既に他の諸入費を懸け有之候處其上猶右船賃を懸候事迚も出來さる義に御座候附ては拙者より此新法の義に付知縣事へ差出候別紙返書貴覽に備申候此一件に付閣下を煩はす事不本意候得共東京の政府より當地の長官へ千八百六十七年の約旨を遵守し荷船十分の數を設くへき旨命令無之ては迚も行はれ不申樣存候間閣下を煩候外國の貨物商賣のため當港へ入

津する船數去年此頃迄に比すれば當年は今日迄にて大に增加致候即ち當港に來る積りにて途中破船致候船を除き當港幷に夷港に入津せし船は英六艘佛三艘米一艘北獨逸一艘蘭一艘都合十二艘に有之候然るに昨年は此頃迄にて僅に四艘のみに有之候尤當年此後の處にても右同樣の比例に可有之存候右は荷船の約書一件に關係の事と存し候得は閣下に報告致置候右申述候事情につき定て閣下にも御同意外務卿等へ此一件御申立可被下存候以上

千八百七十年第六月十一日

新潟英國コンシュル所　　セームス、ツルーブ手記

ハルリー、エス、パークス、ケ、シ、ビ閣下

註二、本附屬書ノ附屬書見當ラス

一九二　八月八日（九月三日）外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ英吉利公使宛

新潟、佐渡夷港開港ニ關スル諸施設並ニ新潟通商司引揚等ニ就テノ回答ノ件

午八月八日達ス

我七月十五日附の御書簡を以新潟規則佐州夷港其外通商司幷新潟運送船川口測量等の義に付同所在留貴國岡士よりの書翰御添件々御申越の趣致承知候右の內運送船等の儀は既新潟縣知事平松從四位一同御面會の節御談の次第も有之同人彼地着の上岡士打合不都合無之樣可取計蒸氣船の儀は同所へ相廻し候分當時横須賀表に於て組立中に付出來次第早々差廻し可申候通商司の儀は引揚候積にて大藏省より中島通商正出張いたし候儀に有之新潟官員規則面施行不致との儀は條約面の內最早疾落成の分も有之其餘佐州夷港貸庫碇泊所等場所治定不致ケ所又は燈明臺等は假に取設聊も無差支候得共尙御申越の趣を以平松從四位へ申達置候川口幷夷港等測量の儀は建築方フラントン氏我テーフル船を以差遣候積治定いたし候新潟官員不行屆に付全權のもの差遣改革可致且閣下御出向の節相當なる官員へ御面會被成度趣に候得共其地方官知事にて可及御談判候に付此節別段官員不差遣諸件等閑なく施行候樣是又平松從四位え得と申諭差遣候間左樣御承知可有之候右廉々及回答候右可得御意如此御坐候以上

明治三年庚午八月五日草

大輔

卿

英國公使姓名閣下

事項一二　外國人ノ密貿易取締ニ關スル件〔第二卷事項三九參照〕

一九三　三月七日（一八七〇年四月七日）

外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ英、佛、米、獨、西各公使宛
外務大丞等ヨリ各國領事宛

外國船不開港場立寄ノ際ノ取扱方回報ノ件

○英、佛、米、獨各公使宛

午三月七日達ス

英ハ我已十月廿七日
佛ハ我已十月七日（註十月廿七日カ）
米貴國六十九年十一月三十日
孛ハ貴國十一月三十日

附の貴簡落手然は不開港場おゐて密賣買取締向の義に付御懸合および候處閣下於て御承諾の上更に御布告に被及候趣委曲領承いたし候將我政府於て内地の取締方御承知被成度趣右は左の方法取設申候

第一外國貿易の爲め開かざる港え外國船渡來いたし候はゝ其地出張の我官員直に其船に赴き船名船主の名幷來意を訊問し困難の故にて着岸の趣にも候はゝ篤と眞僞を檢査し事實無相違上は相當に扶助致し遣し可申右の外は總て密商の企有之者と見据可申に付各所より其旨報知次第其船關係の公使又はコンシュル等え御懸合におよひ可申候

第二我國は四方環海にて小船碇泊の灣港甚多候得共前件取締向設備いたし置候は凡我國の大船常に多く寄泊可致場所に有之然に其他の海岸等え外國船の中渡來密商いたし候後又他港に於て同敷其擧におよひ今度被取押候時に當り前日無滯密商を遂け候を我政府にて差許し候辭柄といたし再ひ此擧におよひ候抔其罪を遁れんと申立候とも右は決て我政府於て許容せざる處なれば豫しめ玆に斷り置候

第三商用の爲めならす國用等にて政府にて外國船を雇ひ不開港場え往復せしめ候義は各國其先格も可有之義と存候間右樣の節は各港共其地に在る我官員より其國のコンシュルえ掛合の上雇入可申且我官員よりは此事を逐一我政府え進達可致候

右の通取締相立申候間回答旁及御報告度此段可得御意如此

御坐候以上

十一月七日草

大輔
卿　御兩名

英佛米孛公使閣下

○西班牙代理公使宛〔日附ハ三月七日ナリ〕

英、佛、米、獨各公使宛書翰ト同文意ニ付省略

○露（函館在勤）、墺、伊、蘭、白、丁、葡（横濱在勤）各領事宛

〔日附ハ三月七日、發信者ハ外務大丞等ナリ〕

英、佛、米、獨各公使宛書翰ト同文意ニ付省略

事項一三　浦上村等耶蘇教徒ニ對スル處置ニ關スル件〔第二卷事項四四、四五、四六參照〕

一九四　一月五日（一八七〇年二月五日）　外務省ヨリ太政官辨官宛

御預ノ浦上村耶蘇教徒取締ニ關スル諸藩ヘノ告示案廻附ノ件

附屬書　外務省ヨリ諸藩ヘノ告示案

御預ノ浦上村耶蘇教徒取締ニ關シテハ外國公使トノ應接趣意ニ相違セサル樣指令ノ件

浦上村移民の者共藩々にて區々相成候ては不都合に有之候間當省より直に藩々え別紙の通一兩日中に相達候心得に御座候依て此段御屆申上候以上

「午」（朱書）正月五日

辨官御中　　外務省

（附屬書）

「正月五日達ス」（朱書）

諸藩え告示案

長崎縣近傍浦上村の者共外國教師の密に勸誘するに迷ひ切支丹宗信仰いたし追々多人數におよひ漸不法の所爲有之により同縣え更に御下命有之右切支丹宗に迷ひ候者共を各藩え御分配相成候抑右に付ては是迄各國公使と文書の往復且應接も數回におよひ其趣意は彼よりは我政府にて今度專ら嚴酷の沙汰を以て宗徒を處置し妻子をも同樣移轉せしめ候ては一昨年來の約束に相違いたし寛宥の處分に無之左候ては全く外國一般信仰の教宗を侮辱するに近く互に宗旨の論に渉候樣云々申立彼我の見込大に相違いたし居外國の交際是より敗れ國家の御爲不容易大事をも可引興場合に立到候間我よりは事緒萬端切に辯解し且宗民共其儘難差置次第は他邦の教を信仰し我神明を侮辱し政府の命に背叛いたし官員に對し暴動の振舞および候事等一も許すへからす從來の法典に依て處置いたし候時は重き刑科にも可處の處兼て各國公使え切支丹宗の義に付ては約束の趣も有之候間御交際上に取格別の寛典を以刑外の處置を施し住居を移して幾重にも誨導說喩し尊上改善の道に遷らしめんとす尤無罪の妻子云々の義は是又我政府にては別段着意垂憐いたし一家別離の患なからしめんとする處にて舊來の國法を守り候時は右樣の義は無之此上藩々預り受候所にて其者相當の產業に就かしめ田廬を與へ艱苦の患なく活計不差支樣可爲致旨反覆說明いたし候處各公使於ても初て了解いたし候旨申立候間教喩方の儀は太政官より御布令の通一轍可相成候得共右應接の趣意は諸藩にても相違いたさゝる樣可被相心得候事

（附記）此告示案は政府へ一應申上候上外務省より早々諸藩へ相達度候左もなくは各國より探索の上苦情申出間敷も難計候事

註　二〇三參照

一九五　一月八日（二月八日）　外務大丞等ヨリ伊太利領事（横濱在勤）宛

浦上村耶蘇教徒處置ニ關スル各國公使ヘノ書翰等送付ノ件

附屬書　明治二年十二月二十七日外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則ヨリ伊太利公使宛書翰

別紙覺書送付ノ件

午正月八日達ス

貴國一月二十八日附外務卿宛の御書翰致披見候然は長崎近傍浦上村耶蘇宗信仰の徒所置振の義に付我客歲十一月晦日附書翰を以申入候已後何等も不申入候段云々御申越の趣致承知候右は貴國公使御不在に付不申進候得共御申越の趣も有之候に付是迄我外務卿より各國公使え相達候書翰の通猶本書にて添書とも六通差進候間委細は右にて御承知貴國公使へ御達有之度存候此段御報如斯御座候以上

明治三午年正月八日草　　外務大少丞連名

伊太利岡士

ロベッキ貴下

註一、本文書ニ「添書とも六通」トアルハ左記附屬書並ニ第二卷（第三册）六三二、六六九ト同文ノモノト認メラル

（附屬書）

午正月八日達ス但十二月廿七日附ニテ達ス別紙覺書共

以手紙致啓上候然は別紙覺書英佛米獨乙四ケ國公使え相達候間則入御覽候尤此覺書は我政府限にて普く我人民に布告致候義にも無之候間其邊御差含にて閣下より貴政府へ極内々御差出被下度候此段可得御意如斯御坐候以上

十二月廿七日　　大輔

伊太利公使　　卿

コーントデラツール閣下

註二、本附屬書ニ謂フ「別紙覺書」ハ第二卷（第三册）六八四附屬書ト同文ト認メラル

一九六　一月九日（二月九日）　英吉利公使館ニ於テ外務卿澤宣嘉、同大輔寺島宗則等ト英、佛、米、獨各公使トノ對話書

浦上村耶蘇教徒ニ關スル件

附屬書　一月九日英、佛、米、獨各公使ノ覺書寫

御預ノ耶蘇教徒ヲ歸鄉セシムレハ外國宣教師ノ外國人居留地外ノ布教ヲ取締ル旨ノ件

午正月十三日辨官へ出ス

午正月九日於横濱英公使館澤外務卿寺嶋外務大輔吉井彈正少弼英佛米獨四ケ國公使えの對話書

一此度御引移し相成候人員は何人程に候哉

一貳百人計りに有之候得とも右は凡その人數を申入候事に候

一十二月六日附の御書簡には百八十人程と有之候其後にも有之候哉右殘りの人數を御引移し相成候哉

一殘りの人數も移し候積に候所此程御談判の趣も有之候間先其儘差置御談判の模樣に寄所置可致積是も同所の取締向さへ行屆候得は改めて引移し候にも不及則其邊御談判致候事に候

一右貳百人は浦上村近邊に候哉又は外村に候哉

一浦上村立山鄉淵村の三ケ村に有之同所官員出立後は不存

候得とも立山鄉淵村は至て少人數に付頃日相殘り候ものは定て浦上村のもの而已と被存候

一御取締向と申儀は何故に候哉又教師は何と申名面にて何國の者に候哉且何の所業有之候哉悉く相伺度候

一教師の名面は不存候得共折々夜に入候得は忍んて浦上村え來り五ケ所有之候寺體の所え參り宗旨信仰の徒を集めて說法禮拜の式を教へ又浦上村の人民日曜日毎には教師の方え參り教を受候由尤寺は貳軒有之候得共英の方えは不參佛國の方え參り候則右は雙方通し合候始に候

一遊歩里程中に有之候場所え夜分忍んて教師の參り候と申は不審の事に候

一右は舊幕の節五に往來する事嚴禁に相成居候處一昨年一新已來内地の戰爭其外事務多端にて手を下す事不能打捨置候處最初は雙方夜分の往來致し居候處終には公然と壹間往來致し候樣に相成候

一外に被仰聞候事有之候哉都て委敷相伺度候

一右最初は去る辰六月頃浦上村の人民德平と申者耶蘇徒に有之候處改心いたし候旨同村庄屋え訴出候所右宗徒の者聞付け多勢にて德平歸路を待請及打擲德平は其場を逃去歸宅も致し得さる程の義にて右樣の事共屢々有之宗旨を信する者を黑組と唱へ信せさる者は白組と唱へ雙方無絶間混雜差起り候市中村々共宗徒の者とは絶交同樣の事に候且又教師の教には日本の神佛を信する時は必定罰有之と申教へ候故村内に在る弘法大師の堂を毀ち或は神前の鳥居も通行不致樣堅く禁止致し候趣に候

一外に教師の所業は無之哉右大師の堂を毀ち候節土地の役人も不存又政府にても御罰し方不被成候哉訴へ出候はゝ其當人は御罰し被成候事と存候

一右は三四人の事に無之日々櫛の齒を引かことくの訴にて中々罰し方も行屆かさる内遂に一同の事に相成候

一ケ樣の事にて罰せられ候事はいつ頃の事に候哉罰し候證據不相分候

一以前は嚴罰に有之候所兼て御約束の趣も有之候に付此程申入候通三千人程の人數何れも諸藩へ移し候迄にて決して苛酷の所置には無之尤輕罰に有之候

一弘法大師の堂を破り候節はいつ頃に候哉又訴出候節御罰し被成候哉

一一昨年六月頃の事に候訴出候節取調候處殊の外多人數に

有之一體惡業有之ものを取調候へは押隱し候が惣て人情に有之候處同宗の者は自訴致し候且又村中信仰の大師を傷け兼て納め置たる佛具等を打毀ち候樣の擧動有之候より終に議論を生し候又右宗徒の内壹人の賊あり是を召捕らんとすれは同宗の者是を救助して出さす既に此程申入候通宇和島の家來を切害致し候もの宗徒に入候所同宗の者の救助にて召捕候事も成り兼候故遂に政令不被行候間無據今度の取扱に及候事に御坐候

一村中一同の御所置被成候權有之候はゝ僅か壹人を御召捕相成候權可有之彼多人數にて保護候はゝ此方よりも多人數御さし出相成候はゝ御召捕可相成候

一宗徒の者多勢一致して竹鎗或は落し穴を堀り捕手の者を反つて捕らへんとする心組有之右等の事故多勢差出候節は不殘打殺申さねば壹人の賊も手に入不申候

一いつ頃の事に候哉何分御談判の趣難相分候

一一新に可相成際に有之候尤宗旨の惡きと申には無之候得共兎角信仰の徒は黨を結ひて政事に邪魔いたし惡業をなせる壹人を罰するにも衆人に及ひし故其徒に組する者も輕重の差は有之候へ共同しく罰に處し候はねは不相成候

一御一新後御多務と被仰候へ共二ヶ月後より既に右徒の御所置を御初め被成御談しの趣とは相違いたし候

一一昨年正月一新相成同月中旬長崎鎭臺には脫走いたし拙者は二月中旬同所え參り候其節は混雜極りなき所にて何分多人數の所置獨斷には行屆かたく四月に至り漸く右所置に取かゝり候事に候

一初め移民の義は閣下より御申立に相成候哉

一同所の事務取扱の邪魔に相成候間右所置振を政府へ相伺候事に候

一御一新にて切支丹宗に付嚴禁の制札を御揭け被成候は右長崎事件よりの事に候哉

一是は一新已前迚も同樣我國禁に候切支丹宗の義に付御談判有之候は二月の初大坂にての事に候

一爾後の規則を御望み有之候は如何の譯に候哉

一規則取極め方の義教師は日本人の方に來りて宗旨を不教樣日本人は教師の方に至りて宗教を不受候樣との二つに有之候尤我國人民えは此方より命令いたし可申候

一如何樣の振合に御止め被成候哉

一是は雙方の間に生する事故御相談の上にて取極め申度候

教師より宗旨を傳へ候證據有之候得は其國公使へ申達し又我國人民教を請候證跡有之候得は我方にても又相當の罰相與へ申度候

一右はいつれの場所に不限西洋の寺に候哉

一左樣に候

一教師日本人の家に至り宗旨の咄しも不致候樣との申付は出來難く候

一是は同家の者召呼相糺し其者宗旨の教を請候と申義申出候はゝ則其證に有之候

一佛教師居留地外へ出切支丹の說法幷禮拜等を傳へ候もの有之候證據判然に候得は國法を以て所置いたし可申候

乍去唯雜話中日本人より宗旨の義を質問候節及挨拶候位の義は致方無之又日本人より教師の方え參り候義を差留候義私方にては處置の致方無之候

右は佛國人丈けの事に候

一今般の義も御國人御所置無之内に御談判有之候はゝ格別最早御所置濟の上御申聞の段は遺憾に存候

一英惡業いたし候もの御罰し被成候は御尤とも存候得とも多勢のもの同樣の御處置に相成候義は承知致し兼候

一右は壹人丈けに無之取調候へは衆人自訴いたし中々罰し方も行屆不申總て日本の神佛をば不信神前の鳥居さへ通行不爲致且死去いたし候節埋葬方等百事相違いたし候故夫より屢々葛藤を生し遂に政事向に差障り候

一右宗旨の義に付喧嘩等有之候樣の義は不承候鳥居を通ると通らさるは則踏繪同樣の事に可有之候

一日本人民は年貢も納め且亂暴も致さゞれど切支丹を信し日本の神を信せさる故に今般の御處置と相聞へ候

一日本にては銘々氏神と尊稱する神あり是を信せすして切支丹を信し既に鳥居も不通位故遂には政府の命も尊奉せさる樣に成行候

一宗旨の事は扨置鳥居をも通行せさるは則神に背く者也神に背く者は則天皇に背くものなり

一佛國公使御申聞の趣は相分り候間我方の義も取極め置度我國人民切支丹を信仰致し候者は爾後も他所え移すとか何と歟取極め置貴國の方は教をなさゝる樣の御所置有之候との趣を承知致し度候

一孛私儀も佛公使同樣居留地外え出教をなせし者の證跡聽

と有之節は當人を査糾し相當の所置可致は當然に有之候左候節は此度の移民も本地え歸國爲致度候

米一右同樣に有之候得共浦上村人民御引移の上にて今日の御談判有之已後の規則相立候義は御同意致し難く候間移民御引戻の上にて御談判可致左樣無之ては規則難取設候

一引戻し候人民矢張朝命を不奉時は如何可有之哉

一其節は當人丈け御國法にて御罰し可被成候

一當人は勿論に候得共是迄の處妻子迄同樣に付則何れも當人に有之候

一罰には輕重可有之候得共何れも同樣の罰と申は御無理の事と存候

一譬へは壹人重罪のもの其徒に入是を罰せんとすれは宗徒のもの是を拒み援けて出さす左すれは罪に輕重はあれとも同しく罪人也今般の移民と申は刑典外にて尤輕罰にて移し候上にて輕重により差引いたし輕きは早くゆるすと申樣の事に候

一兎に角一旦御引移し相成候ては矢張輕重同し樣に相聞へ候當人改心致すとあれは速に御引戻し被成候哉

一政令を奉し候得は無論の事に候得共矢張命を奉せさる時は何と歟所置可致候

一左候はゝ不殘御取戻しの上にて已來教師の不參樣と御申越被成貴國にては寺え不參樣御命令有之可然候

一御國え滯留の外國人なと皆鳥居を通行いたさすと申者は無之候

一右宗徒の子供無心に鳥居を通行いたし候へは其親是を打擲いたし候

一左樣のものは其親を御罰し可被成候

一神を不信天命を不奉は則政令不行候

一此度の御處置は歐洲にては如何の御所置と可存取候

英一移民御引戻しの有無御治定次第爾後確定の御談判可致左樣無之候ては矢張御談判纏り不申候

一引戻し候迚もその者とも命を奉し候得は格別左も無之同樣命を不奉時は夫々所置および候節は又々苛酷の所置なとゝ御申越可有之哉難計候

一日本人民の御所置に付御障けいたし候事は無之候

佛一今般の儀政府え申遣し候間必らす不快に存取可申候間不快に無之御談判致度候

一御引戻し有之候得は爾後御取締筋は各國於て差構不申教師の取締は可致候移民御引戻し相成候上にて朝命を不奉節御罰し方有之候共差構不申既に當港にても死刑等澤山有之候得共御國地の事故差構不申候間いつれにも早々御取戻し被成朝命を不奉度毎に御所置可成候方可然候

一爾後取締向の法相立候得は御談判取纏め候積にて委任請候へ共引戻しの義は政府の命を奉し候上ならては唯今御即答及ひかたく候

一殘りの人數は皆々脫走人計りに可有之候

一脫走人には無之百五十人は聖德寺に有之五十人は浦上村庄屋に預け有之候

一移民を引返し候義は政府え承り候上の事に無之候ては決答難く移し殘りのもの取締向出來候樣御相談取極度候

一引戻の義東京え御歸府の上と申事相分り候へとも僅かの人數御引移の義御談判と申には及ひ申間敷候

一貳百人計に無之其餘も探索候はゝ貳千人計りも可有之候得共爾後の取締向相定置度移民引戻し等の義はいつれにも政府へ相伺候上の事に有之候

一左候はゝ御出張の詮も無之候

一移すへき者を留置已後の取締向を御相談可致積に付已後の取締向さへ出來候得は今日の御談判取纏り申候

一唯今申上候通相成候得は規則相立可申外に何に歟規則取締等有之候哉

一夫は居留地外にて禮拜等の教へは不相成居留地内は勝手次第日本人は内外共不相成と申事に候

一少人數にても夫丈けの取締向さへ出來候はゝ取戻しの論も相立可申候得共今殘り居候人民さへ取締出來兼候所故取戻しの義は出來兼候

一夫は不承知に候四千人にも餘り候者御所置相濟僅か貳百人計りに相成御相談と申義は相分り不申候間承引仕難く御勝手次第なさるべく候

一左樣に被申聞内地の騷擾を釀し候ては不相成候間殘りの人員取締向相立可申爲め御相談に出張いたし候右は全く懇親上の義に有之候所内地の義を御構無之樣にては懇親も泡沫と相成更に其詮無之場合に至り候間此邊篤と御了解有之度候既に此程三條始御談判いたし候次第に候

一右は引移前と存御談判いたし候へとも最早引移し相濟

僅かの人數に相成御相談と申は何分難相分候
一夫は此方にても未た引移し已前と存し御談判致し候處引移相成候趣長崎縣より申越候に付直樣官員を同所へ差遣候
一教師の取締向さへ付き候はゝ御引戻し相成候と申事に候哉
一移民取戻し候はゝ教師の取締付け可申との御存寄に候はゝ書面にて申請度右をもつて政府へ建言いたし可申候
一左候ては各國より差圖いたし候樣相聞へ候得共貴國人民御引戻し被成御取締向出來候はゝ我國教師禮拜の義を傳へさる樣取締付け可申候
一何れにも御心持丈けの處御書面にて申請度候
一此間御對話の節には已後此事件は澤寺島兩人え委任の趣三條殿御申聞有之候得とも今日御咄の趣は難相分候
一右は殘りの人員幷跡取締向丈けの處委任受候事に候
一相分り候
一唯今申入候通各國公使の覺書を申請右を持參政府へさし出候上にて評議を盡し又々御談判可致候
此時約束覺書出來各國公使姓名書記す

右にて畢る

註　本文書ニ謂フ「十二月六日附の御書簡」詳ナラス

（附屬書）

Copy.

Memorandum.

The Japanese Government having declared that the action of some foreign missionaries in preaching outside or the limits of the foreign settlement has caused serious disturbances, and is one of the reasons for which the Government thinks the removal of the native Christians from the neighborhood of Nagasaki is a political necessity, the Foreign Representatives do not hesitate to declare that they, on their part, will do everything in their power to restrain the Foreign Missionaries from such acts, or to punish them therefore if such acts be persisted in, provided that the native Christians who have already been removed from Urakami shall all be brought back.

HARRY S. PARKES.
(Sigd.) MAX. OUTREY.
C. E. DE LONG.
M. V. BRANDT.

（右附屬書和譯文）

Yokohama, Feb. 9, 1870.

午正月九日横濱おゐて引合の上差出す

覺　書

或る外國の教化師外國人居留地境界の外にて說法する所業あるに因り種々の騷擾を釀し成せし趣且其所業は日本政府にて耶蘇宗を信する日本人を長崎の近傍より他所に移す事國政におゐて須要なりと思へる緣故の一たる趣日本政府にて辯解ありしに由り外國目代等左の趣を證明す旣に浦上村より移住せし耶蘇宗の日本人都て其地に引戻さるゝに於ては此後若し外國の教化師右の如き所業を爲す事あらは其所業を差止め其者を罰する事に精々盡力勉勵すへし

ハルリー、エス、パークス
マクス、ウートレー
シ、イ、デ　ロ　ン　グ
エム、フヨン、ブラント

千八百七十年第二月九日横濱

一九七　一月十日（二月十日）　外務大丞等ヨリ大坂府知事西四辻公業、兵庫縣權知事稅所篤宛

一三　浦上村等耶蘇教徒ニ對スル處置ニ關スル件　一九七　一九八

外國人宣教師ノ天主堂建立竝ニ右同樣計畫ニ對スル措置ハ各國公使ト引合ノ上指令スル旨回答ノ件

（本書）「正月十日出ス」

今般於神戸各國教師ども天主教禮拜堂取建候に付云々御問合の趣承知いたし候右取締等の義に付ては於當省ても實に憂惱碎心罷在當時各國公使より引合中に付彌其談示行屆候上其旨早々可申進先不取敢御報迄如斯候也

正月　　外務省大少丞

大坂　西四辻知府事殿
兵庫　稅所知縣事殿

註　本文書ハ第二卷（第三册）六三六ニ對スル回答ナリ

一九八　一月十日（二月十日）　英吉利公使提出ノ意見書

浦上村耶蘇教徒移送報告書ニ對シ意見開陳ノ件

Remarks upon the Report of the Authorities at Nagasaki relative to the treatment of the native Christians at Urakami.

In the commencement of the Report it is asserted that "the removal of native Christians to the "places and according to the particulars stated in "the enclosed Memorandum was completed on the "8th instant" (January).

From information I have received of eyewitnesses the persecution was not stopped on the 8th instant as officers were observed still scouring the Valley of Urakami in search of Christians and on the 23rd January a hatch of these people were shipped off in the Japanese steamer "Coila." After the last named date the persecution in reality ceased not before.

I note in the Report the following paragraph. "The earnest admonitions which were given to the "people before their departure were received by all "with grateful respect."

I cannot indeed reconcile the above statement with truth and reason. For when it is considered that these poor people, for no crime, were driven from their humble homes in a storm of snow and during the coldest weather experienced in Nagasaki for many years past, no time even being allowed them to collect and remove their little household requisites and no toleration being shown towards the women, children and infirm could such treatment have been received with "grateful respect" as alleged in the Report of the Local Authorities?

Paragraph I. of the said Report is so worded as to convey the idea that the Government were very much concerned for the welfare of these people. I am informed that money was offered to two old men among these people, but was refused through fear of the officers as they stated; no provision, I understand, was made for the sick and infirm, and it has been reported to me that a woman among the persecuted band who had just given birth to a child was taken from her hut and died as she was being shipped on board a steamer.

In reply to paragraph 2. an eyewitness informs me—"The means I saw for carrying the sick and infirm "were an aged woman carried on a coolie's back and

"she was so exhausted that her head hung down as "though she were dead, about 300 persons I saw "conveyed to Tokitz were barefooted."

Paragraph 3. states. "We attended to the Imperial "Orders to keep each family together." I regret to say that it is a notorious fact that the men were all sent away first and their families afterwards, and they as well as the Japanese generally believed that they were to be separated. This is known from Enquiries made both of the Christians themselves at the time and of many others on different occasions, and also of Japanese officers who stated that the men were separated from their families.

Paragraph 4. It is stated that "when the inhabitants "of the different villages were summoned there were "naturally great crowds of people but with the view "to keep families together according to our instruc-"tions we provided them with various coloured "handkerchiefs as a means of distinguishing them "from each other."

The Authorities no doubt did summon *all* the inhabitants of the different villages at Urakami for the purpose of ascertaining who were and were not Christians and then all who acknowledged themselves Christians were at once seized and carried away and they may have given to the heathens a badge to distinguish them from the Christians so that afterwards they might not be molested by the officers. It is somewhat remarkable to note how the Christian families were picked out and the heathen left. Some places were almost entirely Christian and there the houses were emptied at other places most were heathen and only some of the houses had been inhabited by Christians these were emptied and the doors sealed with slips of paper with a number written on them.

Paragraph 5. sets forth that "the articles of house-"hold furniture etc. which the people desired to "leave behind were stored in a large fireproof build-"ing etc." Household furniture was seen in all the houses on the 10th Ultimo apparently just as it had been left, and it is difficult to understand what had been removed, as alleged.

Paragraph 6. states that: "In consequence of the

"cold wind and snow which prevailed at the time of "removal, we provided people with Sake."

I am informed by a gentleman who saw the people in the Government Buildings on the 8th Ultimo that only some dried boiled Rice was given to them for their breakfast and he did not see any Saké issued to them.

Paragraph 7. I have no comment to make on this statement which provides for the prevention of trouble during the journey of these people.

Paragraph 8. stating, "We communicated with the "different Clans to whom the emigrants were con-"signed and made arrangements that on their arrival "they should not be in want or exposed to suffering "etc."

It is difficult to accept the assertion that they "communicated with the different Clans to whom "the emigrants were consigned and made arrange-"ments etc." for the time that elapsed from the Yedo order coming until they were all deported could not admit of anything of the sort being done especially for those taken away into distant parts of Japan.

one, not even the Roman Catholic Priests surmised that such a measure was in contemplation as the deportation of 3000 people.

The very sudden order given to them in the midst of a most severe winter to leave their humble homes in which they had lived undisturbed for many years and embark on board steam vessels to be deposited in some strange part of Japan, separated from their families is certainly a barbarous proceeding and will no doubt call forth the indignation of the Civilized World.

The persons thus banished were a quiet industrious set of people, considerably more so than their surrounding countrymen, and a large native employer assured me that the Christian portion of his labourers were by far the best workmen, both as to steadiness and ability. They were guilty of no crimes whatsoever and resisted no law except the one which forbade them to adopt Christianity.

The sympathy of nearly all the native population of Nagasaki is with the banished people. They can not see why a number of quiet industrious persons

The general idea in this Report that these people were "emigrants" seems preposterous to anyone who has witnessed them. There appeared to be one conviction among them that they were exiled for their religion and for no other reason. They were certainly taken away by force, else why the Military and why did some escape by flight into the mountains and why were a large number kept in custody until shipped off?

I am unable to state positively what has been done with the few remaining Christians who were ready to be shipped off when the order arrived here to desist from further proceedings against them but I regret to state that I have reason to believe that the remnant of these persecuted people are in all probability to be deported like the rest notwithstanding the assurances of the Japanese Government to the contrary.

It is certainly very remarkable to reflect on the secrecy and rapidity with which this persecution was carried out. Until the Edict was given for the arrest of the Christian population at Urakami, no should be persecuted, whose only crime is the following of a religion professed by most western nations whom all Japan is trying to copy in every other respect.

Nagasaki, Feb. 5, 1870.

（右和譯文）

午正月十日英公使ヨリサシ出候書面譯

浦上村耶蘇宗徒取扱方に付長崎長官より差出したる告書の評

「第壹章一句」

別紙覺書に委細記載せる如く耶蘇宗徒移方去る第一月八日に終りたる旨を右告書の始に說明せり

現に見しもの、說には去月八日にはいまた苛酷の所置止さりし如何んとなれは浦上村にて耶蘇宗徒を探索する士官を見懸け且右宗民の一群第一月廿三日日本蒸氣コイラ船に乘込みたれはなり右廿三日後苛酷の所置貫に止みたり右は其前にあらす

「第貳句」

右告書中に次章を見たり右宗民に出帆前申渡されし厚き教論を何れも難有承引せしとあり

前文の事を余眞實とは思はざるへし如何んとなれは長崎にて數年以來の大雪嚴寒の折柄無罪の賤民を茅屋より追拂右宗民所持の家具を取集め引移す時刻も與へざりし且婦人小供及ひ虛弱のものに對し憐愍の所置なきを以て考ふれは彼地長官の告知の如く豈右取扱を甘んして受けしならんや

（朱書）「第三句」

右告書中第一章に日本政府にて右宗民の安全を專ら計りしを示さん趣意にて記載せり右宗民の內老人兩人に金子を惠まれたれとも其もの共申立てしには士官等を恐れ其金を辭せし旨を聞及ひたり病人及ひ虛弱のものに夫々手當等もなき由なり且苛酷の所置を受けし徒の內一婦人あり其婦丁度其頃小兒を產みそれを其家より引出し蒸氣船に乘込せし故死去せし由聞及ひたり

（朱書）「第二章」

第二章の回答として現に見しもの丶說に病人及ひ虛弱のものを移すを見しに人足の背に負ふわれたる一老婦あり其婦頭を下け殆と死去せる樣に衰弱せり時津に移されし人數凡三十人は赤脚たるを見たり

（朱書）「第三章」

第三章に家族は悉く纏め置くへきとの勅命を守りしとあれとも男子は不殘最初移され跡にて家族共を移されし事普く人の知る處なるを報する事余におゐて歎する處なり右のものの共家族と引分る丶へき事と其者共は勿論日本人一般に信せり右は其頃耶蘇宗徒及ひ其他數十人を數度糺問の上知れたり且又男子は其家族と引分れし旨を日本士官告けたり

（朱書）「第四章」

第四章目に諸村の住民を呼出せし時素より多人數なりし然るに命令の通家族等を一同に纏置く主意にて互に見分るため色違ひし手拭を與へし旨を載せたり

長官耶蘇宗徒なる哉否を見極めん爲め浦上諸村の住民不殘呼出せし事疑ひなし耶蘇宗徒たる事を自分に白狀せしものは直ち悉く取押へ連行きたり耶蘇宗徒跡にて士官より苦勤せられざる樣其宗民をヒーゼン宗旨のものと見分るための目印を耶蘇宗徒よりヒーゼン宗徒に渡す事出來るへし如何して耶蘇宗民の家族を撰出しヒーゼン宗民を殘せし哉之れ奇と云ふへし或る場所は全く耶蘇宗徒にて住家空虛なり他の場所は大概ヒーゼン宗民にて僅兩三軒に耶蘇宗徒住居せり其家は空虛にして番號を記し戶を端紙にて封印しあるな

り

（朱書）「第五章」

第五章に右宗民殘し置かんと欲する家財は大丈夫なる建物の內に納め置きし旨云々とありしか家財は其儘去る十日迄其家にありし事判然たり告知せられし如く何品を移せし哉解し難し

（朱書）「第六章」

第六章に引移しの節折節風雪にて寒氣烈敷に付宗民へ酒を與へしとあり去る八日政府建物の內に居る耶蘇宗徒を見し人より聞しには朝飯として彼等に與へしものは蒸飯のみにて少しも酒を與へしを見さりし由なり

（朱書）「第七章」

第七章に旅中において不都合無之樣處置を施すとの趣に付ては予說明する事なし

（朱書）「第八章」

第八章に彼等到着の上不自由無之樣手當可致旨各藩へ通達ありし旨を載せり不自由無之樣引越せし諸藩え通達云々と有之儀信し難く其故は東京より命令來りしより宗徒を不殘積りし迄の日數僅にして就中日本遠隔の地へ送られしもの

の爲右樣の手續を爲すの暇なかりしなり

（朱書）「以下末文」

宗民取扱振廉書一體の趣意にては彼等は只移民の旨なれとも彼等を見しもの丶目にては相反せり右宗徒の罰に處せられしは全く宗門の爲にて別に他の譯合なく遠境へ送らし事と見ゆ彼等を全く無利に捕へて送られしなり然らされは何故兵力を用ひ何故彼等驚ひて山野に逃隱る丶哉又何故多人數乘込迄番を付置かれし哉

僅に殘れる耶蘇宗民え對し此後の處置を施すを見合すへき旨の命令當所に着せし時は最早乘込用意整ありしか右のもの共は如何成行しや予聞と述ふること能はす去なから苛酷の所置を受けし右殘の分も日本政府の請合はありといへども他の者同樣多分移さる丶事と予信す

此苛酷の處置を施されし事隱密にして速なる事甚不思議なり浦上村耶蘇宗民召捕の命令下りし迄は誰一人羅嗎カトリック教師とても右樣三千人を移住さする事の處置を施さる事少しも思ひ付さりしなり

嚴寒の折數年安穩に暮せし茅屋を立去り蒸氣船に乘組家族に引別れ日本の他境に移る事の命令を火急に下せし事實に

殘酷の處置にて文明諸國の賤みを受る事必定なり
移されし宗民共は其近隣の民より餘程勉强なる人民にて既に日本人の内にて其宗民を雇ひし大家のもの浦上村宗民は强壯にして才能共備り遙に最上の農夫たることを予に云へり彼等は何も罪を犯せし事なく耶蘇宗信仰の禁を犯せし外國法に逆ひし事なし
都て長崎の住民共宗徒の移さるゝを憐み日本國一般に西洋の諸事を學はんとするに何故西洋各國大概信仰する處の宗旨に隨ふ罪のみにて極勉强なる人民に苛酷の所置を施さるゝ哉解し難し

註一、本文書日附ハ英吉利公使ヨリ外務省ヘ提出ノ日ニ據ル
二、本文書ニ「長崎長官より差出したる告書」トアルハ第二巻（第三册）六六九附屬書一ヲ指スモノト認メラル

一九九　一月十日（二月十日）　英吉利公使ヘノ回答書

浦上村耶蘇教徒移送報告書ニ關スル意見書ニ對シ回答ノ件

（案書）「三年正月十日付英公使來翰ニ對スル回答書」

長崎より出張の官員覺書

（案書）「第一章ノ一句ニ回答」

第一月八日迄に移方の所置は一應皆相濟長崎縣より第一月九日朝認の書面に昨日迄と記しあり其後の事は不相分偖彼等を積送れる船舶出帆致せしと雖も其蒸氣船貳艘洋中にて機械の損害を得且其外の差支もありて歸り來りし故他船の入港を待て其人員を積換送れるもあり又は彼等家族の内他所にありて其時に居合はせす追て其家族と共に移住の地に趣たき旨申出る者もありて移し方遷延に及ひたり且浦上村數軒の民屋一時空虛となりて盜火の憂もある故役人出張同村取締爲致宗徒探索の事は既に相濟し後なれは移せし後に探索する事本より無用なり

（案書）「二句ニ回答」

切支丹宗嚴禁にて之を犯す者は嚴刑に處せらるゝ事を知らさる者なし然るに諸藩に夫々分配し送らる各郷親族は必らす離散せさる樣同藩に遣し其所にても產業に安んし候樣藩々に　御布告の趣申聞しに彼等は御國法の嚴刑に處せらるゝとは大に反して却て丁寧の御取扱に逢ふ事を聞て一同難

有といひて御請をなせり彼等我日本に生れ其國法に從ふは當然なり然るに此節の如く寛典に處せらるゝを感するは左もあるへき事疑ふへけんや

（案書）「三句ニ回答」

彼等の中一家の當主毎に草鞋代として金を與へしに一人も洩れたる者なし病人には病院に入りて療養致すへき旨を申聞けしか他の者と共に出船を望みたる者多く又一人の產婦も右同樣其家族と共に同行を乞し故其輩の望に任せ移せしなり此產婦は將に產を爲んとする容體なるを見る故憐むへき事に付居殘り養生すへしと諭したれとも是非一同乘船したき旨申す故乘付爲致たり決て官より强て乘せたるには非す彼等を移す折は前日より諸官員浦上村に出張し諸郷家族多き家々に臻り藩々え送る　御趣意を懇に諭示せし故翌朝は出帆の用意し悉皆庄屋方に寄り來りしなり元來右樣國律を犯せし者を官府より呼出し所置する時は穢多と號くる極卑賤の者の取扱ひなれ共今般の者共官員自ら奔走し別格の取計ひに及ひしを見ても苛酷の所置ならさる事明亮なるへし

（案書）「第二章ニ回答」

老病の者もありしか前に言ふ如く當人の望に從ひ同發せしむ此等は官より强て乘船せしめさる後の證據として其者より書面を以願はしめたる浦上より長崎に送りたる者の中路近けれは人足の背に負せたり併し時津の方に送りたる中には路遠き故駕籠に乘せたり又彼等の中生平素足歩行の者多し彼等の好みて着鞋を爲さゝりしなり

（案書）「第三章ニ回答」

彼等家族離散の說は傳承の誤なるへし最初諸郷家毎の當主を船に乘せ其者共の行先を定め夫より其家族を當主の趣へき藩々に分配遣せしか多人數故同家族を一船に取纏め送る事能はす或は他船を以て移せしもあれとも一兩日の前後ある而已にて總て各々の家族は同藩に落着せし事疑なし乍去彼等の父子兄弟等既に先年移住の者共あり其家族を同藩に送り遣す旨を申聞けしに長州に在る者共の家族は悉く同藩に赴くを肯せす其譯は先年同藩に預けの輩追々改心せし趣を傳聞する處より他藩に行き度旨强て歎願するありて許容せしもあり其分は家族分散と云ふへし決て當方にて家族を引離せし事なし過て分散せは彼等を同所に送るに格別の時日を費さゝるへし併し各々の家族を同所に移すの趣意なれ

とも數艘の船より諸藩に分配する故若混雜して引離るゝ事なき樣にと其邊を頻に苦心し浦上村及ひ大波戸場に知縣事始官員出張し乘船迄夫々取計らいし程なり其邊は尚市街の實說を聽く時は氷解あるへし

（朱書）「第四章ニ回答」

彼等を召捕へ連行抔といふ事更になし夫は兼て信仰の者共名前官府に分明なる故前に述る如く官員諸鄕の家毎に臻り諭達し其官員の中右人數受持の者の心得にて或は黃木綿の手拭壹筋宛を給與し或は其他種々の目印になる物を爲持明朝出立の用意を調へ來る時其手拭或は他の目印を携へ來らは他鄕の者共と紛れぬ樣一家族は勿論可成近鄰の輩も同所に移住出來る樣取計ひ遣すへしと示し置きたれは此者共は其手拭或は他の目印を持て官員より告け置し場所に約束の時刻を違へす一同發船の覺悟にて集り來れるなり併し官員より目印を持來れと命せさる前に既に自ら白布の手拭を製して一同携へ來れり決して官よりヒーゼン宗の者と切支丹宗の者とを分る爲に目印を與へし事はなし又ヒーゼン宗あるの證跡を得す

（朱）「第五章ニ回答」

彼等の家族共には衣服當用の品一同持越し不苦との儀を前以て官員より達せしかは或は風呂敷包にて携へ或は多く着用したるを見たり又貧しき者の衣服なきは庄屋に命し其者共の農具等を預り金を貸與へし故夫にて衣服を求めしもあり彼等所持にて鄕中に殘る牛馬鷄豕野菜類は入札拂を爲し其賣立し金は官府に預り置き其餘の家財等は夫々封印を付け家屋をしめ切晝夜兵隊を以て盜火等の非常を警衛し決して散失の患なからしめたり諸鄕の家屋に殘し置ける所持物等を取纏る爲め相應の日數を費さゝるを得さりしなり

（朱書）「第六章ニ回答」

最初家毎の當主を船に送りし日は風雪にて寒威烈敷覺へし故官府にて彼等に酒飯を與へたり是は官府に其酒を鬻し商人及ひ酒飯持運の小者等に聞かは分明なるへし又其後家族共乘船の折は夜に入りし故諸船に積分るに家族混亂の懸念もありし故據なく大波戸場官庫等に留置きたり其節も夜商の者共を其構內に入れ食物を隨意に買求させたり併し多分婦人小兒なる故酒は官より與へさりし半熟の飯を與へし事なし其節は會計懸の者も出張し飯の焚出を司りしか其飯を出張の官員及ひ彼等喫したり其場所にて彼等と官員の食物は同しものなり

（朱書）「第七章ニ回答」

旅中の儀は長崎縣より出せし警固の者及ひ受取るへき藩士に一體の心得方を達置たれは決て不都合の所置はなき筈なり

（朱書）「第八章ニ回答」

彼等到着の上は其者望の職業を得せしめ自由を與へ追々教諭して良民になす樣前以て政府より各藩に嚴告ありたれは彼等着到の後安堵する事更に疑なし

（朱書）「末文ニ回答」

彼等を無理に捕へて送るならは捕亡の下官計を以て容易く乘船迄の手當出來るなり併し上官諸方に奔走し諭達せし故官府にて一人も捕へす却て彼等進み來れるなり最初昨巳十一月晦日（西洋六十九年（七十年カ）第一月一日）官府より明朝五ツ時家々の當主共一同揃ふて來るへしと達せしに翌日に至り呼出せし者の中纔の人數來れり元來士商共官府より呼出す時不參は勿論假令遲刻致すも必らす咎めさる事能はす雖然此節の儀は別意を加へ其日暮頃より浦上村に官員出張し彼等を庄屋方に呼寄せ如何なれは官府の命に違ふや糺問せしに種々難澁の趣申立て日數三日の猶豫を一同强く歎願する故先年彼等の同類を各藩に送り預けし例もあれは若くは移轉の命も下るかと思ふ處より三日の中に家內取纏等の爲め準備の事もあらんと官員も粗推量し其願を許容せり又家族共の乘船は夫より後れたれは其際に市鄕懇意の者に語り合ひ家內荒增の取片付は出來たり右の次第なれは決して兵力を用ひたる事なし彼等何故驚て山野に逃隱るへきや又各藩に護送の者浦上村より各關係の人員を預り其船中に附添ひ又同村は一時數軒空屋となる故他所より入來る惡黨取締等のため巡邏の者を備へ置し而已にて附添の者共他の罪人警衛の如く一人も銃器等を携へさるを以て知るへし併し前記の十一月晦日呼出の事を達せし折移轉の事もあらんかと暗に察せしや三十人程も脫走せり其故は原來不行狀にて家產を破り農業を勸めさるものありて至愚の老婆幼婦に宗旨を勸誘して今日糊口の助とする者にて官府より如斯く所置ある時は自然と活路を失ふ處より隱に官府の所置苛酷なり抔と流言を傳へ衆人に疑惑を生しめたるにより偶之を恐れて脫走せる者もあり都て長崎の住民共宗徒の移さるゝを憐み云々の件は彼等生平泥路を侵して行く事を何とも思はぬ風習なるも市中にて

偶見たる者は一時の體を憐むなり不幸にして天寒く雨降り道路悪しかりし故官員も天氣の爲其不幸なるを憐と思へり併し是か爲に政府苛酷の所置と言へからす日本にては開闢以降
皇統連綿尊崇する
神明は即
天皇陛下の祖先にして上下尊敬すへき國風なるに其大父母たる　神明に不尊不敬の所行を爲すは如何に强壯勉勵なる農民と雖も全國の民を御するの國典に於て大に妨あり本より西洋開化の風を學はんと欲すと雖も全國の民を統御するの道を失ひ國亂るゝ時は之を開化と謂ふへけんや

註　本文書日附ヲ缺クモ一九八ノ回答ナルヲ以テ假ニ其直後ニ挿入ス

二〇〇　一月十二日（二月十三日）　外務省ヨリ静岡藩公用人宛

佛蘭西政府ヨリノ日本人ニ對スル宣教師ノ布教禁止關係書類アラハ送付スヘキ旨指令ノ件

二〇一　一月十二日（二月十三日）　長崎縣權大屬尾上與一郎ヨリノ探索書

浦上村耶蘇教徒ニ關スル件

（朱書）「正月十二日達ス」

静岡藩公用人中　　外務省

向山隼人佛蘭西首府巴里期（所カ）におゐて耶蘇教の儀先年長崎浦上村農民共へ教僧竊に勸誘いたし不容易事柄に及候に付長崎奉行取計を以一時禁獄におよひ候處佛蘭西公使より追々申立候趣を以放免いたし遣候得共已後は教僧共おゐても日本人民へ勸誘いたす間敷旨前書隼人引合およひ佛蘭西政府より書面さし出置候運に相成居候由彌右に相違無之候はゝ右書類原文譯文とも取調可被差出或は對話迄の儀に候はゝ右對話書の類さし出可被申尤右は極々御急の御用に付早追を以申遣來廿日頃迄に否とも可被申聞候事

（朱書）「午」正月十二日

（朱書）「三年正月長崎來」　正月十二日英公使ヘ寫壹冊相廻ス

尾上長崎權大屬より差出候探索書

一去々辰六月頃浦上村本原郷字野中綿打渡世の德平儀切支丹宗徒に有之候處改心致し度旨同村庄屋え訴出候處切支丹宗徒の者共右の趣聞付け大勢にて可致打擲と申合同村打越と申處にて德平の歸路を待請差押右徒の内就中圓五郎と申者重立及打擲德平は其場を逃去歸宅もいたし得す程の義に御座候右樣の差縫間々有之互に己れの宗を白組と唱へ他宗を黑組と唱へ雙方無絶間混雜差起り候且外村并に市中の者も雙方絶交同樣の姿に相成居申候

一切支丹宗徒の者は日本の神佛を更に尊敬せす若過て拜し候得は深く切支丹宗の罰を請る樣と相唱へ既に浦上村に大神宮安置有之境内え異宗の族の小兒共無何心遊ひ居候處を其親共見當り連戻り再ひ同所え相越さす樣折檻を加へ又は往來え鳥居取建有之其左右人家にて鳥居と人家とは僅壹尺五六寸の透有之切支丹宗の族は其鳥居を潛り候事を忌み依りて背に負ひ薪等を先に鳥居外に投出し體は僅の壹尺五六寸の透處を横向きになり通り拔け候或は此外の鳥居有之場所は往來の幅に取建有之候故左右の畑地を踏み付け往來の樣に致し居申候

一佛僧浦上村え深更折々姿を變し御國人の體に成り陸地又は船路等にて相越し經文等傳授いたし鷄鳴頃歸館致し晝は浦上村え遊歩の體にて相越し候儀も有之候

一御國内にては免許なく寺廟等取建候儀は容易ならさる儀に有之候處浦上村え當時五ヶ所假に天主堂を設け切支丹宗の佛像を安置いたし信仰の者は晝夜に拘らす參詣いたし申候

但し去る卯年中の頃天主堂六ヶ所計り同村え取建居候付其頃舊政府にて取毀し候得共又候命を用ひす本文の通取建居申候

一切支丹宗の者共元來浦上村は淨土宗聖德寺檀家に有之候付死去いたし候節は直に右寺に申出其寺の法式請可取計の處無其儀切支丹宗の重立候者を相招き其法式に引直し勝手に埋葬いたし候

一我宗は病死いたし候節は葬送式法も有之處更に其式用ひす切支丹宗徒の者死去いたし候得は白衣を着せす棺斂の節は必す刄物を棺に入れ赤き眞綿を惣身に引是は劍難に死血を出し候姿にいたし候

一切支丹宗徒の者墓所は日本の石碑不取建野石を以て平に

据置目印といたし候故石碑を取建さる主意は正宗の戒名を嫌ひ候我寺の墓處え切支丹黨の者共相越し石碑を裏向にいたし或は押落し候儀等間々有之日本の宗を讒し頻りに妨け及ひ候儀に御座候

一切支丹の者は春秋都て穀物種を蒔き候ても日本の暦を用ひす日操の方と唱へ重立信仰の者え相尋蒔付けいたし申候更に日本の暦は用ひさる事と相極め居申候

一浦上に往昔より弘法大師の石像を安置いたし居候處切支丹宗の者共取毀し捨其外一村に神佛等祭り有之候得共急用差障り候儀も間々有之候我宗の者は家別に大神宮又は諏訪社等の守護札及ひシメ縄等を門口に張り其上家毎に正敷神棚佛檀等を拵へ祭り候御法に有之候處切支丹宗の者は其儀更に無之家別神棚佛檀シメ縄を張り候は一切無之候

一切支丹宗の者共病氣等相煩ひ候節は醫師を相招かす宗黨の重立候者を相招き經文を相唱へ何か水を以て病人の體を摩り候義も有之重病に相成候得は異僧を相招き右同様の事を行ひ候

一御國民は其神佛を信仰可致事に候處切支丹宗のもの兼て申觸し候者日本の神佛は切支丹宗より起りし神佛に付信仰いたすは無益の事と申居夫故我宗の者と至極不和に御坐候

一右宗黨の親族の内吟味筋にて村預中病死致し候得は勝手に埋葬いたし候ゆへ政府え呼出し日本の葬式を相除き候哉及吟味候處日本の僧え頼み葬候得は魂魄安んせすと佛僧申聞候に付右を守り勝手に埋葬いたし候旨申上候義も有之候

但し吟味中のもの病死いたし候得は其段政府え屆出死體檢使見分の上死體取置可申處無其儀も本文の通取計候儀に御座候

註　本文書日附ヲ缺クモ一月十二日ニ寫ヲ英吉利公使ヘ廻送シタルモノナルニ付假ニ此處ニ挿入ス

二〇二　一月十三日（二月十三日）英吉利公使提出ノ西洋人某ヨリノ陳述書

浦上村耶蘇教徒移送處置ニ關スル件

Copy.　　Nagasaki, January 12, 1870.

Sir,

Permit me to hand you the statement of a few particulars which for the most part came under my own observation, relating to the terrible persecution of Christians now carried on by the Japanese Government in the neighbourhood of Nagasaki.

About 3 o'clock in the afternoon of the 7th Instant I saw a large procession guarded by military coming from the direction of Ourakami valley and going to the government buildings behind Decima where the schools for English and French are held, I estimated the number of persons in this procession to be from one to two thousand. It consisted mostly of women and children there were a few old men, but I saw no able bodied men. Each person carried a bundle of clothing and very many of the women had their infants on their backs, all looked very anxious and dejected, I enquired of a Japanese officer who they were, he replied they were emigrants, I asked if they were not Christians, he with some reluctance admitted they were, I returned afterwards in company of another foreigner to where they were assembled, we there saw them in groups standing around officers who were taking their names we spoke to them and they told us they were Christians and for being such they were seized and taken from their homes, and they knew not where they were to be sent and that they were in very great distress, they said that all their men had been previously carried away.

In the afternoon of the 8th on the road leading to Omura and Tokits, we came upon two companies consisting of about three handred persons, guarded by military leaving Nagasaki and which were on their way to those places where it is said there are prisons in which 120 Christians were confined about three years ago, only 79 of whom were alive last year. We learned these persons were Christians belonging to Ourakami valley, they were all women and children. They appeared greatly exhausted and moved slowly. There were a number sick and some aged and infirm who had to be carried. We noticed many were, as they moved on, engaged repeating some formula of prayer. Several as they passed us bowed

recognition their King no doubt we were also Christians. It was sad to feel we were powerless to help them.

On the 10th I. in company with another foreigner went to Ourakami valley for the purpose of seeing the late abodes of these persecuted people. We saw many hamlets which were bereft in whole or in part of their inhabitants, the houses still inhabited had all signs of heathenism on them such as charms over the doors; none of the Christians' houses had any signs of idolatry on them and all which had not were without inhabitants and had the doors sealed with slips of papers; their cooking utensils and farming implements were laying about. Everything bore the signs of hasty departure. We were told that 3.000 persons had been taken but there were more still to be taken and we saw officers guarding the roads and scouring the country, some of the people we saw told us they wept beholding the calamities of their neighbours. From this scene of desolation we returned with heavy hearts.

In addition to the foregoing I have heard that the men of the villages of Ourakami to the number of 725 were on the 5th Instant called before the Governor and on their refusing to recant their faith were in the evening embarked on board steamers belonging to Satsuma and other Princes. Eight or ten Japanese steamers have left Nagasaki, loaded with men, women, and children. I saw several of these go out of port and I learn that the men have been separated from their families. I have no doubt if the Government cannot compel them to recant that their treatment will be such that they cannot long survive.

I leave it with you Sir to judge if this action of the Japanese Government is not "calculated to "excite religious animosity" and in doing so whether it is not violating the spirit if not the letter of the Treaty.

I am etc.

A. A. Annesley Esqre.,
H. B. M.'s Acting Consul,
Nagasaki.

(抄訳譯文)

於長崎第一月十二日千八百七十年

或西洋人より英國岡士え差出候書面寫

以書翰申入候然は此度日本政府にて長崎近邊邪蘇宗信仰の徒苛酷の處置被致候に付左の委細の事私目擊仕候間申上度存候第七日午後第三字頃浦上村より一群の人民を兵隊にて致警固引纏ひ參り候を見受申候右は出島の後英佛學校有之所え參り申候凡此人數は千人か二千人程も有之大抵婦人小兒共にて老人も少々交り居候得共强壯の者は一人も無之各衣類等の風呂敷包を提け小兒抔を背負いつれも驚愕憔悴の體に相見へ候其地に在日本役人え相尋候處外土地え引移り候もの〻よし被申聞候に付邪蘇宗の徒に候やと相尋候處少し遠慮の樣子にて頓て邪蘇宗の者のよし被答候私儀は夫より一先つ立歸り又候他の外國人同道にて右人民共群集の場所え參候處士官のもの立合居り右人民共の名前を閉書留居申候仍て此方より段々相尋候所彼人民共の咄候には邪蘇宗信仰致候に付此度外土地へ被移候得共いつれの處え參り候哉相分り不申候に付大に難澁致居事主抔は最早いつ處えかうつされ候旨相咄申候第八日午後とふきちと大村の路にて三百人程の一群の人數に逢候處是も同樣警衛人附添此者共は長崎より立出牢屋有之所へ被引連申候三年以前右牢え百二十人致入牢候處昨年はやよ〳〵七拾九人程助り居申候此者共は浦上村邊の者にて婦人小兒共にていつれも悴憔やよ〳〵歩行いたし參申候或は老人病人等有之此者共は擔候て連れ參申候右人數歩行中經文體のものを誦候ものも有之樣に相見へ申候其砌私共行逢候節挨拶いたし候ものも有之候間邪蘇宗の徒と心得挨拶いたし候儀と存候仍て救助いたし遣度候得共何分私共には救助致方無之殘念の事に存候第十目他の西洋人と浦上村え引移され候人民共の住居を一見に參候處村中殊の外明き家多く農民も減し候殘り居家には門戸え札守り抔張り置候得共邪蘇宗を信し候家には右札守抔は相見へ不申此札守抔張付無之家は必住居のものも無之いつれも戸を鎖し紙にて封印致置候勝手道具又は農具等いつれも取散らし有之皆々急き立退候樣子に相見へ申候凡三千人程被召捕候處殘りの者も又被召捕候よしに御坐候此近邊山林等士官共固め居申候其地に罷在候農民共も比隣斯樣の事有之に付落涙いたし居候私共此體を見て甚以痛心立歸り申候此他承り候には第五日浦かみ村男子の分七百貳十五人役所え呼出され邪蘇宗不相改に付薩州か其他の藩の蒸氣船

にて被送候由に御坐候日本蒸氣船八艘十艘にて右人民を乗組せ長崎を出帆右船には男女稚子共乗組候を見受申候又承り候には夫婦兄弟離散致居候由に御坐候政府に於て右の者共改心爲致候事不相成候はゝ必此處置にては長くは存命相成不申事は不審無之候右の事貴下え相屆此度日本政府の處置は宗旨の義に付雙方の人民互に爭論有へからすと申條約面に背き不申候とも右の意味は條約面に背き候事に相當り可申存候

註　本文書ハ「明治三年各國往復書翰目錄」ニ據レハ一月十三日英吉利公使ヨリ外務省ヘ提出シタルモノナルニ付此處ニ挿入ス

二〇三　一月十四日（二月十四日）　金澤藩大屬世良太一等ヨリ外務省宛請書

御預ノ浦上村耶蘇教徒取締ニ關スル口達書御請ノ件

（表題）「御請書」　金澤藩　世良太一等」

長崎縣近傍浦上村々民切支丹宗信仰の者共藩々え遷徙の儀に付外國公使え御應接の趣意諸藩相違不致樣相心得教喩撫育行屆候樣可仕旨知事方え速に申遣候樣御口達書を以被仰渡奉畏候依て御請如件

午正月十四日

金澤藩　世良太一（印）
鹿兒島藩　有馬藤太（印）
名古屋藩　澤井三左衛門（印）
和歌山藩　津田兵彌（印）
福岡藩　安武樵（印）
廣島藩　龜岡勝知（印）
山口藩　宇喜多八郎（印）
津藩　須知蓁太郎（印）
鳥取藩　田中民藏（印）
岡山藩　友野信也（印）
德島藩　伊月平一郎（印）
高知藩　原四郎（印）
松江藩　長尾眞吾（印）

郡山藩　平井利貞（印）
姫路藩　岩橋辰三（印）
松山藩　中山多三郎（印）
高松藩　伊藤甚三郎（印）
福山藩　茂上有助（印）
大聖寺藩　野尻勘右衛門（印）
津和野藩　勝田襄（印）

外務省御役所

二〇四　一月十五日（二月十五日）　英吉利公使館ニ於テ外務大輔寺島宗則ト英吉利公使トノ對話拔書

浦上村耶蘇教徒處置ニ關スル件

午正月十五日於英國公使館寺島外務大輔殿パークスとの對話記

一切支丹宗の義如何相成候哉

一我右事件は當時政府に於て評議中なり孰れ確定次第猶又各國公使えも應接に可及候

一凡日限御取極に候哉

一日限の義は不日御答に可及候

一壹昨年宗旨の義に付佛國パリスに於て栗本安藝より他國え參り異宗施行の義は制禁の訂約談判に及置候尤右書類は同人所持無之候得とも右件々は政府え可申出候積に候

一栗本は何役に候哉

一當時栗本某は無官に候

一過日御話も有之候宗旨信仰の者の内佛像を毀ち或は宗旨に黨與せさる者を罵詈いたし候者共を罪に所し候は當然の事に候得とも其他唯信仰の徒三四千人を罪し候は至當の御所置とは想像致兼候尤右樣申上候得とも各國にて日本國民を切支丹宗に教導致候義には無之貴國人民を暴政に所置可致と存候左候得は我方に於ても交際上に於て安堵不仕候

一宗旨信仰の者を轉移の所置に行ひ候は日本於て開化の所置と存候近年迄は右宗を遵奉致候者は磔刑に所し候得とも今は寛裕の法に所之候

一開化の所置とは思はれす候

一迅速間に開化に赴くと申理無之只我方に於て宗旨を惡む

には有らす我國内中人民頑愚にて一徹事を了解せさる者は宗旨を禁制せされは貴國の命令に曲從致し候抔と唱へ憤怨を懐き遂には攘夷論にも及べり是又葛藤を生する一端に付右故宗旨制禁の事を期し候に付御熟察有之度候

一日本國にて了解せさる者在り左すれは其心得にて御交際にも可及既に佛人も未た日本は開けさると申宗旨の義に付ては支那えは教師差置候事にて貴國於て宗旨論と攘夷論在るは支那國にも劣れり何そ萬國と并立する事を得んや

一公使日本に來れる故は西洋萬國と并立せん事を祈望せしか爲なり

二〇五　一月二十日（二月二十日）

外務大錄花房虎太郎提出書類

其ノ一、彈正大忠渡邊昇ノ覺書

浦上村耶蘇教徒移送、九州諸藩ノ耶蘇教徒探索方等ニ關スル件

其ノ二、一月四日英吉利領事代理（長崎在勤）ヨリ長崎縣知事野村宗七宛

浦上村耶蘇教徒ノ處置及東京ヨリ派遣ノ官吏到着ノ有無照會ノ件

其ノ三、一月七日英吉利領事代理（長崎在勤）ヨリ長崎縣知事野村宗七宛

耶蘇教徒新規移送中止ニ關シ申入ノ件

其ノ四、一月九日長崎縣知事野村宗七ヨリ英吉利領事代理（長崎在勤）宛

耶蘇教徒ノ新規ノ移送ハ行ヒ居ラサル旨回答ノ件

其ノ五、明治二年十二月宣教師ニ關スル調書

（其ノ一）

正月廿日花房大錄歸府の節持參候渡邊大忠覺書并長崎知縣事より英岡士え往復書類

本書辨官え出せし由宮本氏被申聞

一十二月二十五日迄に浦上村の異宗移し仕舞直に市中并隣巣の宗徒も同樣可致所置處

御沙汰の次第花房大錄より承り候故見合せ置候段各國え申入置候處何ことも致承知候旨申出其後別紙の通廿五日後に

も相移候風説を信し申出候得共決て談判の如く暫見合せ候に相違無之就ては信義を失ひ候事毛頭無之事

一國内一般戸口人口調へ其外神祇官にて取扱居候大規律至急御施有之度事

一九州諸藩え異宗の徒彌探索可致旨右大臣殿於御自宅御内達の御受申上候哉の事

右御受申上候はゝ國元え相達し候日割を見計當縣より極密に出懸可申事

一浦上村跡取締の事

異宗の徒他方出違居候族縱に致歸巣候も有之候得共依御沙汰しらぬ顔にて打過候事

舟の一件は以別紙委曲奉窺候通に付公平の御沙汰有之度事

舟賃の儀藩々の申出種々有之候故大坂迄の運賃一人前六兩と定め候ては如何の事

一長崎よりは未受取の都合不申來事

一諸事御沙汰を御待候事

凡移し殘り百三拾貳人　浦上村

註一、右文書ニ「舟の一件は以別紙」トアル「別紙」ハ詳ナラス

（其ノ二）

第貳拾貳號

不列顛岡士館

長崎におゐて千八百七拾年第二月四日

野邨知縣事閣下え

一浦上村異宗の者一件に付閣下各國岡士え御遣相成候十二月廿五日附の御書翰寫落掌いたし候右異宗のもの追放御差止相成候旨閣下より承り候段拙者におゐて滿足いたし候此義は早速東京在留不列顛公使え可申遣候

一浦上邨異宗のもの追放の儀方今御差止相成候處右一件に付東京にある日本ミニストル御下命の通御所置相成候初發よりの手續拙者え御報知被下候はゝ忝仕合有之候

一浦上村長崎縣并近在の異宗のもの共追放相成候人員且何所え何人宛御遣相成候や右のもの共御取扱振等尙家族とも離散いたし居候哉又は一同相越候哉御報知被下候得は大慶の到に有之候

一長崎縣并浦上村異宗の者共此節追放相成候人員且右のもの共如何御所置相成候御思召に候哉爲御知被下候得は忝仕合有之候

一東京より日本士官兩人御差下相成右異宗のもの追放の儀向後御差止相成可申候閣下えの命を受け大東洋飛脚蒸氣オルコニアン舟を以て去月廿四日着崎可有之筈に候旨承知いたし候右士官は當地え御到着相成候哉拙者え御報知被下度相願候

一今日當港え着船いたし候横濱えの右東洋飛脚舟再便の頃迄に拙者え至急御答御差越被下候得は忝仕合有之候謹言

不列顛國岡士助勤
エエ　エンネスリー

（其ノ三）

第貳拾三號

長崎不列顛岡士館におゐて

千八百七拾年第二月七日

一異宗の者凡貳百人程日本蒸氣船エルジン號を以御移可相成趣承知いたし候に付急速右虚實相伺度拙翰拜呈いたし候

一乍去右は全く虚説にて十二月廿五日附貴翰を以太政官の命に因て異宗のもの移方差止候旨各國岡士え御受合相成候通聊相違は有之間鋪と存候

一萬一此後異宗の者當地より御追放相成候樣有之候ては其ため大なる煩勞を釀し將最早異宗のもの當所より移方不致旨太政官よりの正しき御約定にも違背いたし候儀者閣下え申上候迄も無之候併太政官の請合に不拘自然此後異宗の者海陸いつれにても御移相成候儀有之候はゝ右等の御所置は屹度拙者より抵抗いたし候樣不列顛公使より被命居候得共右施行前閣下の御答相願候異宗のもの追放差止候段一應各國目代え御受合有之候儀日本政府におゐて左程速に忘脚相成候義も有之間敷候得は右貴答にて滿足可致と存候就ては速に御返翰御差越相成候樣希望いたし候謹言

英岡士勤方
エエ　エンネスリー

野村知縣事閣下

（其ノ四）

第二號

第二月七日附の貴札披見いたし候蒸氣環瀛丸（先名エルギン）を以異宗の者凡貳百人程當港より移轉いたし候趣御聞込の由にて虚實御問定被成度もし實事におゐて先般東京表の命を奉し候以來は宗徒を他所え移す事なしと申贈たる我十二月廿五日附書面の意に反すへしとの趣逸々承知いたし候右は全く浮説にて奉命以來は決て當港より移轉せし事更に無之尤最初より津和野藩幷松江藩え可差送百八拾三人を舟便の都合に寄十二月六日一先平戸迄遣置候を四日已前環瀛丸蒸氣船を以於田所積乘右二藩え差送候儀は有之候右は移轉差止より數十日以前此地を離れて既に半途に在之便宜事幸順に候得は疾く右二藩え着岸の筈に有之候故是は決て新規の移轉の譯に無之隨て我書翰の意味に反する事にも無之と存候此段了解被致度候謹言

明治三年正月九日

野村知縣事

英岡士代　エエ　エンネスリー足下

（其ノ五）

巳十二月改

浪の平山手乙壹番天主堂借地

佛　ロカニー
同　ロール
同　ウイリヨン

佛　パリエー

註二、本號文書ハ一括綴ラレアリ（其ノ一）ノ端書ハ（其ノ一）ヨリ（其ノ五）ニ至ル凡テノ文書ニ係ル

二〇六　一月二十二日（二月二十二日）獨逸北部聯邦代理公使提出ノ同國長崎領事館ヨリノ見聞書

浦上村等耶蘇教徒處置ニ關スル件

正月廿二日

一千八百七拾年第二月五日附長崎住居の獨逸北部聯邦岡士役所より達候書留

飜譯

一見聞の次第を今書取候扨切支丹宗徒の行跡は今迄惡敷事無之候各國の岡士は當港の官員と相談致し候時右官員の被申候には切支丹宗徒は爭鬪の事件を引起し不申候得共右の宗徒を浦上より他に移し可申旨東京より命を請且其處置を施す爲に東京より官員罷越候右の宗徒を國々え移し家族もともに遣し且苛酷の處置なく寛典の處置に取計旨被申候依て各國の岡士は見聞の次第を横濱のミニスト

ルえ書取遣し候故彼の方より我等え命令有之迄東京より申付られ候處置を遲延被致度諫候得共官吏は其計ひ致す役にあらすと申東京の命に隨ひ右相談の翌日切支丹宗徒を諸藩え引移され候今左に述るは我自分に見分致し候故書取て閣下え入御覽候扨右の宗徒は長崎の近邊凡一二里程隔り候浦上といらかみと一本木と申村村に住宅致し居候此村を見分に罷越候處明家の戸障子窓破損致し家々の廻りに打散し有之候尤外の道具は棚に置合有之候拙者の愚案にては此家々の人を火急に威勢にて移し候故此處置を取行ひし人後にて取壞し候やと存候浦上といらかみとの壞しは格別の事に無之候尤數多明家の錠前の下に書付を張有之候此書付は政府の印に宜似寄申候一本木村に住居致し候者の立退は尤早き樣に被存候寛典の處置には無之樣見請申候且右の村々切支丹宗徒に無之者共滯居候其人民の噂には切支丹宗徒は常に夜中に搦連行れ候尤右の宗徒は貧乏の人多き故平常有德の百姓は毎日小作に雇ひ候種々の仕事を成て常々よく行ひ候より其外に右の百姓より小作の田畑を預り申候此明家と切支丹宗徒の田畑に札を建若切支丹宗徒の作物を用ひ候者は嚴科に可行と書付有之候扨又並の百姓は田植の節に至り候はゝ小作の者なき故困り候と噂致し居候且又右明家の内有德の家は少く外は村の家故此移されし人々は實に貧乏の人々と被存候尤移されし人の内に職人も交りをり候と承り候右の書取閣下え入御覽候日本の官員より苛酷の處置は決して不致旨誓て被申候は拙者の思案にては信用難致存候且寛典の處置に有之と申事に候得共拙者の見請しとは大に齟齬致し候將又長崎の人民も右切支丹宗徒の處置振を哀み申候

註　右文書ハ其ノ説明書竝ニ二〇七端書ニヨリ在長崎獨逸北部聯邦領事館ヨリ同國代理公使宛發セラレタルモノノ和譯文ナル處之カ我方ニ提示セラレタル經緯詳ナラス思フニ本文書ト二〇七トハ夫々其ノ端書ヨリ察シ又「各國往復書翰目錄」ニ徵シ正月二十二日一括シテ外務省内ニ回覽セラレタルモノト認メラル

二〇七　一月二十二日（二月十二日）　長崎縣官員ノ獨逸北部聯邦代理公使ニ對スル回答覺書

浦上村等耶蘇教徒處置ニ關スル件

（朱書）「庚午正月廿二日
長崎縣の官員李漏生公使より差出せる浦上宗徒の事に答ふる覺書」

古法にては彼等外に惡事なしと雖も嚴禁の宗旨を拜すれは嚴刑にも處せらるへき筈なれとも今般非常の寛典を以て藩々に移住を命せられしか彼等の家族は離散の患なき樣同所に送られ其藩々にて住居を與へ夫々產業に就け安堵さする樣　御布令ありて彼等にも其趣を篤く說諭せしに皆々出發の用意して集り來りし故乘船し聊威勢を以て所置せし事なし況や夜中搦取り連越せしとの噂あるとは大なる妄談なり又各國岡士より右移住の事を東京ミニストルの許に掛合ひ其返答來る迄猶豫する樣相談ありしが長崎縣にては政府の命令に叛くこと能はさりしこと論するに及はす偖空舍に殘せし家財等官より取纏め預かりしに諸所に於て數百軒一時に空舍となりし故總て封印等を付るため相當の時日を費したり又宗徒の田畑に札を建て若切支丹宗徒の作物を用ひ候者は嚴科に行ふへきと書付あるとの事は決してなし是は彼等悉く退散の後に他の農民等彼等の田畠を勝手に荒さゝる樣官より嚴に戒る制札なり他の農民共小作の者少きを困るとの說は左もあるへし併し追々他所より轉居の者增加せは舊に復すへし將た長崎の市民も彼等移住の日雨天寒風にて眼前の樣子を憐と思ひたるもあるへけれとも元來彼等の蒙昧頑愚にして國禁を犯し官府に煩勞を懸るを恐多く思はさるはなかりし併し犯法の嚴刑に處せられす却て右樣の取扱を受るは實に大なる寛典なりと知るへし

二〇八　一月二十四日（二月二十四日）　靜岡藩公用人杉山秀太郎等ヨリ外務省宛

浦上村耶蘇教徒處置及宣教師ノ日本人ヘノ布教禁止ニ關スル平山省齋ノ答申書送付ノ件

附屬書　一月靜岡藩士平山省齋ノ右答申書

耶蘇教の儀先年長崎浦上村農民共え教僧勸誘いたし候事件に付佛蘭西政府より書面差出候由を以右書類有之候はゝ差出可申旨御達御坐候に付至急早追を以靜岡表え申遣候處向山隼人儀は聢と承知不罷在同藩士平山省齋承知罷在候哉の趣申越候に付其段過日申上置昨廿三日別紙の通省齋心得罷在候廉申越候得共究竟佛蘭西政府より差出候書面有無の義